

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第254集

都城市所在

かみたか

上高遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書3

2020

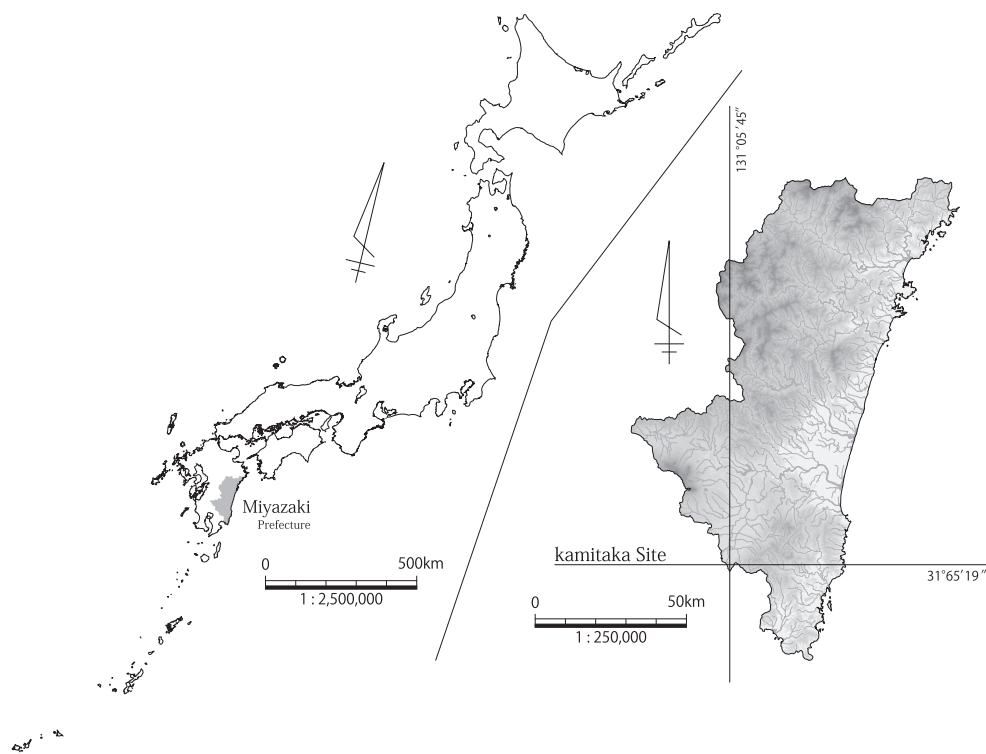
宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

かみ たか
上高遺跡

kamitaka Site

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 3



2020

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、地域高規格道路「都城志布志道路」の一部となる県道飯野松山都城線金御岳工区道路改良工事に伴い、平成29年度から平成30年度にかけて都城市梅北町に所在する上高遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

上高遺跡では、縄文時代早期の数多くの集石遺構をはじめ、縄文時代前期～中期の陥し穴状遺構や竪穴建物跡、縄文時代後期～晩期の遺構や遺物、中世の道路状遺構など、様々な時代の遺構・遺物が検出され、この地において連綿として続いてきた人々の営みを明らかにすることができました。それらは、梅北地区をはじめとする都城盆地南部の歴史を解明する上で、重要な位置を占めるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 山元高光

例 言

- 1 本書は、県道飯野松山都城線（志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県都城市梅北町に所在する上高遺跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査は都城土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。第1次調査は平成29年5月8日から平成30年2月28日までの178日間、第2次調査は平成30年4月16日から平成30年7月4日までの44日間の2ヵ年度にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、平井祥蔵、和田理啓、高村哲、徳田尚文、下田代清海が担当した。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 調査に際しては、世界測地系に準拠した10mグリッドを設定した。この座標グリッドにアルファベットと整数で名称を与え、この区画を基準として遺構等の図化作業を行った。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、平井祥蔵が整理作業員の補助を得て行った。
- 6 グリッド杭設置に伴う測量業務、空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定、樹種同定）、石器実測は、次の業者に委託した。
 - ・ 測量業務委託 株式会社 南日本総合コンサルタント
 - ・ 空中写真撮影 株式会社 ふじた・有限会社 スカイサーベイ九州
 - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
 - ・ 石器実測委託 株式会社 島田組
- 7 本書で使用した第2図「上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1『都城』『末吉』をもとに作成した。
- 8 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 9 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 10 本書の執筆は、平井祥蔵が行い、今塩屋毅行がこれを補助した。なお、第Ⅳ章の報告記載内容は、古環境研究センターへの委託成果品を平井が整理・編集したものである。
- 11 石材・テフラの同定については、当埋蔵文化財センター職員である赤崎広志の協力を得た。
- 12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。

SA：堅穴建物跡

SC：土坑

SI：集石遺構

SG：道路状遺構

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の方法と経過	2
第4節 整理作業及び報告書作成	4

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5

第III章 調査の成果

第1節 基本層序	8
第2節 縄文時代早期の遺構と遺物	12
第3節 縄文時代前期～中期の遺構と遺物	26
第4節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物	34
第5節 古代の遺物	73
第6節 中世の遺構	74

第IV章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要	85
第2節 放射性炭素年代測定	85
第3節 樹種同定	85

第V章 総括

第1節 縄文時代早期	89
第2節 縄文時代前期～中期	89
第3節 縄文時代後期の遺物	90
第4節 縄文時代晩期の遺構と遺物	90
第5節 古代の遺物	91
第6節 中世の遺構	91
第7節 結語	92

挿 図 目 次

<p>第1図 調査区及びグリッド配置図 2</p> <p>第2図 上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図 7</p> <p>第3図 上高遺跡周辺地形図 9</p> <p>第4図 調査区内の堆積層残存状況 9</p> <p>第5-1図 土層断面図 10</p> <p>第5-2図 土層断面図 11</p> <p>第6図 散礫平面分布図 12</p> <p>第7図 縄文時代早期遺構分布図 13</p> <p>第8図 1～3・5～7号集石遺構実測図 16</p> <p>第9図 4・8～11号集石遺構実測図 17</p> <p>第10図 12～17号集石遺構実測図 18</p> <p>第11図 18・19号集石遺構実測図 19</p> <p>第12図 20・21号集石遺構実測図 20</p> <p>第13図 22・23号集石遺構実測図 21</p> <p>第14図 24号集石遺構実測図 22</p> <p>第15図 25・76号土坑実測図 22</p> <p>第16図 25号土坑出土遺物実測図 23</p> <p>第17図 縄文時代早期土器実測図 24</p> <p>第18図 縄文時代早期土器及び石器実測図 25</p> <p>第19図 縄文時代前期～中期遺構分布図 27</p> <p>第20図 1・2号竪穴建物跡及び出土遺物実測図 29</p> <p>第21図 26・29・30・42・73・74号土坑実測図 30</p> <p>第22図 75・77号土坑及び 27・28号土坑(陥し穴状遺構)実測図 32</p> <p>第23図 68・70・72号土坑(陥し穴状遺構)実測図 33</p> <p>第24図 縄文時代後期～晩期遺構分布図 35</p> <p>第25図 1・4・6・9・11・15号土坑実測図 36</p> <p>第26図 1・11号土坑出土遺物実測図 37</p> <p>第27図 11号土坑出土遺物実測図 38</p> <p>第28図 17・19・21・23・24・31・34・35号土坑実測図 40</p> <p>第29図 23号土坑出土遺物実測図 41</p>	<p>第30図 23・24・34・36号土坑出土遺物実測図 42</p> <p>第31図 36・40・41・43号土坑実測図 44</p> <p>第32図 40・41号土坑出土遺物実測図 45</p> <p>第33図 41号土坑出土遺物実測図(1) 46</p> <p>第34図 41号土坑出土遺物実測図(2) 47</p> <p>第35図 41・43号土坑出土遺物実測図 48</p> <p>第36図 52～55・57・58号土坑実測図 50</p> <p>第37図 59～61・65号土坑実測図 52</p> <p>第38図 55・57・59・60号土坑出土遺物実測図 53</p> <p>第39図 61・65号土坑出土遺物実測図 54</p> <p>第40図 66・67・71号土坑及び66号土坑 出土遺物実測図 55</p> <p>第41図 66・67・71号土坑出土遺物実測図 56</p> <p>第42図 縄文時代後期土器実測図 59</p> <p>第43図 縄文時代晩期土器実測図(1) 60</p> <p>第44図 縄文時代晩期土器実測図(2) 61</p> <p>第45図 縄文時代晩期土器実測図(3) 62</p> <p>第46図 縄文時代晩期土器実測図(4) 63</p> <p>第47図 縄文時代晩期土器実測図(5) 64</p> <p>第48図 縄文時代晩期土器実測図(6) 65</p> <p>第49図 縄文時代晩期土器実測図(7) 66</p> <p>第50図 縄文時代晩期土器実測図(8) 67</p> <p>第51図 縄文時代晩期土器実測図(9) 68</p> <p>第52図 縄文時代後期～晩期石器実測図(1) 70</p> <p>第53図 縄文時代後期～晩期石器実測図(2) 71</p> <p>第54図 縄文時代後期～晩期石器実測図(3) 72</p> <p>第55図 縄文時代後期～晩期石器実測図(4) 73</p> <p>第56図 古代の土器類実測図 74</p> <p>第57図 道路状遺構分布図 75</p> <p>第58図 道路状遺構土層断面実測図 77</p> <p>第59図 暦年較正結果 87</p>
---	--

表 目 次

第1表	土器観察表(1)	78	第8表	石器計測表	84
第2表	土器観察表(2)	79	第9表	測定試料の詳細と方法	87
第3表	土器観察表(3)	80	第10表	放射性炭素年代測定結果	87
第4表	土器観察表(4)	81	第11表	樹種同定結果	88
第5表	土器観察表(5)	82	第12表	各土坑における入佐式・黒川式土器 の細分型式	91
第6表	土器観察表(6)	83			
第7表	土器観察表(7)	84			

写 真 目 次

写真1	タール状物質・炭化材写真	88
-----	------------------------	----

図 版 目 次

図版1	上高遺跡から霧島山を望む 上高遺跡周辺地形	図版7	2号竪穴建物跡 柱穴	2号竪穴建物跡 貼床除去
図版2	調査区から都城中心市街地を望む 調査区から鹿児島県志布志市方面を望む		27号土坑土層断面	27号土坑完掘状況
図版3	上高遺跡全景(縄文時代早期遺構)		68号土坑検出状況	68号土坑完掘状況
図版4	25号土坑遺物出土状況 10号集石遺構検出状況 12号集石遺構検出状況 16号集石遺構検出状況 21号集石遺構検出状況 23号集石遺構検出状況 24号集石遺構検出状況 集石遺構検出作業の様子		調査区基本層序	樹根除去作業の様子
図版5	縄文時代前期～中期の遺構群	図版8	72号土坑土層断面	72号土坑完掘状況
図版6	1号竪穴建物跡検出状況 1号竪穴建物跡完掘状況 2号竪穴建物跡検出状況 2号竪穴建物跡土層断面 2号竪穴建物跡全景		72号土坑精査の様子	
			75号土坑と風倒木痕の検出状況	
		図版9	75号土坑土層断面	
			74・75・77号土坑完掘状況 発掘作業の様子	
		図版10	上高遺跡全景(縄文時代晩期遺構)	
			縄文時代晩期の土坑群	
			1号土坑検出状況	1号土坑完掘状況
			11号土坑遺物出土状況	11号土坑土層断面

図版11

23号土坑遺物出土状況	23号土坑完掘状況
40号土坑遺物出土状況	40号土坑完掘状況
41号土坑遺物出土状況	41号土坑完掘状況
65号土坑遺物出土状況	66号土坑遺物出土状況

図版12

中世の道路状遺構全景
道路状遺構から調査区南方向を望む
道路状遺構検出状況 道路状遺構土層断面 1
道路状遺構土層断面 2 波板凹凸面検出状況

図版13 縄文時代早期・前期～中期の遺物

SC25出土土器(縄文時代早期)
縄文時代早期 包含層出土土器(1)～(3)
縄文時代早期・前期～中期の石器

図版14 縄文時代晩期の遺構出土遺物

SC1出土土器 SC11出土土器(1)(2)
SC23出土土器(1)(2)
SC23出土石器 SC24・34・36出土土器・石器
SC40出土土器・石器

図版15 縄文時代晩期の遺構出土土器

SC41出土土器(1)～(7)

図版16 縄文時代晩期の遺構出土土器

SC43出土土器 SC55・57出土土器
SC59出土石器 SC60出土土器
SC61・65出土土器 SC65出土土器
SC66出土土器・石器
SC67・71出土土器

図版17 縄文時代後期～晩期の土器

縄文時代後期 包含層出土土器
縄文時代晩期 包含層出土土器(1)～(5)

図版18 縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期 包含層出土土器(6)～(11)

図版19 縄文時代晩期の土器

縄文時代晩期 包含層出土土器(12)～(19)

図版20 縄文時代後期～晩期の石器・古代の遺物

縄文時代後期～晩期 包含層出土石器(1)～(5)
古代の遺物

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

地域高規格道路「都城志布志道路」は、宮崎県都城市を起点に鹿児島県曽於市を經由して志布志市に至る、総延長約 44 km の自動車専用道路である。この道路は、都城・大隅定住自立圏の地域振興や防災・経済・医療対策の機能強化を図るため、九州縦貫自動車道宮崎線（都城 I.C）と東九州自動車道（志布志 I.C）および物流拠点である中核国際港湾の志布志港を結ぶ路線であり、平成 6 年 12 月に計画路線に指定された。

都城志布志道路のうち、宮崎県側では約 22 km が工事施工区間であり、その路線構成は都城 I.C－五十町 I.C 間（約 13.4 km）が一般国道 10 号都城道路（国土交通省事業）、五十町 I.C－県境（約 8.5 km）が県道 12 号都城東環状線および県道 109 号飯野松山都城線のバイパス（県事業）である。

当該路線内の埋蔵文化財については、25 遺跡 393,700 m² の存在が把握されており、平成 9 年度以降、宮崎県教育庁文化財課による試掘・確認調査の結果をもとに、工事計画と遺跡の保護に関する協議調整が重ねられてきた。今回、発掘調査を実施した上高遺跡は、金御岳 I.C－県境区間（金御岳工区）内に位置する。同工区では計 5 箇所の遺跡が把握されており、これまでに保木島遺跡（平成 27・29～30 年度）、嫁坂遺跡（平成 28～29 年度）、大浦遺跡（平成 30 年度）、小迫遺跡（平成 30 年度）の発掘調査が行われている。上高遺跡では平成 28 年度実施の確認調査結果をもとに、遺跡の取り扱いに関する協議を進めた結果、遺構や遺物の存在が確認された 5,400 m² は現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

これを受けて、平成 29（2017）年 3 月、県道飯野松山都城線（金御岳工区）地域連携推進事業の一環として、県都城土木事務所より発掘調査の依頼がなされ、平成 29 年 5 月、県埋蔵文化財センターを調査機関とする発掘調査の着手へと至ったものである。

第 2 節 調査の組織

上高遺跡における発掘調査組織は下記の体制で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

事業調整：宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー（主幹） 飯田 博之 （平成 29～令和元年度）

埋蔵文化財担当主査 松本 茂 （平成 29～30 年度）

藤木 聡 （令和元年度）

発掘調査・整理作業及び報告書作成：宮崎県埋蔵文化財センター

所長 菅付 和樹 （平成 29 年度）

長峯 勝志 （平成 30 年度）

山元 高光 （令和元年度）

副所長 甲斐 久志 （平成 29 年度：兼 総務課長）

田中 礼子 （平成 30 年度：兼 総務課長）

内野 真由美 （令和元年度：兼 総務課長）

総務課長 甲斐 久志 （平成 29 年度）

田中 礼子 （平成 30 年度）

内野 真由美 （令和元年度）

副主幹兼総務担当リーダー	寺原 真由美	(平成 29 年度～平成 30 年度)
主幹兼総務担当リーダー	寺原 真由美	(令和元年度)
調査課長	吉本 正典	(平成 29 年度～平成 30 年度)
	赤崎 広志	(令和元年度)
調査課調査第一担当リーダー (主幹)	松林 豊樹	(平成 29 年度～平成 30 年度)
調査課調査第一担当リーダー (副主幹)	和田 理啓	(令和元年度)
調査課調査第一担当主査	平井 祥蔵	(平成 29・30 年度 調査担当 令和元年度 整理・報告書作成)
調査課調査第一担当主査	和田 理啓	(平成 29 年度 調査担当)
調査課調査第一担当主査	徳田 尚文	(平成 29 年度 調査担当)
調査課調査第一担当主査	高村 哲	(平成 30 年度 調査担当)
埋蔵文化財調査員	下田代清海	(平成 29 年度 調査員)

第 3 節 発掘調査の方法と経過

1 発掘調査の方法

調査区の設定

上高遺跡の発掘調査は、調査対象面積 5,400 m²を 2 箇年度に渡り実施した。調査対象範囲内には市道があり、排土置き場の確保の面などから、便宜上 A1 区 (1,200 m²)、A2 区 (1,600 m²)、B1 区 (900 m²)、B2 区 (1,200 m²)、C 区 (500 m²) の 5 地区に設定した。



第 1 図 調査区及びグリッド配置図

グリッドの設定

調査対象地域全域に対して、国土座標に (世界地系) に基づいた 10m×10m のグリッドを設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、グリッドの北西隅の交点を各々のグリッド名とした。

作図記録

遺構の作図に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については(株)CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録したが、一部の竪穴建物跡や集石遺構等、遺物出土状況を詳しく記録したのものについては調査員が実測、作図を行った。

写真記録

全調査区ともに、35mm白黒ネガ・リバーサルフィルムを基本として、一部中判カメラによる白黒ネガ・カラーリバーサルフィルム撮影を行った。また、メモ記録として、デジタルカメラを併用した。なお、各調査区のV層、X層のそれぞれ上面において、業者委託による空中写真撮影を行った。

遺構番号

遺構番号は、検出された遺構別にA区～C区通しての連番で振った。ただし、土坑(SC)については、遺構の形態や埋土の状況といった調査時の所見や報告書作成段階での検討により、攪乱や樹痕等と判断したものが存在するため、正式報告にあたっては、下記の土坑番号についてはこれを除外する。

SC2・SC3・SC5・SC7・SC8・SC10・SC12～14・SC16・SC18・SC20・SC22・SC32・SC33・SC37～39・SC44～51 SC56・SC62～64・SC69・SC76
--

2 発掘調査の経過

第1次調査は、A1区～B2区(4,900㎡)を対象に平成29年5月8日～平成30年2月28日まで実施した。第2次調査は、市道部分のC区を平成30年4月16日～平成30年7月4日まで実施した。

なお、5つの調査区は互いに隣接しているため、区ごとではなく、調査区全体の調査成果として報告する。各調査区における発掘調査経過の概要については、下記の通りである。

A1区

H29.5.8～18	重機による表土除去
5.23～26	樹根等の除去作業
6.5～9	縄文時代後期・晩期の遺物包含層(IV層)掘削
6.5～13	道路状遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.13～29	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.16～7.21	V層上面にて空中写真撮影・V層～IX層掘削
7.18～8.1	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
7.26	X層上面にて空中写真撮影
7.28～8.1	埋め戻し、調査終了

A2区

H29.8.2～10	重機による表土除去
8.16～25	樹根等の除去作業
9.4～13	縄文時代後期・晩期の遺物包含層(IV層)掘削
9.7～26	A1区より続く道路状遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
9.11～10.4	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
9.26	V層上面にて空中写真撮影
10.10～25	IX層掘削
10.26	X層上面にて空中写真撮影
10.23～11.13	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の土坑・集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
11.13～14	埋め戻し、調査終了

B1 区

H29.11.14 ~ 20	重機による表土除去
11.15 ~ 29	縄文時代後期・晩期の遺物包含層（IV層）掘削
12.4 ~ 12.15	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
12.12	V層上面にて空中写真撮影
12.14 ~ 25	IX層掘削
12.21 ~ 12.20	縄文時代早期の遺構掘削及び実測
12.26	X層上面にて空中写真撮影
12.15 ~ H30.1.30	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 埋戻し、調査終了

B2 区

H30.1.9 ~ 12	重機による表土除去
1.12 ~ 25	縄文時代後期・晩期の遺物包含層（IV層）掘削
1.19 ~ 2.7	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
2.5	V層上面にて空中写真撮影
2.8 ~ 16	IX層掘削
2.9 ~ 22	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
2.26	X層上面にて空中写真撮影
2.27 ~ 28	埋め戻し、調査終了

C 区

H30.4.25 ~ 26	重機による表土除去
5.1 ~ 16	縄文時代後期・晩期の遺物包含層（IV層）掘削
5.17 ~ 28	縄文時代後期・晩期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
5.28	V層上面にて空中写真撮影
5.29 ~ 6.15	IX層掘削
6.4 ~ 7.2	縄文時代前期・中期の遺構を検出し、掘削及び実測を行った。 縄文時代早期の集石遺構を検出し、掘削及び実測を行った。
6.27	X層上面にて空中写真撮影
7.2 ~ 4	埋め戻し、調査終了

第4節 整理作業及び報告書作成

出土品及び記録物を宮崎県埋蔵文化財センターへ持ち帰り、遺物洗浄及び注記作業を平成30年4月～8月まで行った。注記作業終了後は、接合作業を平成30年9月～平成31年3月まで行った後、平成31年4月～令和元年7月まで実測作業を行った。

このほか業務委託として、石器の実測を令和元年5月より、炭化樹種同定・放射性炭素年代測定のための蛍光X線分析を6月より行った。そして報告書刊行に係る製図及び執筆編集作業の全てを同年12月までに完了させ、1月から3月にかけて印刷・製本作業を行った。

また、報告書作成期間中の平成30年9月2日に遺跡発掘速報会（於宮崎県立図書館）を行った。



【速報会の様子】

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

上高遺跡は宮崎県都城市梅北町に所在する。都城市は、宮崎県の南西端に位置する人口約17万人を擁する県内第2の都市である。また、宮崎市、日南市、串間市、三股町、高原町、鹿児島県曾於市・霧島市の5市2町に隣接している南九州第3の中核的な拠点都市である。市域は約650km²と広く、東に鰐塚山系、西に霧島山系の山々に囲まれた盆地となっており、盆地底には一級河川の大淀川が北流している。また、盆地の東側には大淀川の支流によって開析された扇状地が発達しており、西側では広大な成層シラス台地が広がっている。

盆地周辺には、活火山も多く存在し、平成23年に噴火した新燃岳が、本調査期間において6年ぶりに再噴火しており、霧島火山群や始良カルデラを中心とする南九州の火山活動は、都城盆地に住む人々の活動に大きな影響を今も与え続けている。

今回、調査を実施した上高遺跡は、都城市の中心部から南に約8kmの梅北町に位置し、鰐塚山系南端部の金御岳から派生する丘陵の裾部に立地し、標高200mのシラス台地上位面に立地する。(図版1・第2・3図)

第2節 歴史的環境

旧石器時代

宮崎県内では、宮崎平野や県北の五ヶ瀬川流域を中心に300箇所を超える旧石器時代の遺跡が確認されているが、都城盆地一帯では、シラスをはじめとする厚い火山灰に覆われているため、当該期の発掘調査事例は数少ない。そのなかでも、大岩田上村遺跡、中床丸遺跡、池増遺跡、雀ヶ野遺跡等では、細石刃石器群の存在が確認されている。

縄文時代

草創期の遺跡としては、県内最古級の土器片と細石刃が共伴して出土した軍人原遺跡がある。また、王子山遺跡では、竪穴状遺構・炉穴・集石遺構等や隆帯文土器が検出された。また、本遺跡の周辺には、隆帯文土器が出土した川原谷出水遺跡や、桜島薩摩テフラを含む層の下部から集石遺構が検出された笹ヶ崎遺跡もある。

早期の遺跡としては、都城志布志道路建設に伴って発掘調査を行った笹ヶ崎遺跡、中床丸遺跡、高樋遺跡、2019年報告分の嫁坂遺跡（以下、嫁坂遺跡と略す）において集石遺構等が検出された事例がある。また、これらの遺跡では貝殻文円筒形土器（前平式・加栗山式・石坂式・下剥峰式、桑ノ丸式）、押型文土器の他、塞ノ神式土器なども出土している。

前期は、鬼界アカホヤ火山灰による影響のためか、遺跡数は少なくなる。加治屋A遺跡では陥し穴遺構が検出されており、王子原遺跡で轟B式と曾畑式、笹ヶ崎遺跡で曾畑式土器が出土している。

中期も前期同様に遺跡数は少ないが、伊勢谷第1遺跡、田谷・尻枝遺跡では陥し穴遺構が検出されている。また、笹ヶ崎遺跡と高樋遺跡において、比較的まとまった量の深浦式土器が出土しており、高樋遺跡では集石遺構と土坑が検出されている。

なお、前期～中期の所産と考えられている陥し穴状遺構が梅北佐土原遺跡で検出されている。

後期になると遺跡の数が増加し、都城盆地全体、特に丘陵の尾根部や裾部、台地の縁辺さらには扇状地上に立地するようになる。また、竪穴建物跡や土坑といった集落そのものの様相が読みとれる発掘調査事例も多くなる。本遺跡周辺では、中床丸遺跡で市来式土器や草野式土器、磨消縄文土器などが多数出土している。また、

嫁坂遺跡では、竪穴建物跡から中岳Ⅱ式土器、宮之迫式土器が出土しており、他にも三万田式土器、御領式土器、鳥居原式土器などが包含層より出土している。

晩期では、本遺跡周辺においては、高樋遺跡、笹ヶ崎遺跡、大年遺跡、嫁坂遺跡など黒川式土器の時期を中心とする遺跡が数多く調査されている。同じく嫁坂遺跡でも、竪穴建物跡から入佐式土器が出土している。

弥生時代

都城盆地では、坂元A遺跡において、弥生時代の早い段階から古代・中世までの水田の移り変わりを見ることができる。また、中期後半の水田跡からは、木製品や丸杭などがまとまって出土している。黒土遺跡では擦り切り孔を有する石庖丁や靱圧痕を有する土器片などが出土している。集落跡としては、筆無遺跡や働女木遺跡、大岩田村ノ前遺跡、大浦遺跡があげられ、中期後半以降の集落が多くみられる。本遺跡周辺では、大年遺跡から刻目突帯文土器や表面に赤色顔料を塗布した壺の破片が出土しており、後期後半から古墳時代初頭の集落が確認されている。

古墳時代

都城盆地は、南部九州特有の墓制である地下式横穴墓の一大分布圏であるが、盆地の北縁部には高城牧ノ原古墳群、志和池古墳群、高崎古墳群に代表される高塚墳が集中する。また、野添遺跡、平峰遺跡、笹ヶ崎遺跡、高樋遺跡、大年遺跡では中期頃の集落跡が確認され、なかでも平峰遺跡は、多角形建物を含む大規模な集落であり、鉄挺をはじめ多くの鍛冶関連遺物や陶質土器、仕切付角鉢などの特殊な遺物が出土している。また、大年遺跡、高樋遺跡でも鍛冶関連遺物が多く出土している。

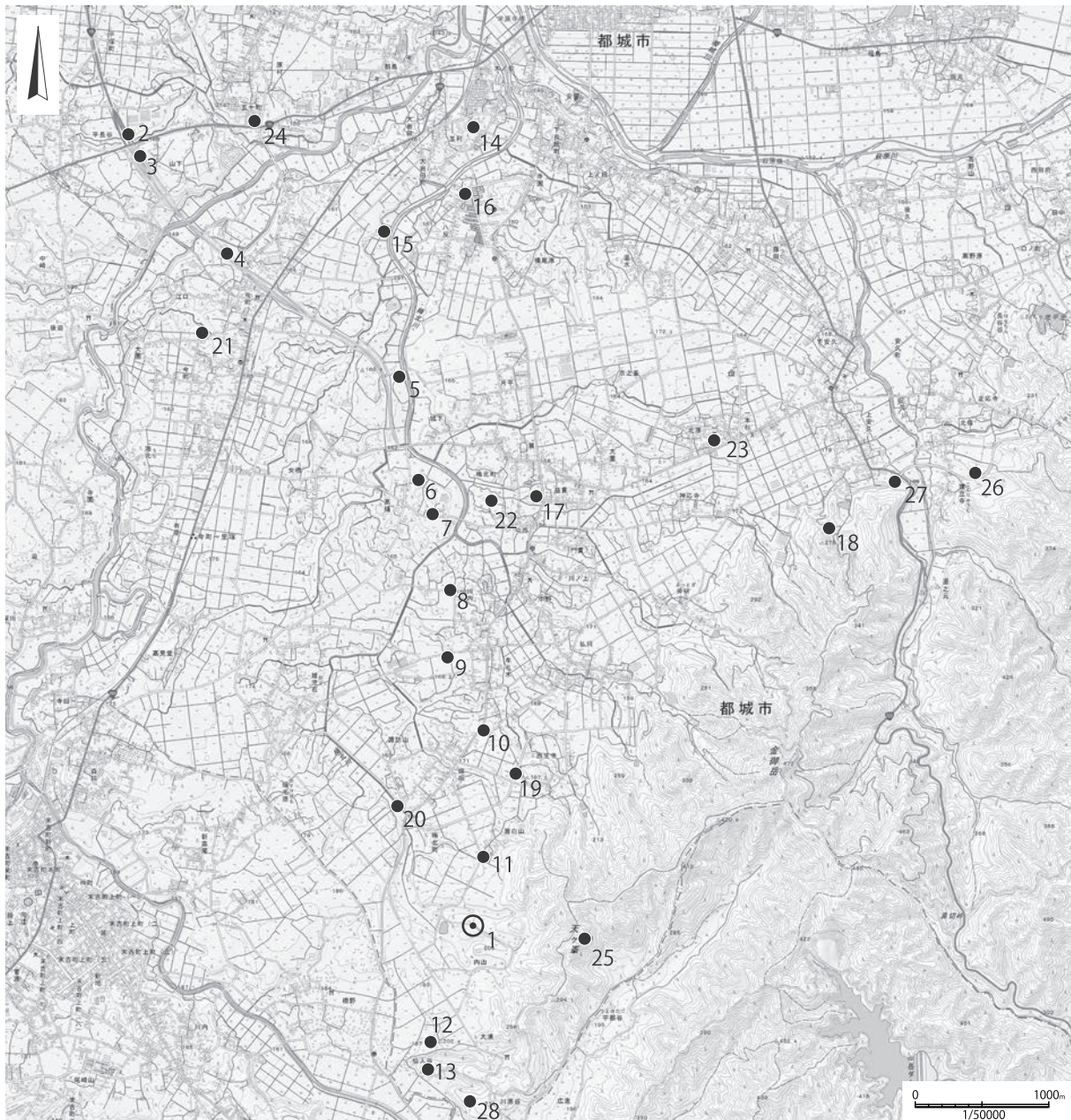
古代～中世

本遺跡が所在する梅北地区には古代から中世の遺跡が数多く調査されている。梅北針谷遺跡では、古代を中心とする掘立柱建物跡に加え、焼土を伴う多数の土坑から、多くの鍛冶関連遺物が出土している。筆無遺跡では、溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡や周溝墓、土坑墓などが確認され、文明年間に降下した桜島起源の白ボラによって埋没、復旧した畠跡とみられる畝間状遺構も検出されている。同様の遺構は、大年遺跡、笹ヶ崎遺跡でも確認されており、笹ヶ崎遺跡では、掘立柱建物跡や溝状遺構とともに犬走状遺構や堀切、土塁といった遺構が検出され、防御施設を備えた中世居館であった可能性が高い。

梅北地区は、島津荘の祖とされる平季基関連の史跡などが多く分布されることも特徴の一つである。季基は万寿3（1026）年頃に当地に下向し、三俣院の主として益貫に居住したとされている。また、梅北川東岸の丘陵地に立地し、四つの曲輪からなる群郭式城館跡と知られる梅北城は、平季基の築城と伝えられている。現在は、城の中央部を残すのみであるが、その北側と東側には土塁が現存し、空堀もほぼ原形をとどめている。

近世

中世以降の梅北地区周辺には寺院などの宗教施設が存在していたようであるが、廃仏毀釈などの影響により現存するものは少ない。発掘調査された遺跡としては、尾崎第一遺跡（貴船寺跡）において中世末から近世に及ぶ土壇墓が数多く検出されている。また、遺跡の北西には近世の道標である今町一里塚があり、国の史跡に指定されている。



国土地理院地形図

- | | | | |
|--------------|-------------|---------------|---------------|
| 1 上高遺跡 | 2 平峰遺跡 | 3 働女木遺跡 | 4 筆無遺跡 |
| 5 梅北針谷遺跡 | 6 高樋遺跡 | 7 笹ヶ崎遺跡 | 8 大年遺跡 |
| 9 中床丸遺跡 | 10 保木島遺跡 | 11 嫁坂遺跡(2019) | 12 大浦遺跡 |
| 13 小迫遺跡 | 14 大岩田前ノ村遺跡 | 15 大岩田上村遺跡 | 16 黒土遺跡 |
| 17 尾崎第一遺跡 | 18 王子原遺跡 | 19 梅北佐土原遺跡 | 20 嫁坂遺跡(2002) |
| 21 上針谷・下針谷遺跡 | 22 梅北城跡 | 23 梅北北原遺跡 | 24 油田遺跡 |
| 25 天ヶ峰陣跡 | 26 野添遺跡 | 27 上安久遺跡 | 28 川原谷出水遺跡 |

〔1～13は都城志布志道路建設関連に伴って発掘調査を行った遺跡〕

第2図 上高遺跡周辺の主要な遺跡・史跡分布図

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序

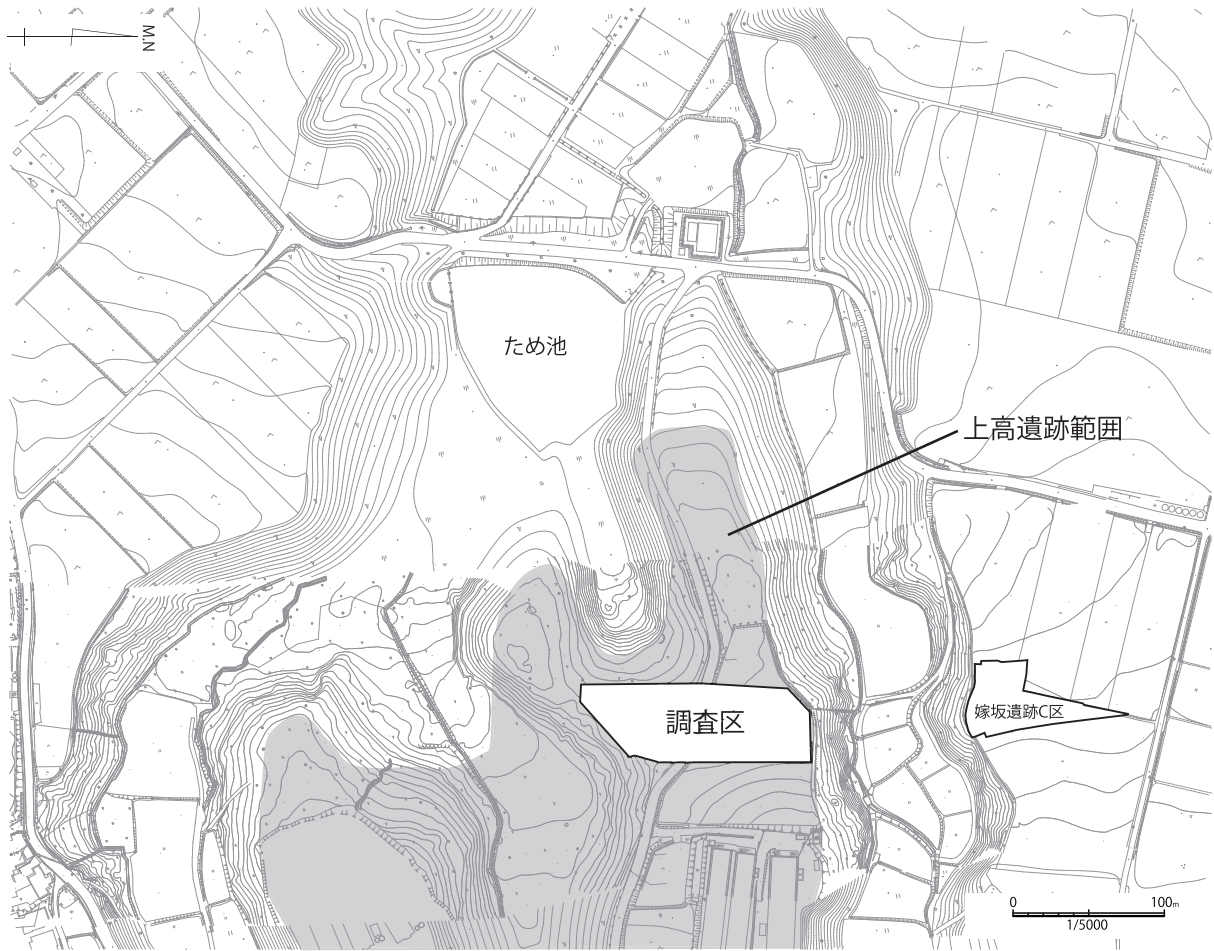
主な基本層序は下記に示すとおりである。

I層	表土（耕作土）	
II層	黒褐色土に桜島文明軽石（SZ-3、AD1471）を30%程度含む	
III層	黒褐色土【古代～中世の遺物包含層】	
IV層	暗褐色土に黄褐色軽石を1～2%程度含む【縄文時代後期～晩期の遺物包含層】	
V層	褐色土に霧島御池軽石（Kr-M、約4,600年前）を5%程度含む【縄文時代晩期の遺構検出面】	
VI層	霧島御池軽石（Kr-M、約4,600年前）	
VII層	褐色土	
VIII層	鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）	
IX層	黒褐色土 霧島牛のすね火山灰（Kr-US、約7,600年前）に 桜島11テフラ（Sz-11、約8,000年前）を30%程度含む【縄文時代早期の遺物包含層】	
X層	黒色土【縄文時代早期の遺物包含層及び集石遺構検出面】	
XI層	明黄褐色土	
XII層	黄褐色粘質土	
XIII層	にぶい黄色粘質土	
XIV層	灰白色砂質土	
XV層	オリーブ褐色粘質土	※I層～IXの堆積状況（第5図）
XVI層	浅黄色粘質土	※IX層～XIV層の堆積状況（第23図）

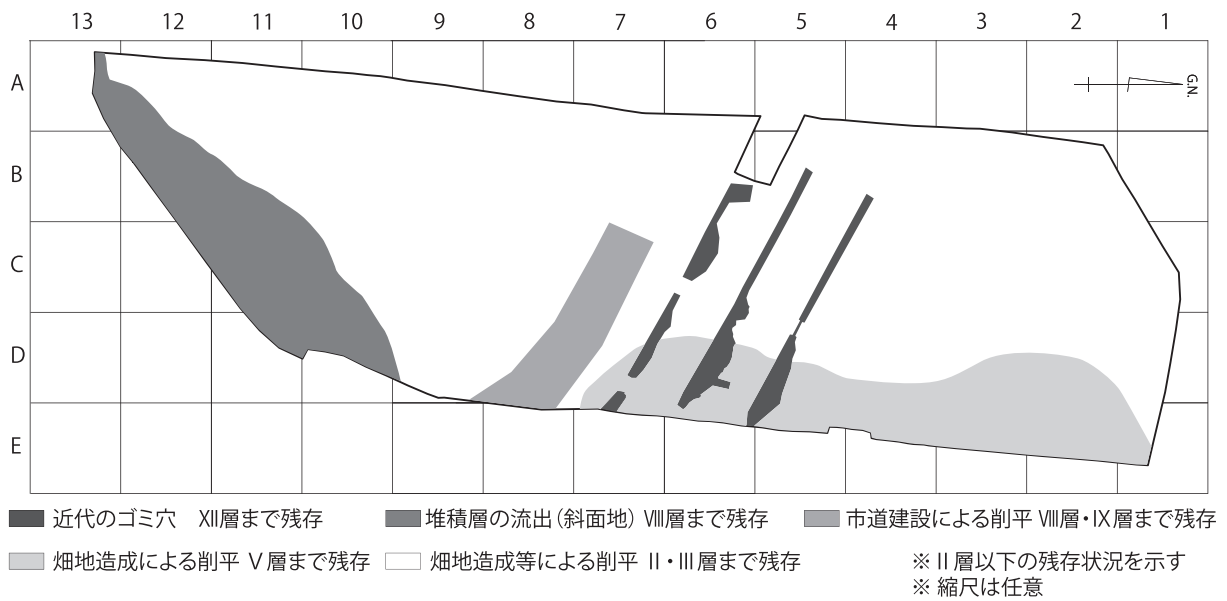
上高遺跡は、天ヶ峯の山塊から、シラス台地に向けて舌状に張り出す丘陵尾根上に立地する。遺跡の西側には数筋の谷が入り、現在は谷を塞ぎ止めた灌漑用のため池もある。今回は上高遺跡の範囲のうち、丘陵尾根から谷部にかけての部分进行调查した。（第3図）

I層は表土で、層厚は約0.3～0.7mである。II層は桜島文明軽石を含む層であるが、層厚約0.05mと堆積状況は良好とはいえない。III層は古代～中世の遺物包含層であり、しまりがあり粒子が細かい。造成による削平のため、調査区の西側に層厚約0.1mを残すのみである。IV層は縄文時代後期～晩期の遺物包含層で層厚が約0.1～0.2mであり、しまりがあり粘性が弱く粒子は細かい。調査区北東側はIV層まで削平されている。V層は縄文時代後期～晩期の遺構検出面で、やや粘性があり層厚が約0.1m、VI層の漸移層とみられる。VI層は霧島御池軽石層で、層厚約0.1～0.2mである。VII層はしまっており粒子が細かく、層厚は約0.3～0.5mである。VIII層は鬼界アカホヤ火山灰層で、層厚が厚い所で0.3m程堆積しているが、全体的に堆積状況が悪く、ブロック状で堆積している箇所も多い。IX層は縄文時代早期の遺物包含層で、硬くしまった粘質土であり、粒子が細かい。層厚は約0.4～0.6mである。X層は縄文時代早期の遺物包含層及び集石遺構検出面で、しまりがあり粘性が強く粒子は細かい。

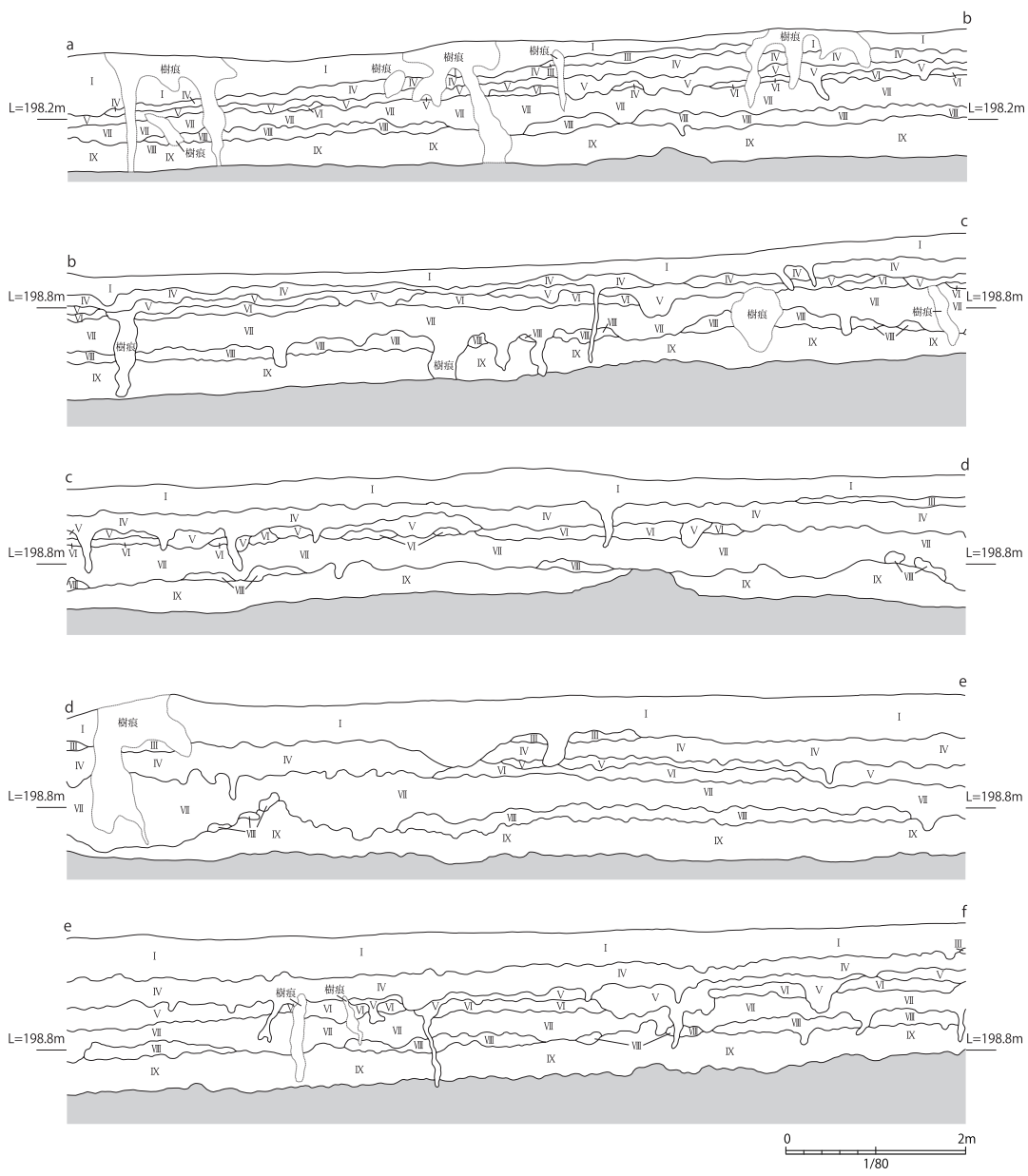
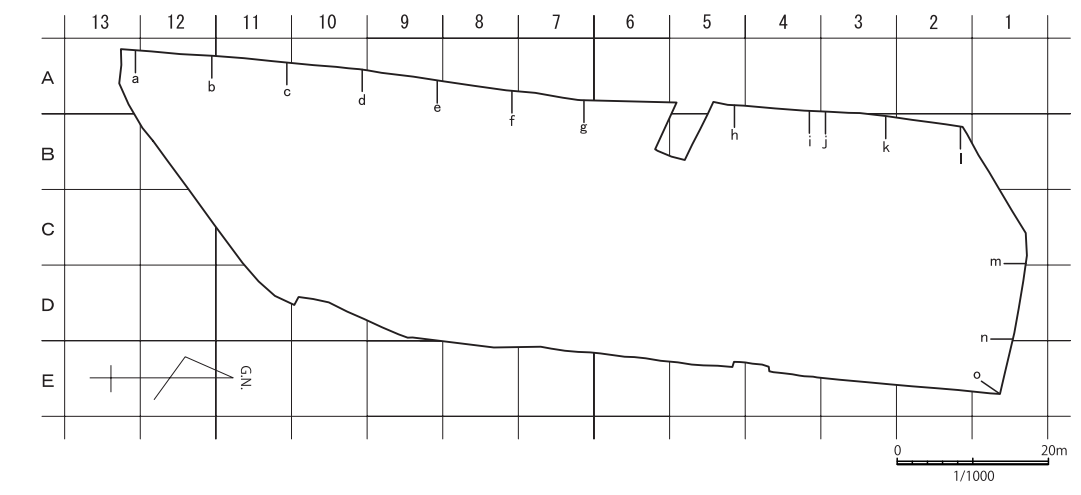
このように丘陵尾根部という遺跡立地による自然堆積層の流出に加えて、本調査区は過去の造成や市道建設時による削平によって、旧地形もかなり改変されている。第4図は、調査区内の自然堆積層（基本土層）の残存状況を示したものである。



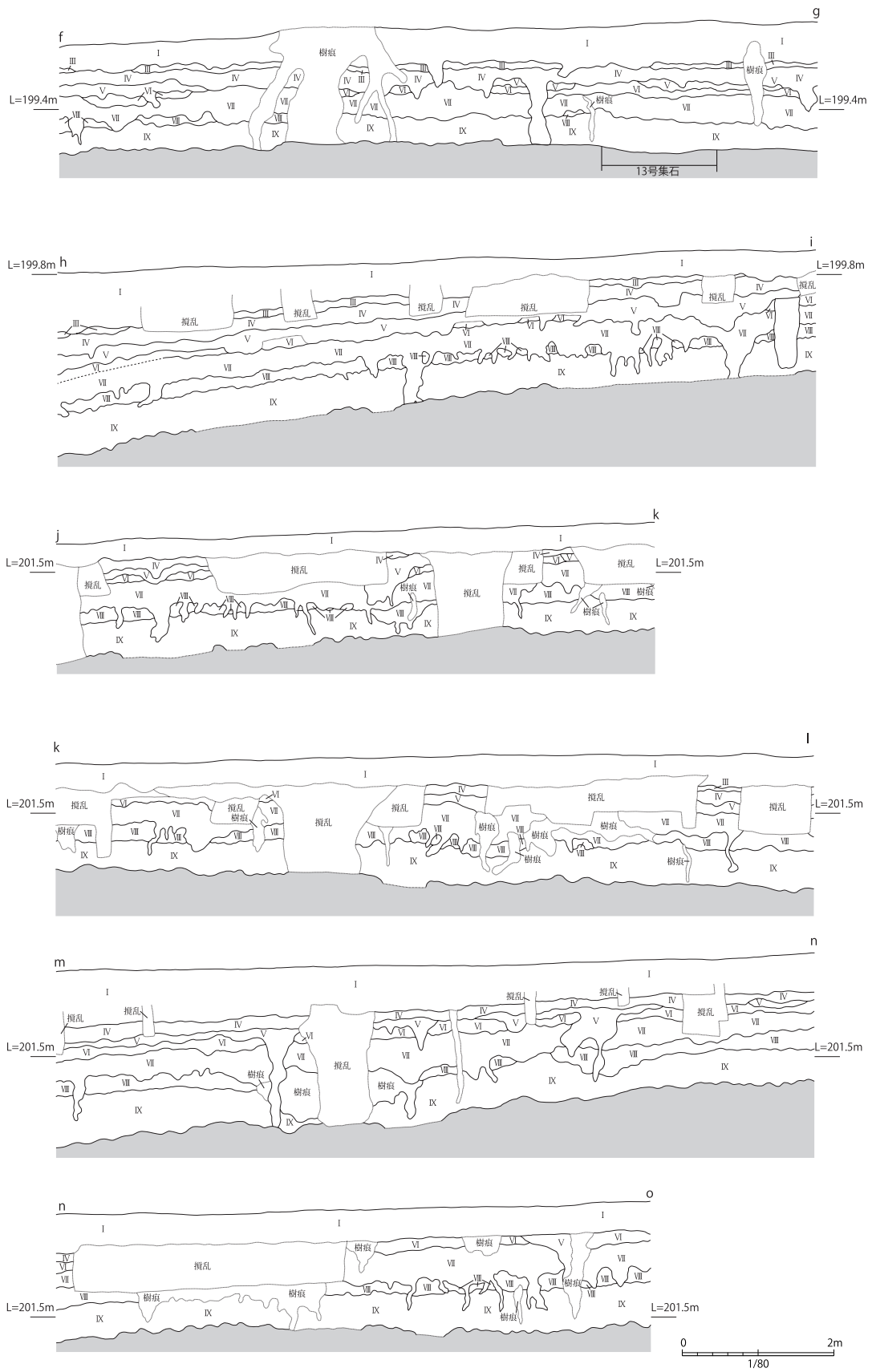
第3図 上高遺跡周辺地形図



第4図 調査区内の堆積層残存状況



第5-1図 土層断面図



第5-2图 土層断面图

第2節 縄文時代早期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代の早期の遺構としては、X層上面より集石遺構 24 基、土坑 2 基が検出された。ともに調査区西側に集中している。遺物は、調査区中央の谷を挟んだ南北の平坦面より多く出土する傾向が認められた。

(1) 集石遺構 (第8図～第14図)

IX層を掘り下げると、調査区全体に礫の分布が見られた。特に調査区の北側では、密に集中しており、これを散礫として平面分布図(第6図)を作成した。

集石遺構は、X層上面より 24 基が検出され、調査区中央の谷を挟んで、北側の一群(SI14～23)と南側(SI1～13・24)に大きく分布する。北側の一群は、B2グリッドにて遺構(SI18～23)が密に集中しており、散礫(第6図)の下から検出されたものである。南側の遺構は、南西方向へ延びる尾根筋上の等高線に沿って散在するあり方である。

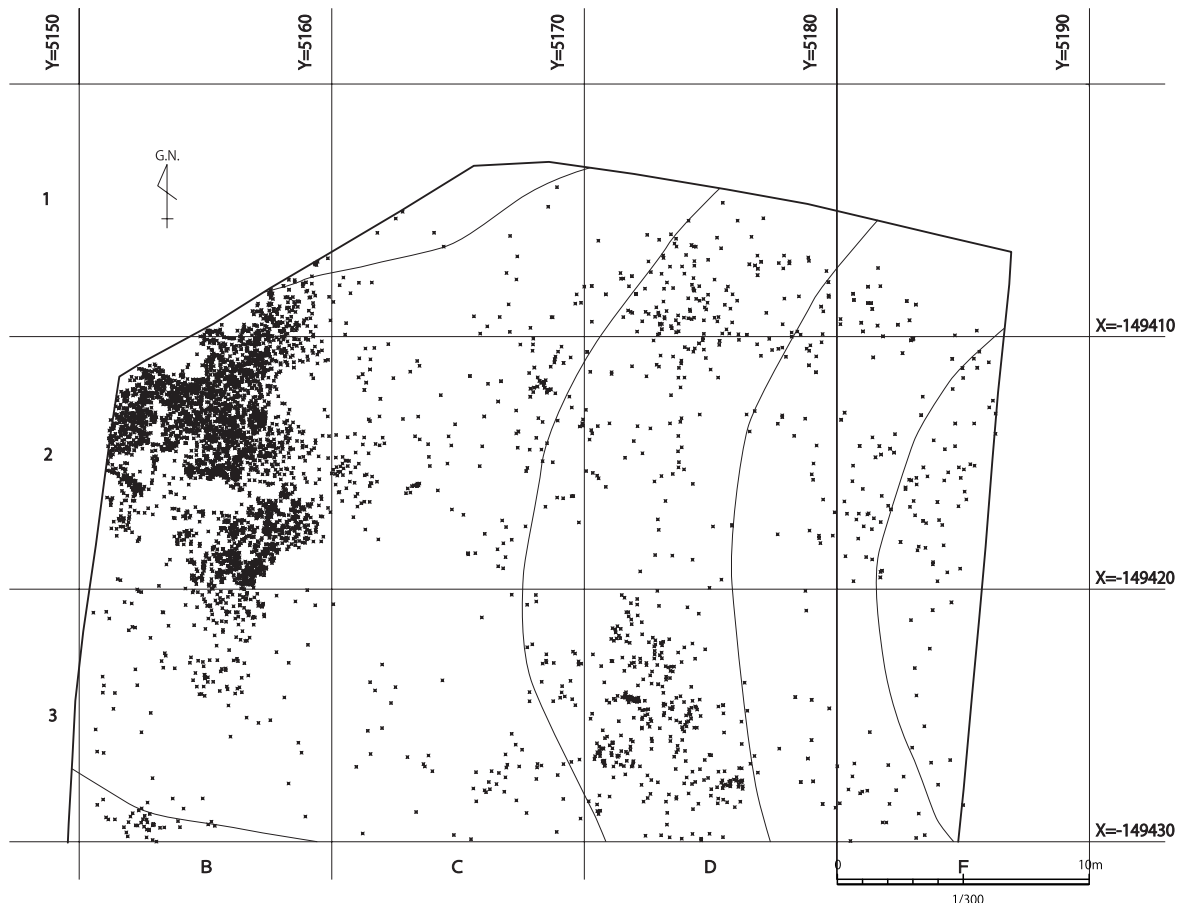
集石遺構の構成礫は破片化の著しい角礫で、一部が被熱により赤化しており、その石材はすべて砂岩である。また、集石遺構の掘り込みをもつものは 15 基(SI4・7～10・12・15・17～24)である。

1号集石遺構(第8図)

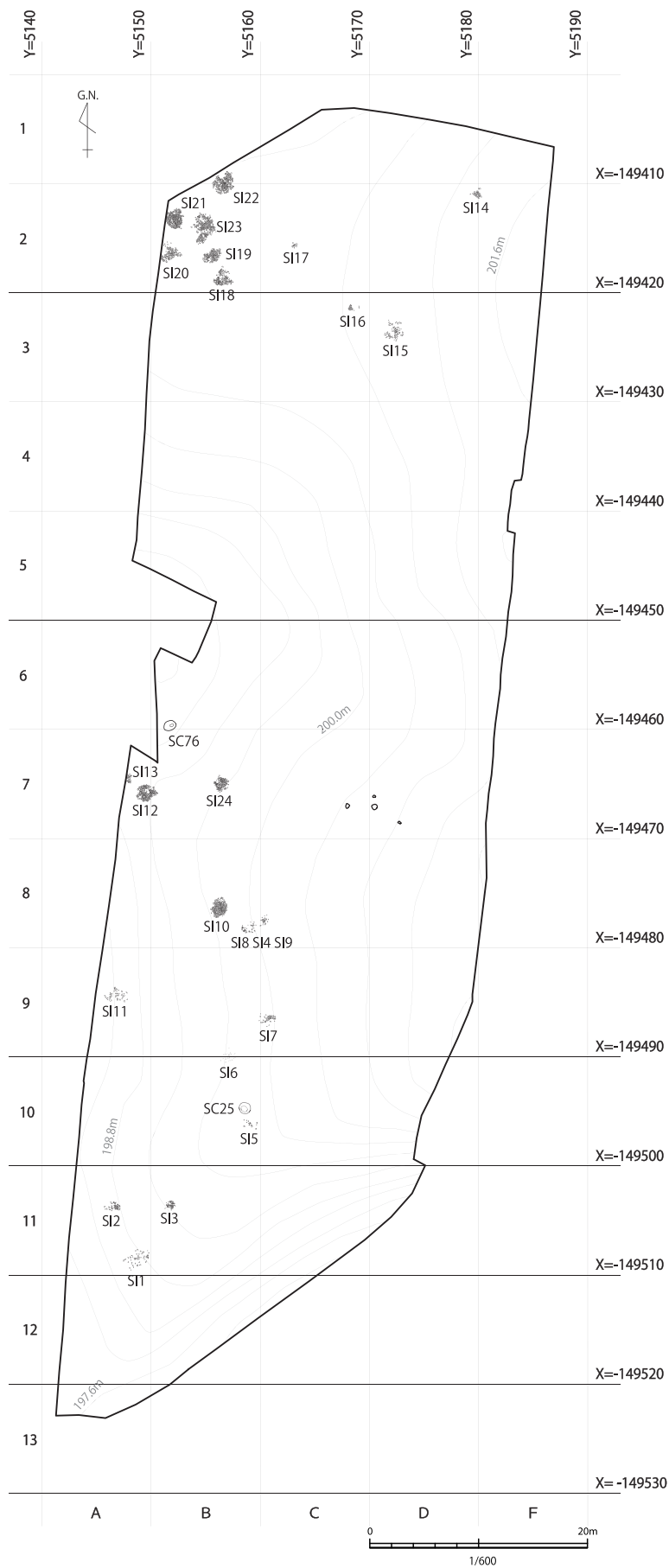
A11グリッドに位置し、 2.4×1.8 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

2号集石遺構(第8図)

A11グリッドに位置し、 1.5×0.9 mの範囲に礫が広がっている。掘り込みはなく、構成礫は小片が多い。



第6図 散礫平面分布図



第7図 縄文時代早期遺構分布図

3号集石遺構（第8図）

B11 グリッドに位置し、1.5 × 0.9 mの範囲に礫が広がっている。中心より北西側は礫の空白部分があり、掘り込みはない。構成礫は小片が多い。

4号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、0.8 × 0.8 mの範囲に礫の散布が見られる。遺構の両側にはそれぞれ8・9号集石遺構が隣接しており、下部には不整な方形の浅い掘り込みがあるが、南西側は傾斜面となるため不明瞭である。

5号集石遺構（第8図）

B10 グリッドに位置し、0.9 × 0.6 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

6号集石遺構（第8図）

B9～B10 グリッドに位置し、1.5 × 1.3 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはない。

7号集石遺構（第8図）

C9 グリッドに位置し、1.5 × 1.2 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがあるが、南西側は傾斜面となるため不明瞭である。検出面からの深さは0.15 mで、礫が掘り込み外に広がっている。この広がり、傾斜による流出か、掻き出しによるものと考えられる。

8号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、0.75 × 0.45 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがあり、検出面からの深さは0.13 mである。掘り込みの中心部は、礫が少ないことから、持ち出された可能性がある。

9号集石遺構（第9図）

C8 グリッドに位置し、1.0 × 0.75 mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な方形の掘り込みがあり、検出面からの深さは0.15 mである。

10号集石遺構（第9図）

B8 グリッドに位置し、2.0 × 1.5 mの範囲に礫の集中が認められる。下部には不整な楕円形の掘り込みがあり、南隅側は張り出す。検出面からの深さは0.13 mである。構成礫は主に0.05 m大の砂岩が主体であるが、その構成礫の上部には0.1～0.15 m大とやや大きな礫が集まっている。また、埋土中から出土した炭化物についてAMS法による放射性炭素分析を実施した結果、8535 ± 30年¹⁴CBPの測定値が得られた。

11号集石遺構（第9図）

A9 グリッドに位置し、2.0 × 1.3 mの範囲に礫がまばらに広がっている。掘り込みはなく、構成礫は0.1～0.15 m大のやや大きな礫と小片が混在している。

12号集石遺構（第10図）

A7～B7 グリッドに位置し、2.1 × 1.7 mの範囲に礫の集中が認められる。下部には不整な楕円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.15 mである。掘り込みの中心部は、礫が少ないことから、持ち出された可能性がある。

13号集石遺構（第10図）

A7 グリッドに位置し、0.4 × 0.2 mの範囲に礫が広がり、調査区外の西側へ続いている。掘り込みはない。

14号集石遺構（第10図）

D2～F2 グリッドに位置し、0.9 × 0.9 mの範囲に礫が集中している。掘り込みはみられなかったが、斜面をやや削り込んで平坦面をなしている。

15号集石遺構（第10図）

D3グリッドに位置し、1.8×1.8mの範囲に礫がまばらに広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.15mである。

16号集石遺構（第10図）

C3グリッドに位置し、0.6×0.5mの範囲に礫が集中している。下部には浅い窪みがあり、構成礫は0.1～0.15m大とやや大きな礫が多く密度が高い。

17号集石遺構（第10図）

C2グリッドに位置し、0.6×0.5mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがあり、断面はすり鉢状を呈し、検出面からの深さは0.12mである。

18号集石遺構（第11図）

B2グリッドに位置し、1.8×1.8mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがあり、断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは0.09mである。掘り込みの中心部から、周縁にかけては、礫のまばらな部分がある。

19号集石遺構（第11図）

B2グリッドに位置し、1.8×1.8mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがある。断面は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは0.09mである。掘り込みの中心部は、大きな礫が多く、密度が高い。掘り込みの中心部より南西側にかけては、礫のまばらな部分があり、持ち出された可能性がある。

20号集石遺構（第12図）

B2グリッドに位置している。1.8×1.8mの範囲に礫が広がっており、調査区外の南側へ続いている。下部には不整な方形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.21mである。掘り込みの中心部より、西側は礫の空白部分となる。

21号集石遺構（第12図）

B2グリッドに位置している。1.8×1.8mの範囲に礫が集中しており、調査区外の西側へ続いている。下部には不整な楕円形の掘り込みがあり、北東隅側は張り出す。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.15mである。構成礫は小片が多い。

22号集石遺構（第13図）

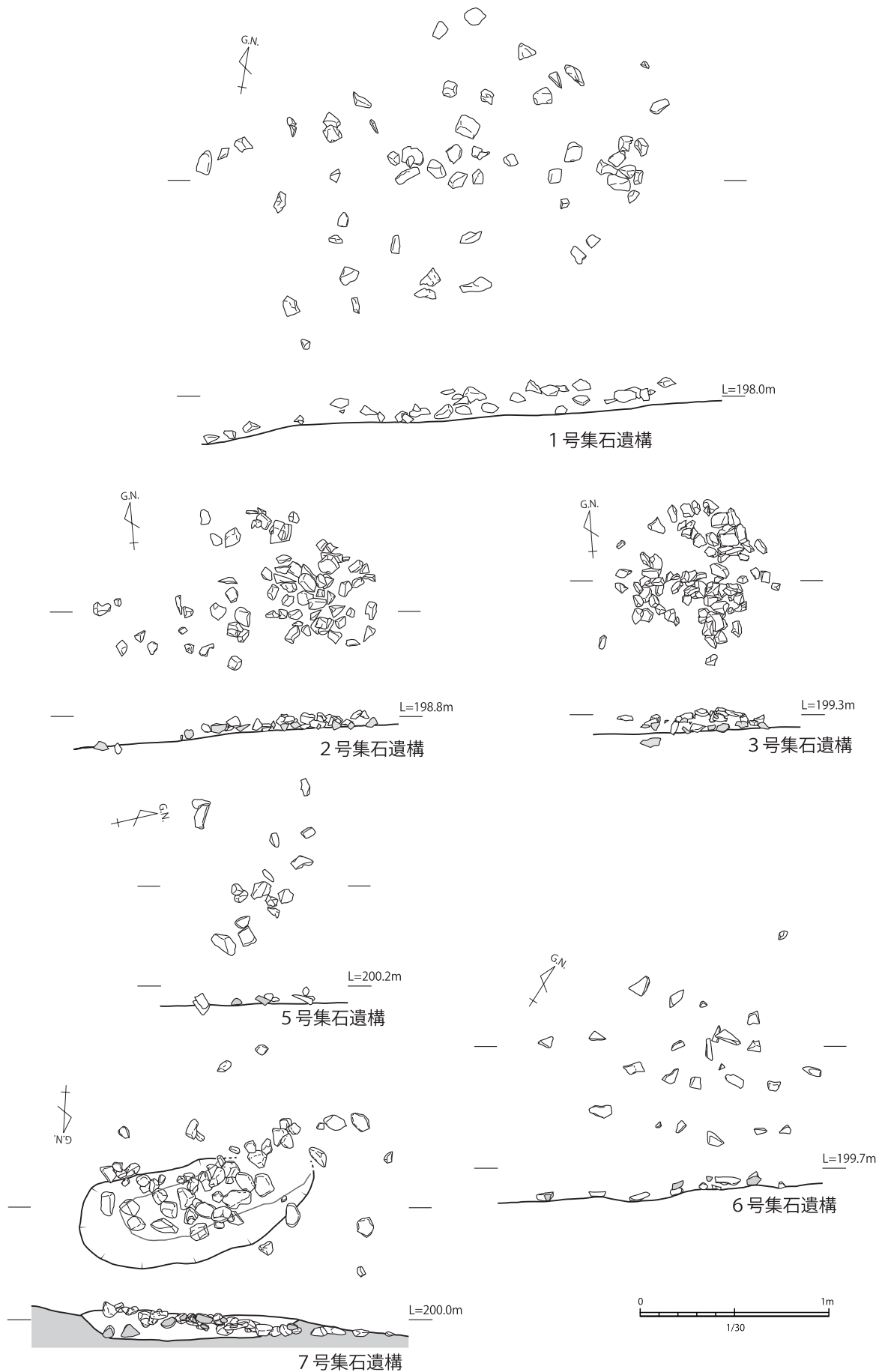
B1～B2グリッドに位置し、2.1×2.0mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.12mである。構成礫は、掘り込みの中心部に小片が多く、周縁にかけて大きな礫が多い。

23号集石遺構（第13図）

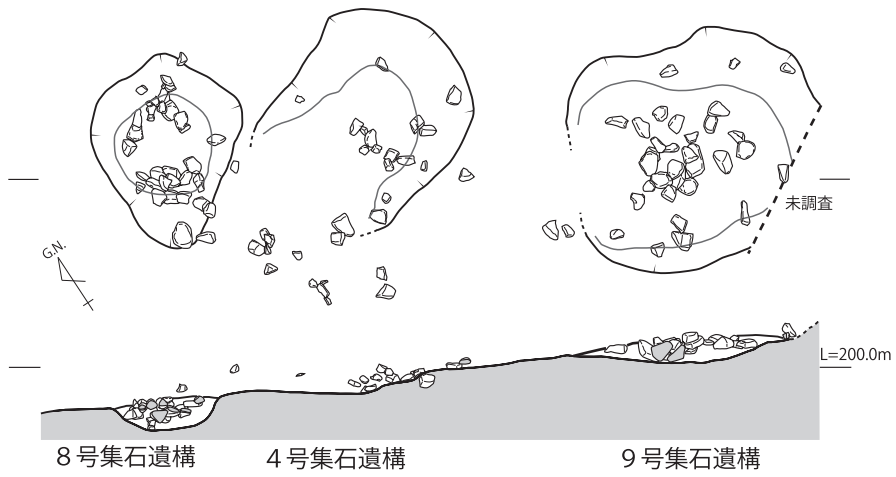
B2グリッドに位置し、2.7×2.4mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な方形の掘り込みがあり、南西隅側は張り出す。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.21mである。掘り込みの中心部付近は、樹痕により攪乱された形跡がみられる。

24号集石遺構（第14図）

B7グリッドに位置し、1.5×1.4mの範囲に礫が広がっている。下部には不整な楕円形の掘り込みがある。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは0.18mである。また、掘り込みの中心部は礫の空白部分となる。



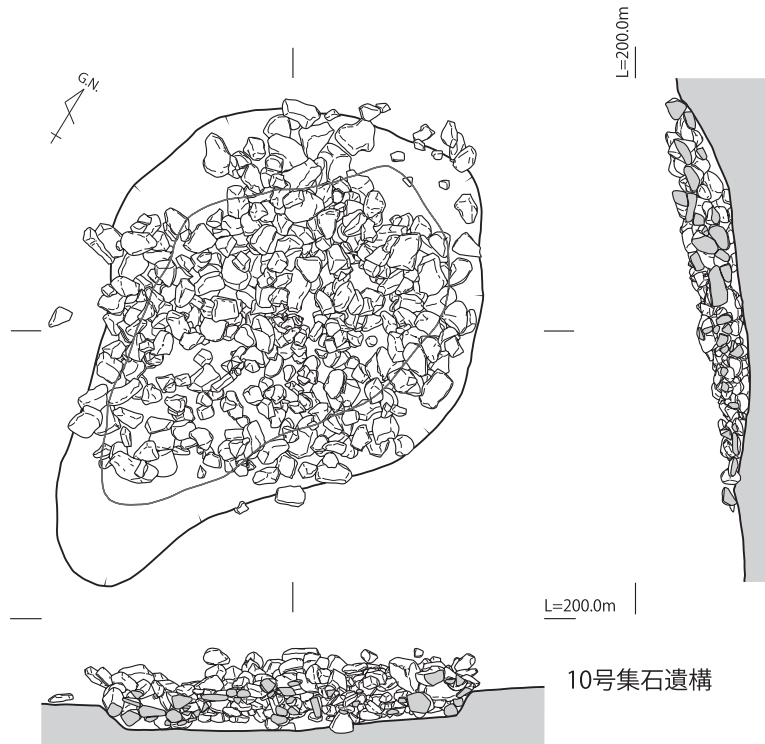
第8図 1～3・5～7号集石遺構実測図



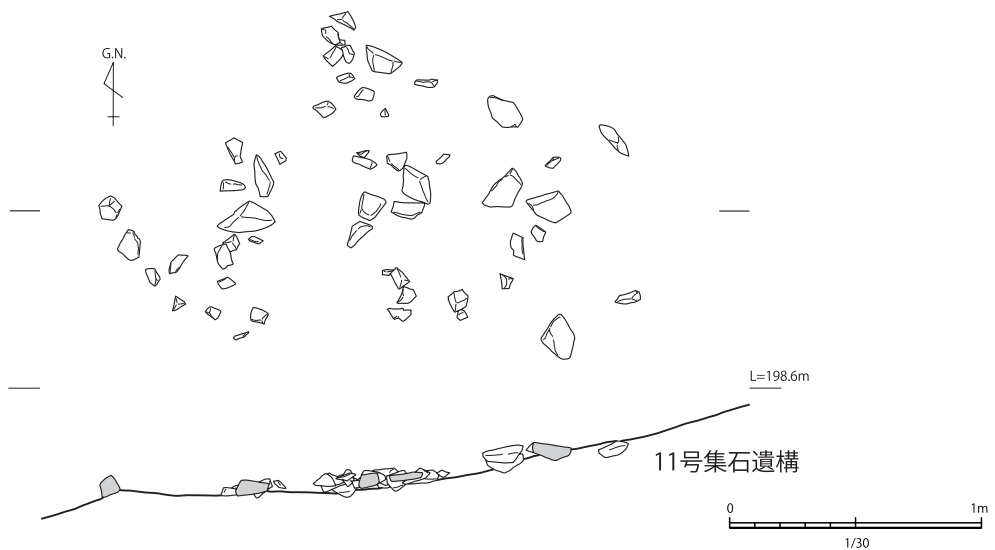
8号集石遺構

4号集石遺構

9号集石遺構

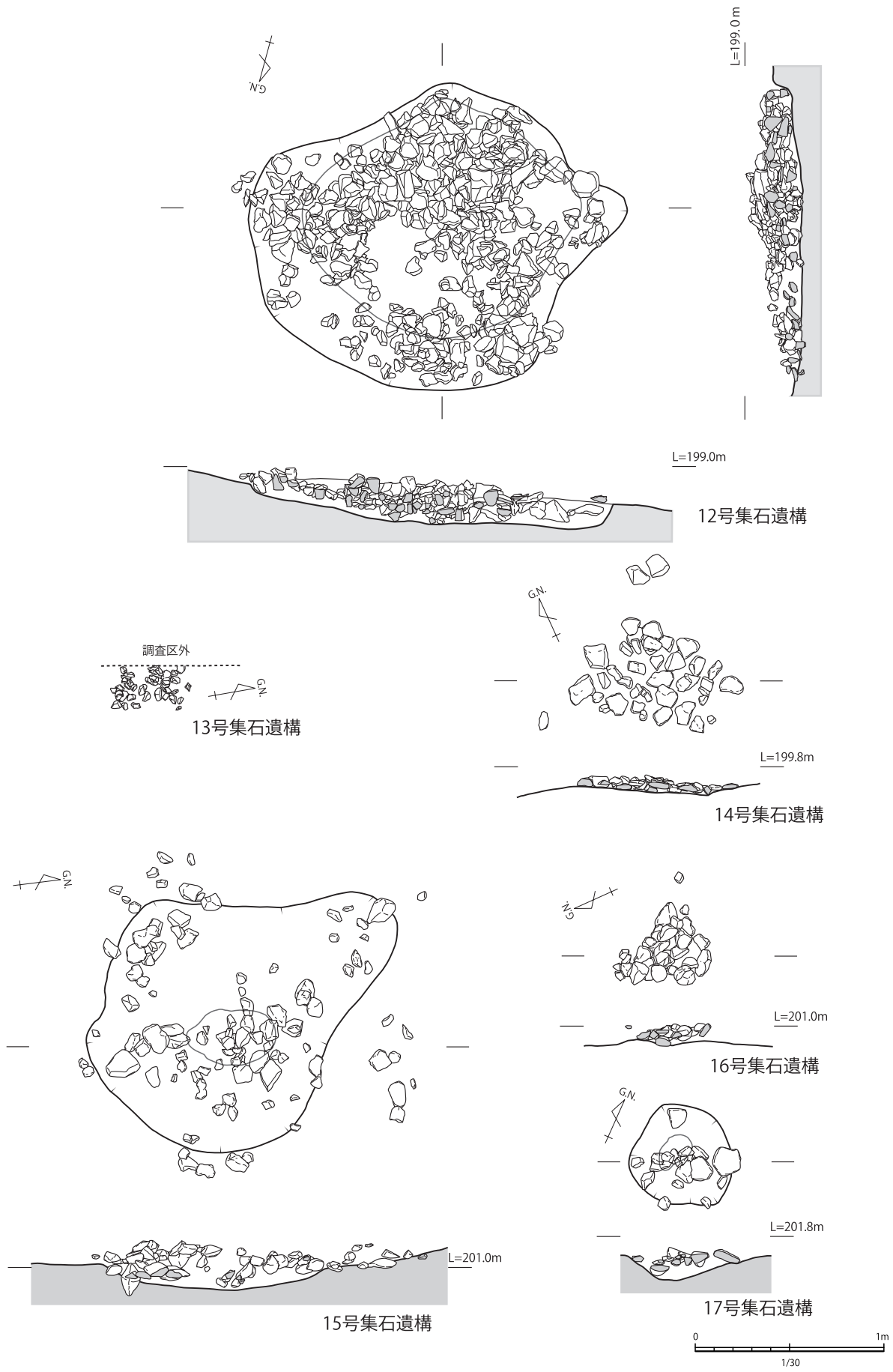


10号集石遺構

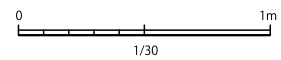


11号集石遺構

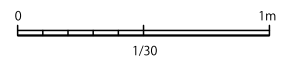
第9図 4・8～11号集石遺構実測図



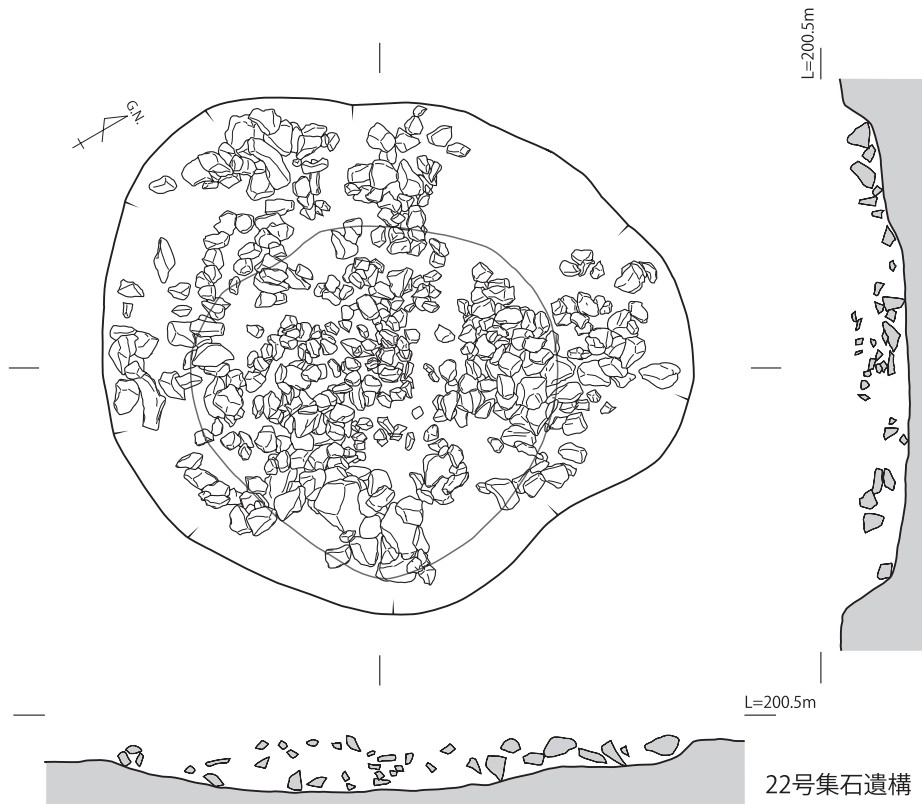
第10図 12~17号集石遺構実測図



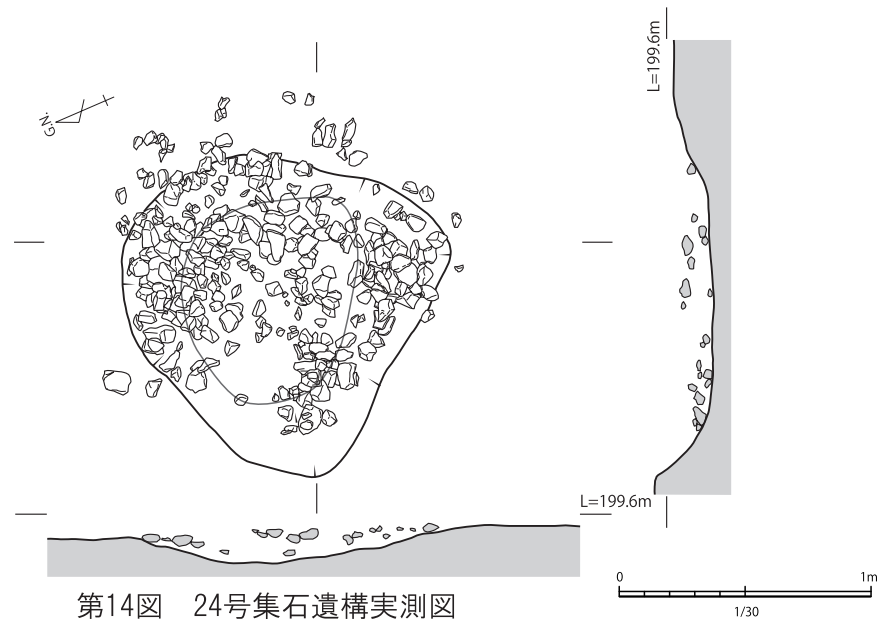
第11図 18・19号集石遺構実測図



第12図 20・21号集石遺構実測図



第13図 22・23号集石遺構実測図



第14図 24号集石遺構実測図

(2) 土坑 (第15図)

土坑は2基検出されており、調査区中央にある谷地形より南側にある。単独で検出され、群集はしていない。集石遺構に比べると基数は少ないが、近接した位置には集石遺構がある。

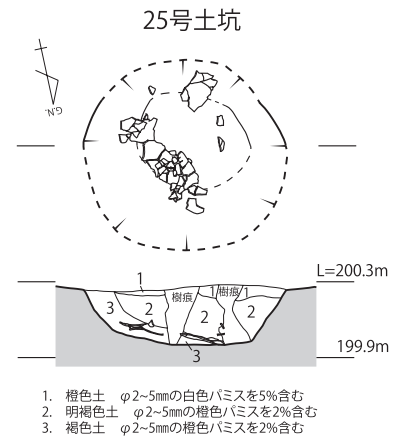
25号土坑 (第15図)

調査区南部のB10グリッドに位置し、X層上面にて検出された。樹痕等による攪乱が著しいため、精査においては、ベルトを残して全体的に掘り下げた。平面形は不整な円形で、長軸約1.1m、短軸1.0m(還元値)、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは緩やかである。埋土は3層に分かれ、遺物は、底面付近から縄文土器の深鉢が1個体(第16図)出土している。

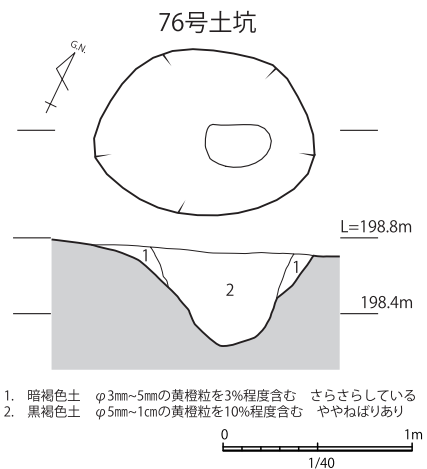
1は塞ノ神式土器の深鉢で、胴部から底部の一部が失われている。口縁部はラップ状に外反し、胴部は丸みをもった円筒形を呈す。口唇部はヘラ工具による刻目が密に施され、口縁部から胴部にかけては、横方向の連続的な貝殻刺突文が8条施されるが、胴部は押し引き状となる。貝殻刺突文より下位は、沈線文により縦長に弧状の文様が施される。口縁部内面は横方向の貝殻条痕文、それより下面はケズリ状のナデ調整である。また、内面に炭化物、外面全体にススが附着している。

76号土坑 (第15図)

調査区西部のB6グリッドに位置し、X層上面にて検出された。平面は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形はV字形で、遺物は出土していない。

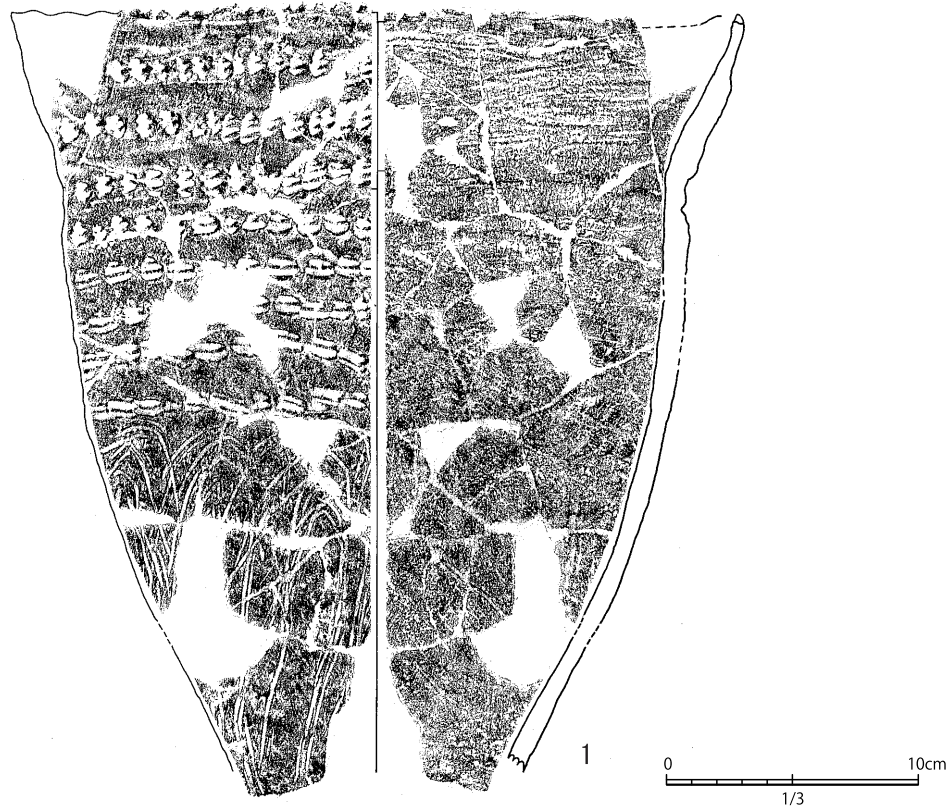


1. 橙色土 φ2-5mmの白色パミス5%含む
2. 明褐色土 φ2-5mmの橙色パミス2%含む
3. 褐色土 φ2-5mmの橙色パミス2%含む



1. 暗褐色土 φ3mm-5mmの黄橙粒を3%程度含む さらさらしている
2. 黒褐色土 φ5mm-1cmの黄橙粒を10%程度含む ややねぼりあり

第15図 25・76号土坑実測図



第16図 25号土坑出土遺物実測図

(3) 遺物 (Ⅸ・Ⅹ層出土)

a) 縄文土器 (第17図・第18図)

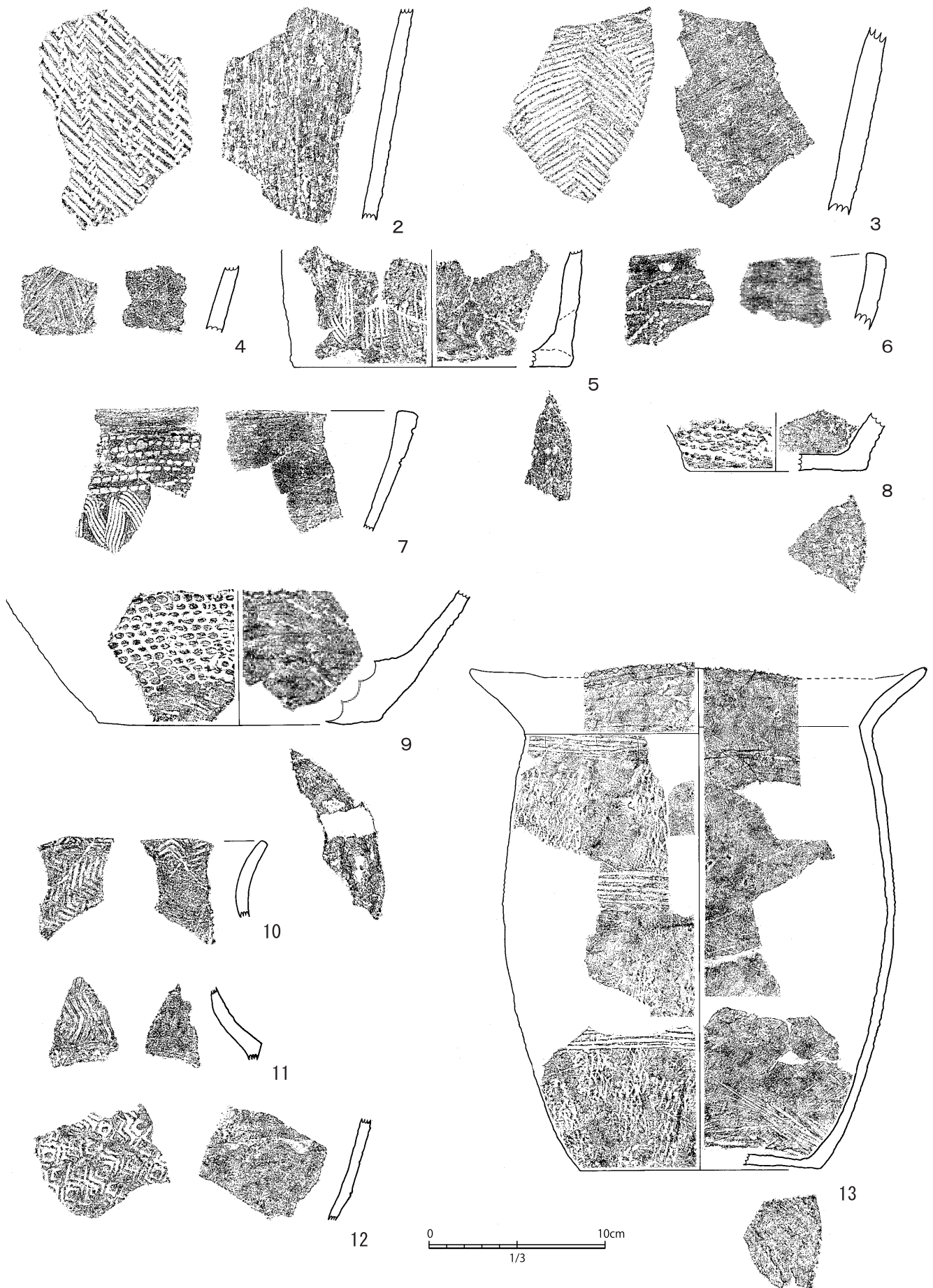
2～6は貝殻文円筒形土器である。2は胴部で、綾杉状の条痕地に、貝殻腹縁による刺突文を縦方向に施している。内面は縦方向のケズリ状のナデ調整である。3・4も胴部で、綾杉状の貝殻条痕文を施す。5は底部で、縦方向の貝殻条痕文、端部は面取りされる。6は口縁部で、羽状の貝殻腹縁刺突文を施す。7は口縁部から胴部で、口縁部外面は横方向に8条の貝殻腹縁による刺突文、胴部は鋸歯状の貝殻条痕文を施す。

8～12は押型文土器で、内面はナデ調整される。8・9は平底の底部で、外面に楕円押型文を施している。10は外反する口縁部で、外面には山形押型文を施している。11は稜をなして屈曲する胴部である。横方向の山形押型文を施している。12は胴部で、横方向の山形押型文を施している。

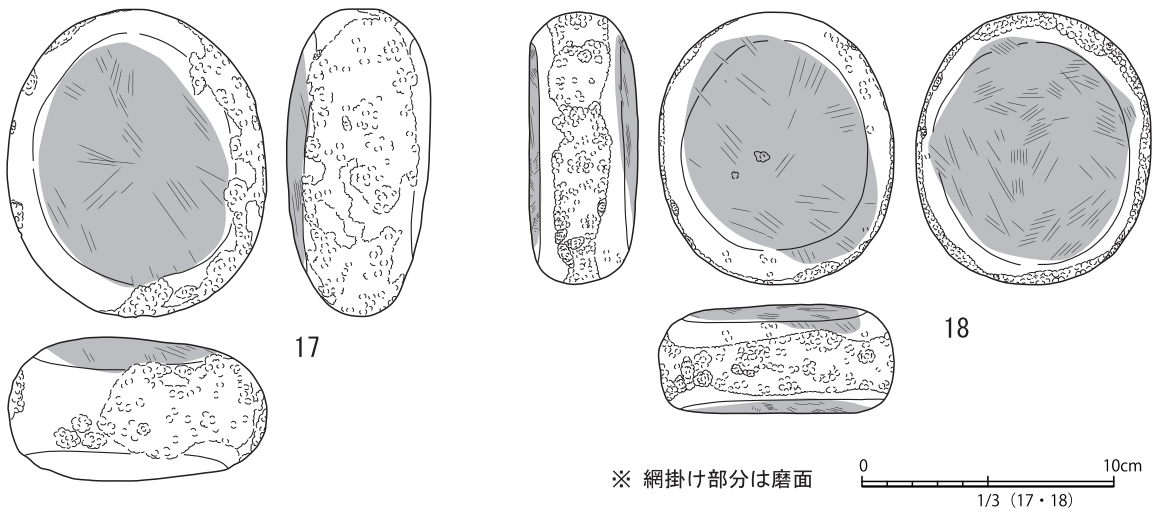
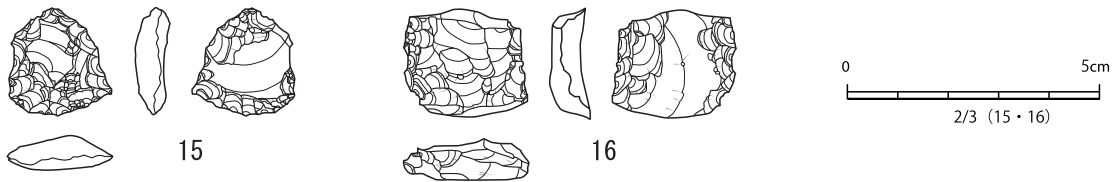
13・14はいわゆる塞ノ神式土器である。13は口縁部が大きく外反し、胴部は丸みをもった円筒形を呈す。復元口径22.3cmで、口唇部は波状の刻目が施される。胴部は区画のない網目状撚糸文、頸部から胴部にかけては、5条1単位で沈線が3段に巡る。内面は横方向の丁寧なナデ調整である。また、外面全体にススが付着する。14は、13と同様の器形で復元口径37.7cm。口縁部外面に5条の刺突列点文が施されている。胴部は、沈線区画内に撚糸文の充填、沈線間に列点文を施す。内面は横方向のナデ調整である。

b) 石器 (第18図)

15はチャート製の楔形石器で、平面形は三角形状を呈し、2辺の表裏面から調整が施されている。16は、黒曜石製(腰岳産)の楔形石器で、両側面の表裏面から調整が施されている。17・18は砂岩製の磨敲石である。全体形はともに楕円形で、17は正面に磨面が見られ、敲打痕が右側面に集中している。18は表裏面に磨面が見られ、敲打痕が周縁を巡る。



第17図 縄文時代早期土器実測図



第18図 縄文時代早期土器及び石器実測図

第3節 縄文時代前期～中期の遺構と遺物

1 概要

縄文時代前期～中期の遺構としては、竪穴建物跡2軒、土坑13基（陥し穴状遺構5基を含む）がある。

なお、調査の都合上、Ⅵ層～Ⅷ層を重機による除去の後、Ⅸ層上面にて人力による遺構検出を行ったが、後述のように本来の掘り込み面はⅦ層中である。竪穴建物跡は、2軒とも尾根筋上の地形変換点にあり、谷際に位置する。土坑は、竪穴建物跡2軒の間に広がる尾根筋の南西方向に沿って分布している。遺物は1号竪穴建物から石匙が1点出土したのみで、包含層からもほとんど出ていない。

（1）竪穴建物跡（第20図）

竪穴建物跡はいずれもⅨ層上面にて検出している。これは、市道建設時の削平及び、傾斜地による堆積層の流出等の影響によるものである。2軒とも円形プランで、埋土中に鬼界アカホヤ火山灰を含む。

1号竪穴建物跡（第20図）

調査区南側のB11グリッドに位置し、北から南側に傾斜する緩斜面の崖面際に近い場所にある竪穴建物跡である。遺構の平面形は円形で直径約2.9m、底面積は約5.3㎡である。竪穴床面は、多少の起伏があるが概して平坦で、緩斜面に対して水平に掘削されている。検出面からの深さは約0.2m、掘り込みの立ち上がりはしっかりとしている。竪穴に伴う柱穴は確認できなかった。竪穴埋土は、Ⅷ層（鬼界アカホヤ火山灰層）とⅨ層の混土である。本遺構に伴う遺物は、検出面近くから出土した石匙（19）が1点のみである。

19は石英製の石匙で、両側からの挟りによってつまみ状の少突起を作りだし、周縁に刃部を形成する。

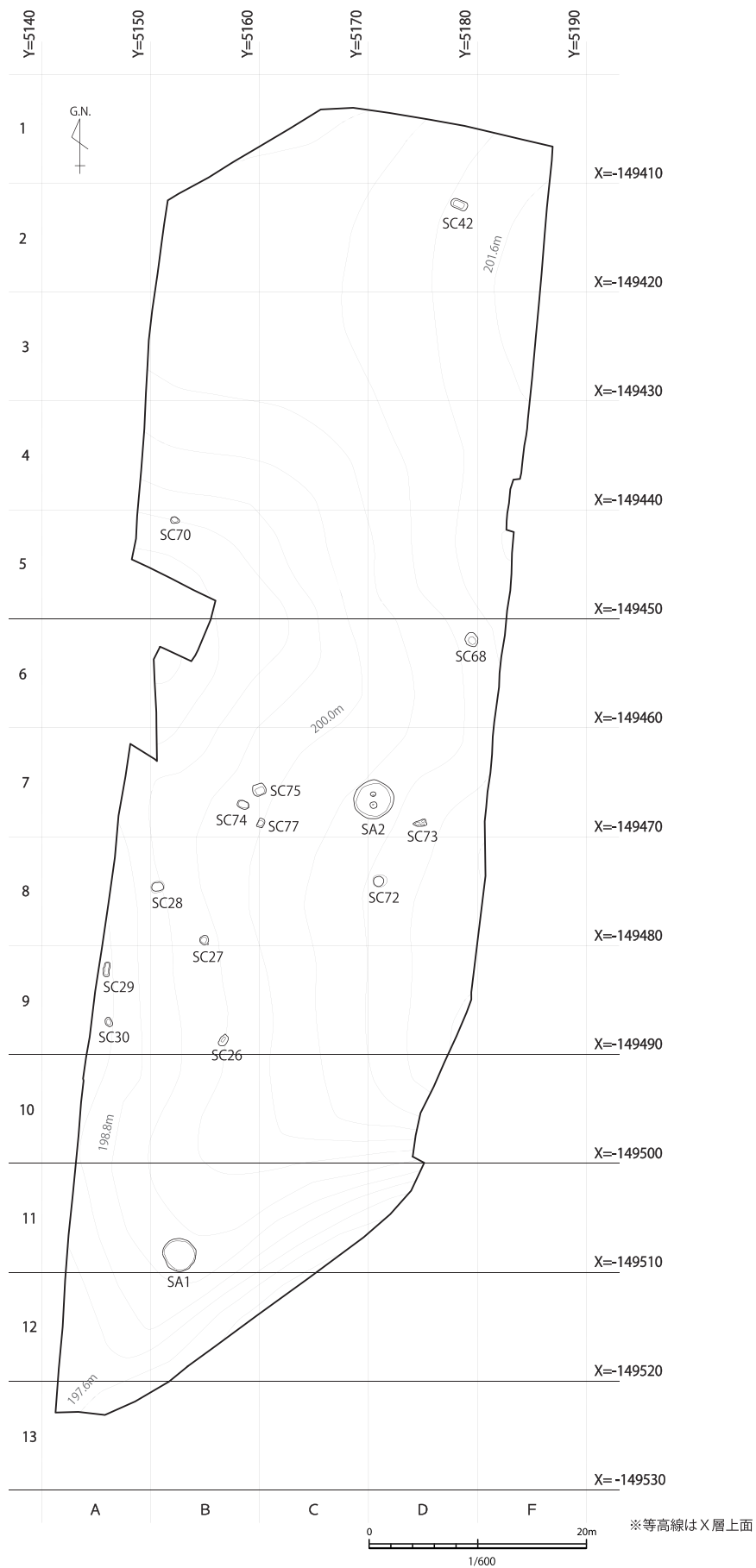
2号竪穴建物跡（第20図）

調査区中央部のC7～D7グリッドに位置する竪穴建物跡である。市道建設時にⅦ層～Ⅸ層まで削平されており、Ⅸ層にて検出された。

遺構の平面形は円形で直径約3.6m、底面積は約7.1㎡である。竪穴床面は概して平坦であり、貼床が施されている。検出面から0.45m程掘削した後に0.2m程度埋め戻して床面とする。掘り込みの立ち上がりはしっかりとしている。主柱穴は2本（P1・P2）で、竪穴中心部の南北方向に認められた。主柱穴間の距離は約0.8mで、貼床面から直径約0.5m、深さ0.7mの円形に掘り込んだ後、直径約0.15m前後の柱（第20図土層番号9）を立てたとみられる。本遺構からは、土器、礫の出土はなかったが、底面近くより炭化物が検出された。この炭化物は、AMS法による放射性炭素分析の結果、4440±25年¹⁴C BPの測定値が得られた。

（2）土坑・陥し穴状遺構（第21図～第23図）

Ⅸ層上面において、土坑が13基検出された。これらは、黄褐色土及び明黄褐色土等の黄色系統の共通した埋土が特徴であるが、遺物は伴わない。そこで、遺構の時期や埋土の由来を調べるため、SC68の埋土をサンプリングして分析した。その結果、鬼界アカホヤ火山灰を含むが、霧島御池軽石は含まないことが判明した。よって土坑等は、縄文時代前期から中期の間のある時期と判断される。したがって、埋土と基本土層との対比関係からⅨ層上面での検出であったが、本来の掘り込み面はⅦ層中と考えられることから、本来の掘り込み面は、検出面より0.5～0.8m程度の高い位置と推定される。なお、13基のうち5基（SC27・28・68・70・72）は床面に小穴等を確認できるため、特に陥し穴状遺構として報告する。



第19図 縄文時代前期～中期遺構分布図

土坑

土坑は調査区全体に分布しているが、SC42のように単独で存在するものや、SC74・75・77のようにまとまりをもつものもある。平面形は楕円形（SC26・30）、隅丸方形（SC74・75・77）、隅丸長方形（SC29・42・73）のものに大別される。また、埋土は、黄褐色及び明褐色土が主体で、直径1～5mm程度の黄橙色及び橙色粒を含んでいるものが多い。

26号土坑（第21図）

B9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.1m、短軸0.7m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は椀状で、北側の立ち上がりは急である。埋土は、黄褐色土を主とする粘質土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

29号土坑（第21図）

A9グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸約1.4m、短軸0.5m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

30号土坑（第21図）

A9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.9m、短軸0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は椀状で、北側の立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

42号土坑（第21図）

D2グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、長軸約1.5m、短軸0.8m、検出面からの深さは約0.4mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は、黄褐色土を主とするシルト混じりの粗砂土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

73号土坑（第21図）

D7グリッドに位置している。平面形は不整な隅丸長方形で、西側は張り出す。長軸約1.2m、短軸0.5m、検出面からの深さは約0.4mであり、底面は不整な形状である。断面形は逆台形状に近く、東側の立ち上がりは急である。埋土は黄褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

74号土坑（第21図）

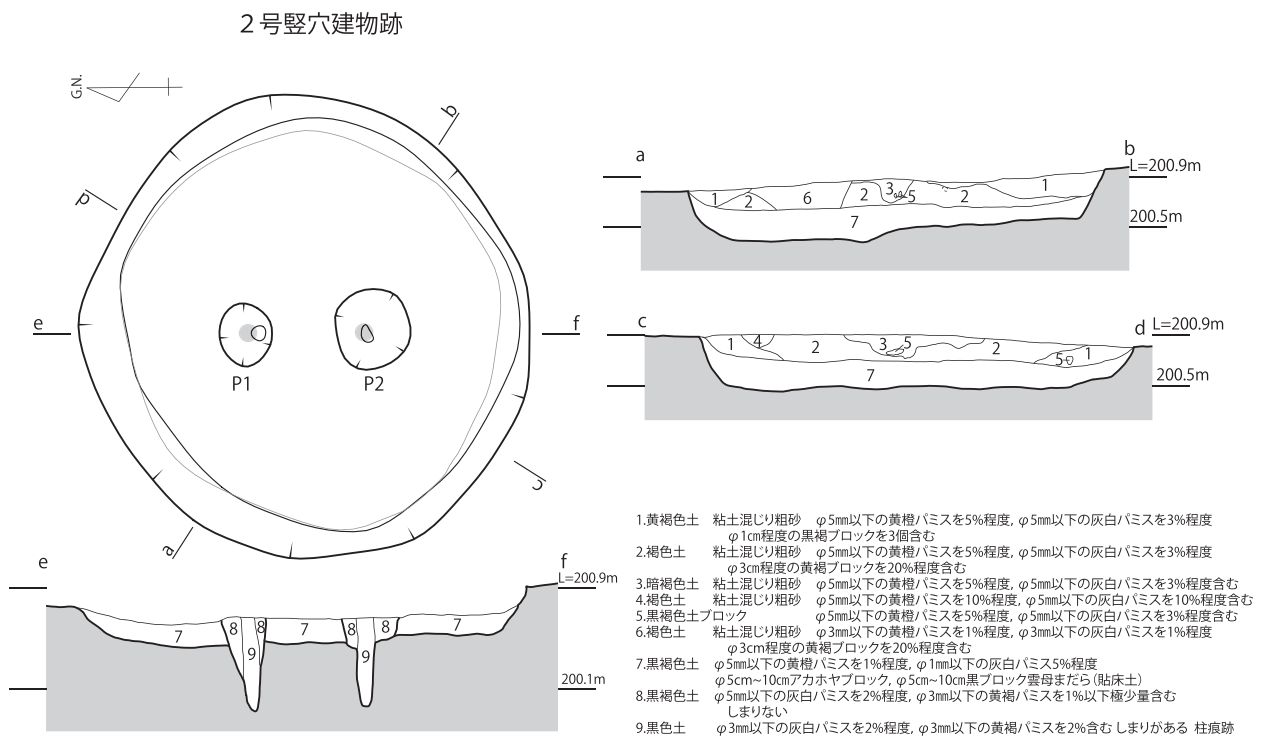
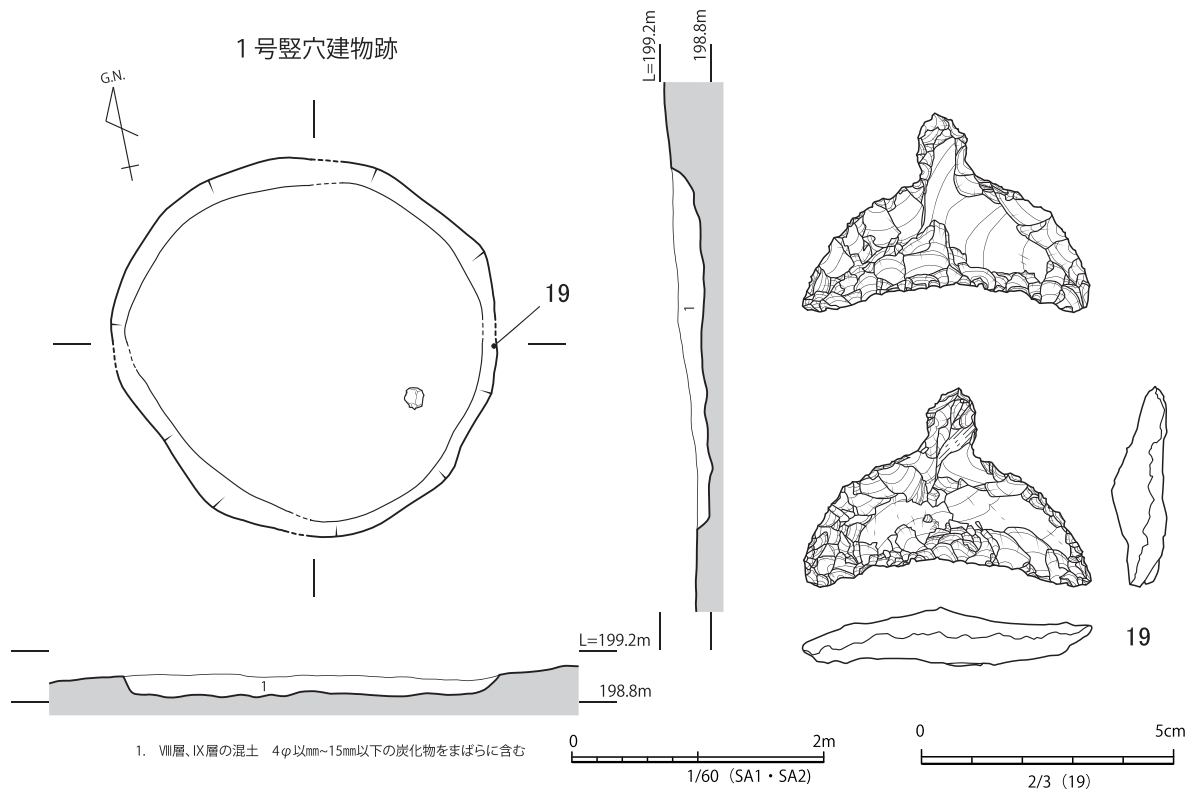
B7グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.0m、短軸0.7m、検出面からの深さは約0.6mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。埋土は、明黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。

75号土坑（第22図）

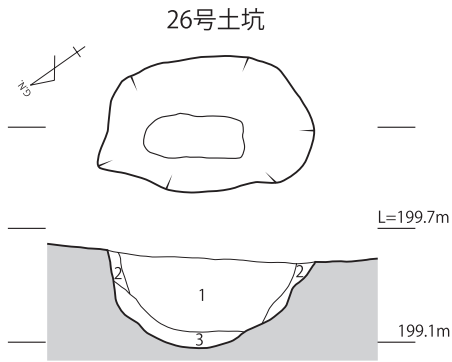
B7～C7グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.2m、短軸1.1m、検出面からの深さは約1.0mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。また、霧島御池軽石を含む風倒木痕に切られる（図版8）。埋土は明黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりがなく、遺構に伴う遺物はない。

77号土坑（第22図）

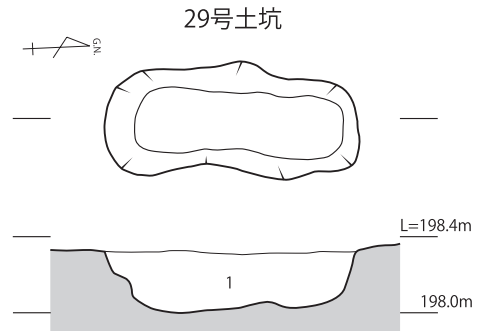
B7～C7グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約0.8m、短軸0.6m、検出面からの深さは約0.7mである。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。埋土は、明褐色土で、しまりがなく、遺構に伴う遺物は出土していない。



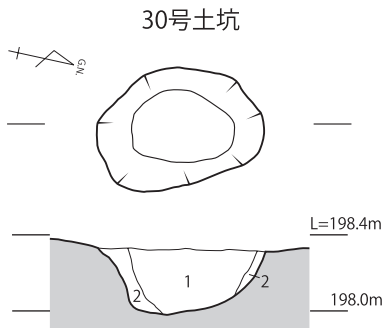
第20図 1・2号竪穴建物跡及び出土遺物実測図



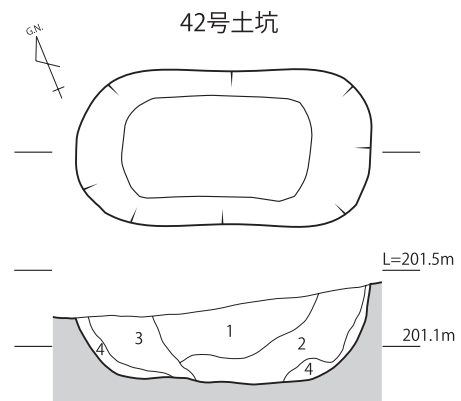
1. 黄褐色土 φ1~3mmの黄褐色粒を1%程度含む しまりがなく粘質土である
2. 褐色土 φ1~3mmの黄褐色粒を1%程度含む 1よりしまりがややある
3. 暗褐色土 バミスは特に含まない 1と同しまりがない



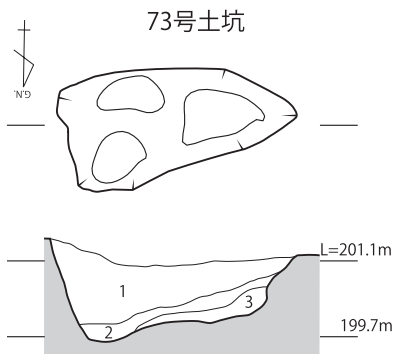
1. 明褐色土 φ1~5mmの橙色バミスを3%程度を含む しまりがあまりない



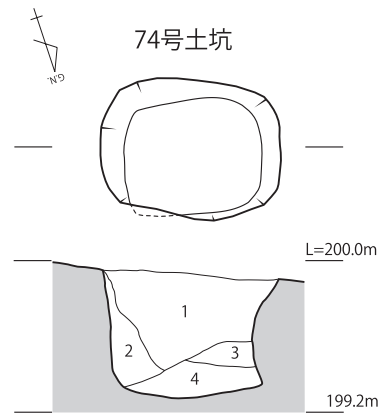
1. 明褐色土 φ1~5mmの橙色バミス, 白色バミスを5%程度含む
2. 褐色土 φ1~3mmの橙色バミス, 白色バミスを1%程度含む



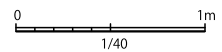
1. 黄褐色土 しまりがない
2. 黄褐色土 シルト混じり粗砂
3. にぶい黄褐色土 シルト混じり粗砂
4. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の基本土層IX~X層ブロックを含む



1. 黄褐色土 さらさらしている φ1mm以下の橙色バミスを3%程度含む しまりがない
2. 褐色土 さらさらしておりしまりがない バミスを含まない
3. 暗褐色土 φ3mm~5mmの黄褐色粒を3%程度含む ややしまりあり



1. 明黄褐色土 φ3mm~5mmの黄褐色粒を5%程度 3cm~5cm程度のブロック黄褐50%を含む さらさらしている
2. 褐色土 さらさらしてしまりがない φ3mm~5mmの黄褐色粒を3%程度含む 炭を含む
3. 2と同様だが炭を含まない
4. 暗褐色土 φ2mmの黄褐色粒を1%含む ややしまりあり



第21図 26・29・30・42・73・74号土坑実測図

陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、調査区中央を走る谷を隔て南北に点在している。平面形は円形を基調とするが、不整なものが多い。また、SC27・28・68・70 は検出面からの深さが約 0.5 ～ 0.9 m で底面の中央に小穴（杭状の痕跡）があり、逆茂木痕と捉えられる。なお、SC72 については、明確な逆茂木痕は確認できないが、掘り込みの深さから陥し穴状遺構に含める。

27 号土坑（陥し穴状遺構）（第 22 図）

B8 グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約 0.8 m、検出面からの深さは約 0.7 m である。断面形は方形に近く、立ち上がりは急である。床面には、直径 0.1 m、深さ 0.4 m の小穴があり、杭の痕跡と考えられる。埋土は、明黄褐色土を主とし、しまりが無い。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

28 号土坑（陥し穴状遺構）（第 22 図）

B8 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約 1.3 m、短軸 1.0 m、検出面からの深さは約 0.6 m である。断面形はフラスコ状である。床面には、直径 0.1 m 程度の小穴が 1 箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは 0.2 m であった。埋土は、黄褐色土及び褐色土を主とし、しまりが無い。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

68 号土坑（陥し穴状遺構）（第 23 図）

D6 グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約 1.2 m、検出面からの深さは約 0.9 m である。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。床面には、直径 0.15 m 程度の小穴が 1 箇所あり、床面からの深さは 0.5 m であった。

埋土は褐色及び黄褐色を主とする粗砂土で、遺構に伴う遺物は出土していない。また、土層断面図中にあるにぶい褐色土（土層番号 5）はしまりのない土質で、小穴との位置関係から杭の痕跡（腐食土化したもの）と考えられる。

サンプリングした埋土の火山灰分析結果では、鬼界アカホヤ火山灰を少量含むが、霧島御池軽石は含まないとの結果が得られた。また、68 号土坑のみ埋土中（土層番号 2・3）から炭化物粒が数点出土した。このうち 1 点を AMS 法による放射性炭素分析した結果、 3505 ± 25 年 ^{14}C BP の測定値が得られた。

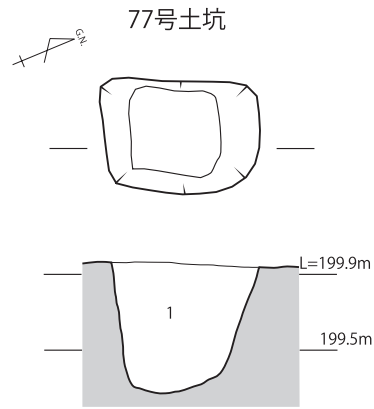
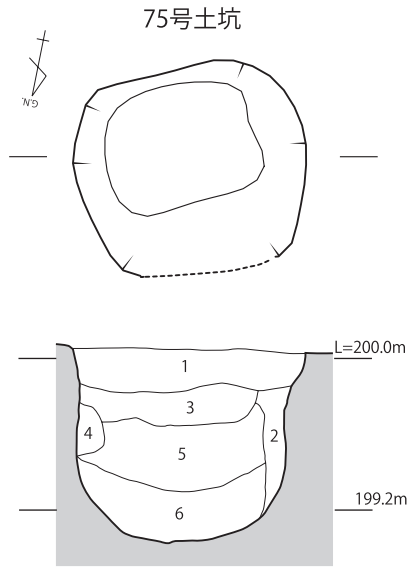
70 号土坑（陥し穴状遺構）（第 23 図）

B5 グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約 0.8 m、短軸 0.6 m である。検出面からの深さは約 0.3 m である。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。床面には、直径 0.12 m 程度の小穴が 1 箇所あり、杭の痕跡と考えられる。床面からの深さは 0.1 m であった。埋土は、黄褐色及び褐色を主とする粗砂土で、鬼界アカホヤ火山灰がブロック状に入る。また、遺構に伴う遺物は出土していない。

72 号土坑（陥し穴状遺構）（第 23 図）

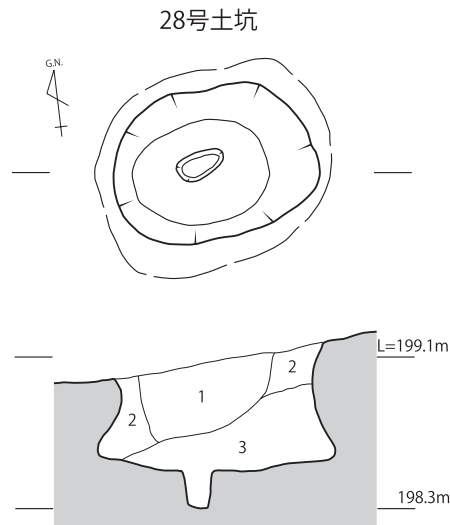
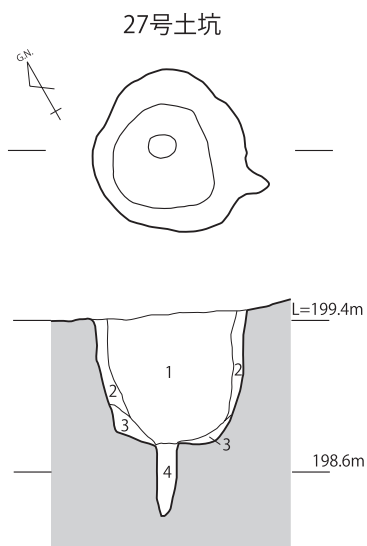
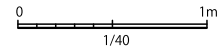
D8 グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約 0.9 m、検出面からの深さは約 1.6 m である。断面形は台形で、底面は広がっている。また、東側底部の不整な立ち上がりは、壁面の崩落と考えられる。

本来の掘り込み面からの深さは、2.1 ～ 2.4 m と推測され、XV 層まで掘削された床面には、直径 0.08 m 程度の小穴が 1 箇所あるが、遺構底面の中心部ではなく、壁面側に寄っている。床面からの深さは 0.2 m であった。埋土は、暗灰黄色や明黄褐色土などの黄系統色を主とし、下位にかけてしまりが強くなる傾向にあるが、小穴の埋土（土層番号 8）はしまりのない土質である。



1. 明褐色土 φ1mmの橙色バミスを1%程度含む しまりがない

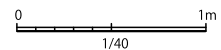
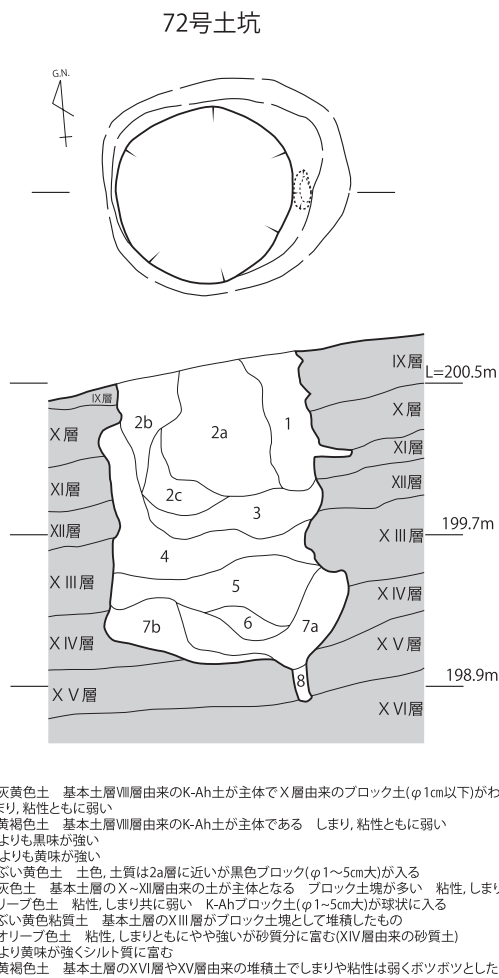
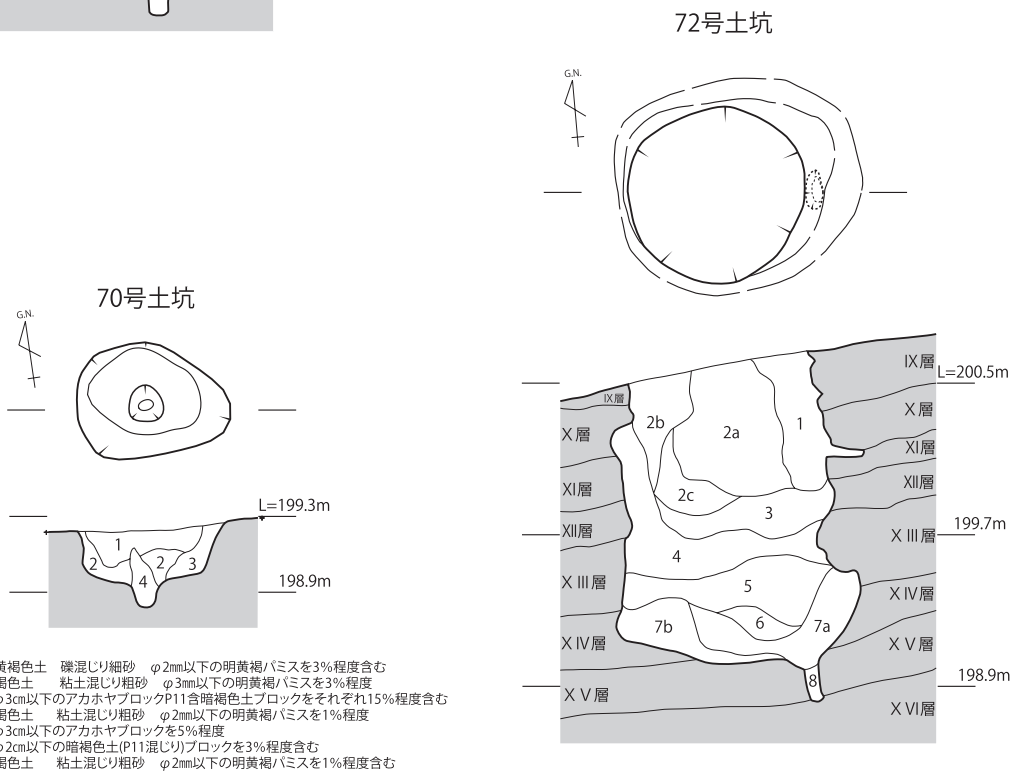
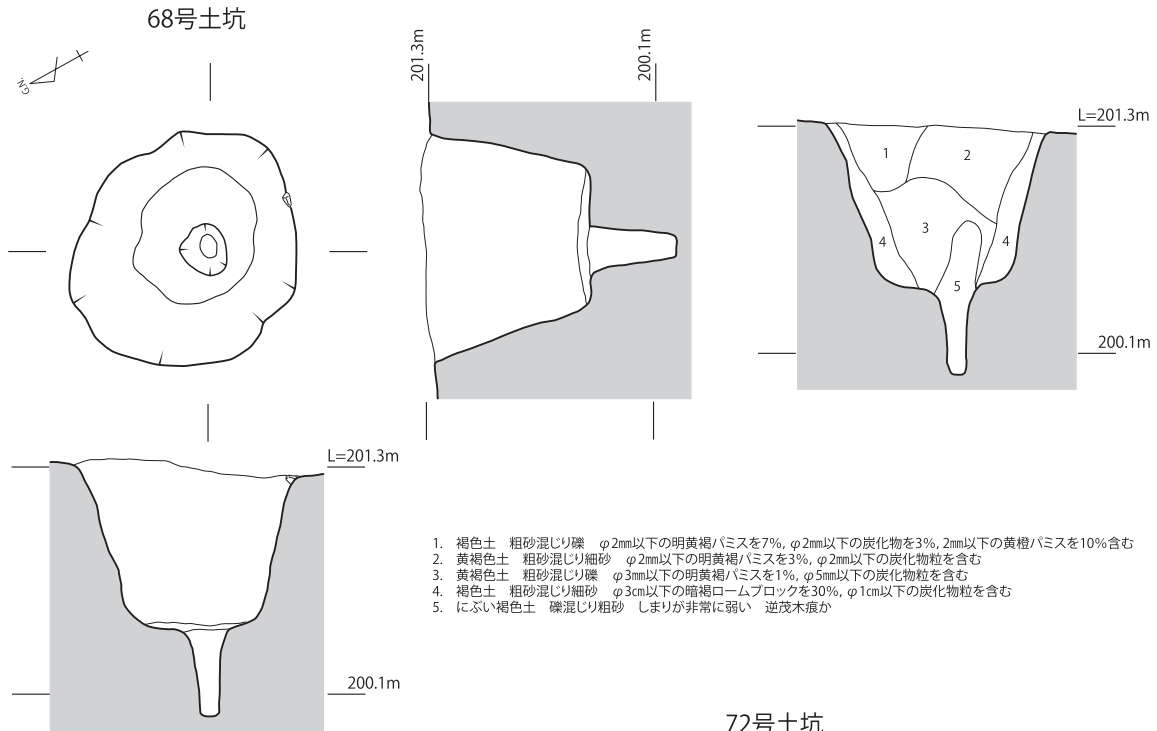
1. 明黄褐色土 φ3mm~5mmの黄橙粒を3%程度含む さらさらしている
2. 褐色土 φ1mmの明黄褐色粒を1%程度含む ややしまりあり
3. 明黄褐色土 φ3mm~5mmの黄橙粒を3%程度、2cm程度のブロック黄褐を20%含む さらさらしている
4. 褐色土 φ3mmの黄橙バミスを1%程度含む ややしまりあり
5. 黄褐色土 2cm程度のブロック黄橙を20%程度含む さらさら感
6. 暗褐色土 φ2mmの黄褐粒を1%程度含む ややしまりあり



1. 明黄褐色土 φ1mm以下の橙色バミスを25%程度含む しまりがなくやや粘質土である
2. 褐色土 φ1mmの橙色バミスを10%程度含む 1よりやしまりがある
3. 暗褐色土 φ1mmの橙色バミスを5%程度含む
4. 黄褐色土 しまりがない

1. 黄褐色土 φ1~3mmの橙色バミス、白色バミスを3%程度含む しまりがない
2. 褐色土 φ5mmの橙色バミスを1%程度含む 1よりしまりがある
3. 明褐色土 バミスは含まない 1よりしまりがあるが2よりしまりがない

第22図 75・77号土坑及び27・28号土坑（陥し穴状遺構）実測図



第23図 68・70・72号土坑（陥し穴状遺構）実測図

第4節 縄文時代後期～晩期の遺構と遺物

1 概要

IV層より縄文時代後期～晩期の遺物（縄文土器・石器）、V層上面より土坑が31基検出された。土坑は出土遺物の土器型式から晩期に属するものと判断される。土坑は、調査区中央の谷を挟んで南北に分布しており、特に調査区北西部には土坑の群集がみられる。晩期の遺物は、土坑の群集箇所及び、調査区南部の尾根筋上の包含層より多く出土する傾向が認められた。また、調査区北東部及び調査区南端付近の斜面部については、畑地造成による削平や堆積層の流出のため、包含層の残存状況が悪く、遺物はほとんど出土していない。

(1) 土坑

土坑の平面形は、円形・楕円形・隅丸方形があり、円形プランが主体である。また、掘り込みの深さは調査区中央の谷を挟んで北側の土坑群は、南側の土坑に比べて深い。遺物は31基の土坑のうち、4基（SC4・17・21・31）を除いた27基の土坑から出土した。特に調査区北西部に群集する土坑群からは、深鉢や浅鉢片が多量に出土した。なかでも、40号と41号、65号と71号のように、互いに接合関係のある土坑も認められた。

なお、遺物の掲載については、可能な限り図化に努め、互いに接合関係にある遺物の所属については、より大きい破片が出土した側とした。

1号土坑（第25図）

B11グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.8m、検出面からの深さは約0.9mである。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。そのうち遺物は、埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢3点（20～22）、浅鉢1点（23）を図化した。20は口縁部が直立気味に立ち上がり、外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。21は胴部から底部で復元底径は12cmである。外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。22は底部片である。23は胴部で、内外面ともにミガキ調整される。

4号土坑（第25図）

B7グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約2.0m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は皿状で、立ち上がりは緩やかである。遺構に伴う遺物は出土していない。

6号土坑（第25図）

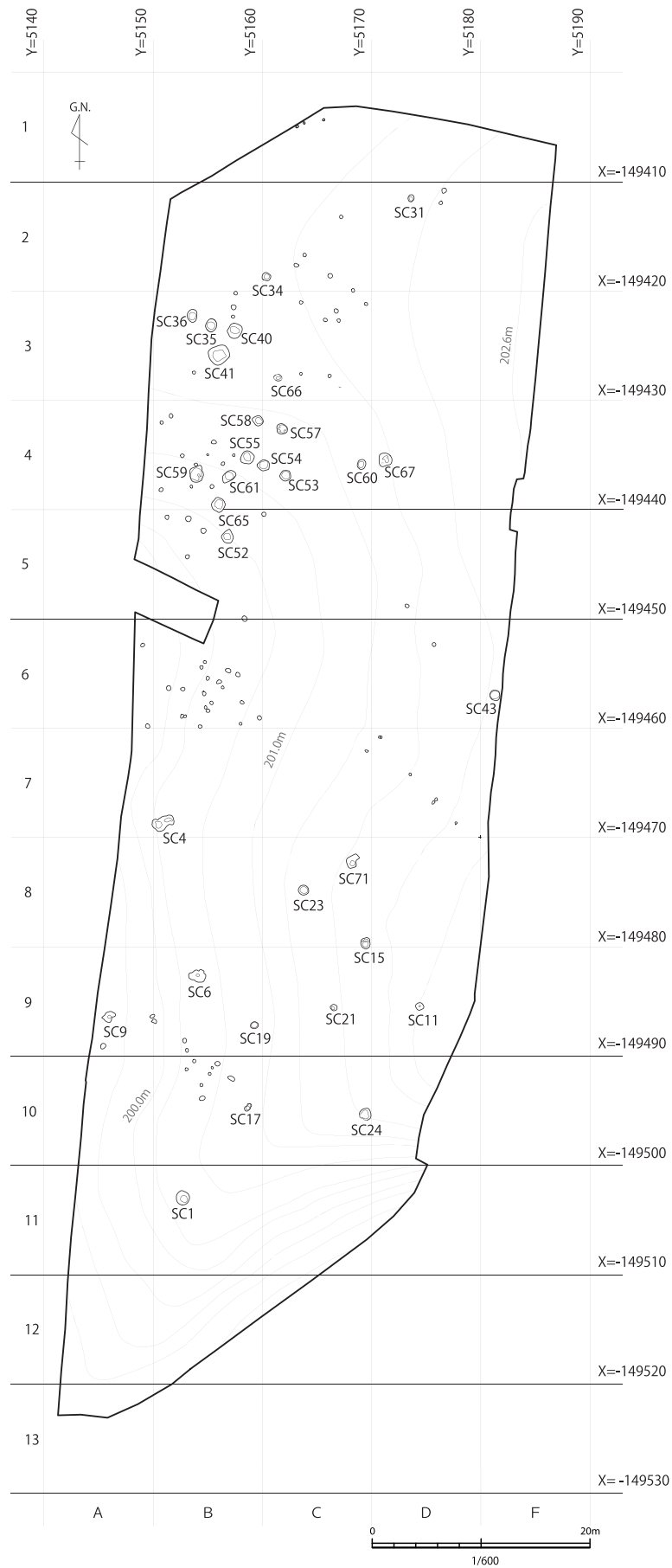
B9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約1.6m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約0.4mである。断面形はすり鉢状で、遺物は埋土中より浅鉢片が出土しているが、小片のため図化していない。

9号土坑（第25図）

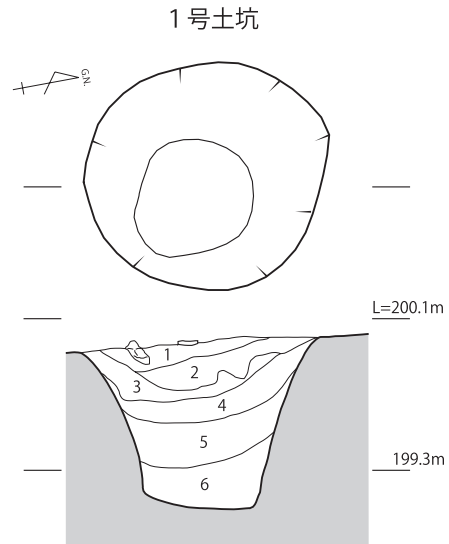
A9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で長軸約1.1m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形はすり鉢状で、遺物は埋土中より浅鉢片が出土しているが、小片のため図化していない。

11号土坑（第25図）

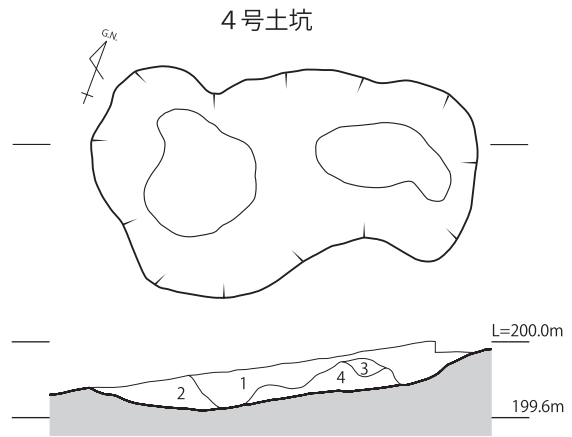
D9グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.7m、検出面からの深さは約0.2mで、断面形はすり鉢状である。遺物は検出面付近より縄文土器が出土しており、深鉢1点（24）、浅鉢3点（25～27）、石器1点（28）を図化した。24は波状口縁で、口縁部のつけ根と肩部が近接する器形で、頸部の内面は鋭い稜となる。口縁端部は内湾する。内外面とも風化・欠損が著しく、外面は貝殻条痕後ナデ調整、内面はナデ調整される。25・26は口縁部内外面に沈線を施しており、口縁部が外反して口縁部内面に段を作り出す。また、胴部は張り出し、胴部最大径が口径を上回る。25～27は内外面ともミガキ調整である。28は砂岩製の砥石で、全体的に赤化し、一部が剥離している。使用面は全体的に凹み、直線状の削痕が部分的に残る。



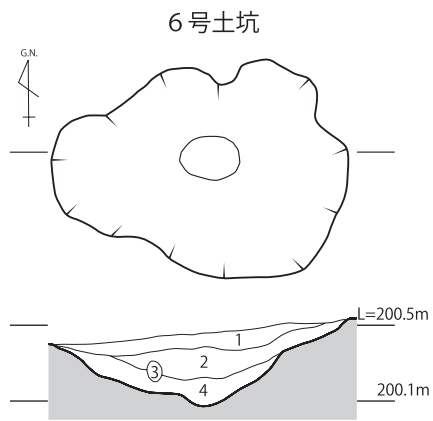
第24図 縄文時代後期～晩期遺構分布図



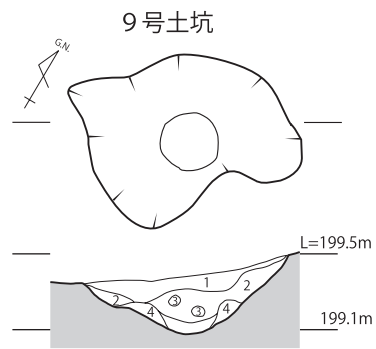
1. 黒褐色土 φ 1~3mmの橙色バミスを3%程度含む しまりがある
2. 黄褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを10%程度含む しまりがない
3. 黄褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを30%程度含む しまりがある
4. 暗褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを15%程度含む
5. 明褐色土 橙色バミスを5%程度含む
6. 褐色土 橙色バミスを5%程度含む



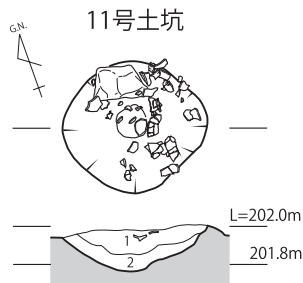
1. 褐色土 φ 1~2mm程度の橙色バミスを1%程度含む しまりあまりない 粘土混じり粗砂
2. にぶい黄褐色土 φ 1~3mmの橙色バミスを5%程度含む 1よりしまりがある
3. 黄褐色土 φ 1~2mm程度の橙色バミスを3%程度含む
4. 明黄褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを10%程度含む



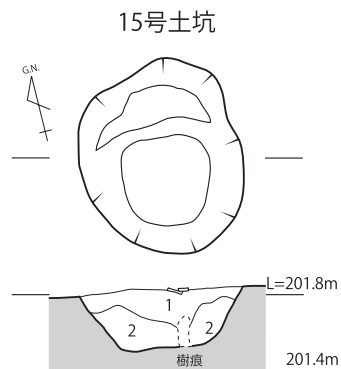
1. 褐色土 φ 0.5~3mmの橙色バミスを3%程度含む
2. にぶい黄褐色土 φ 3mm~5mmの橙色バミスを5%程度含む
3. 黄褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを10%程度含む
4. にぶい黄褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを8%程度含む



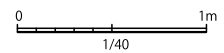
1. 褐色土 φ 1~3mmの橙色バミスを3%程度含む しまりあまりない
2. にぶい褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを5%程度含む 1よりしまりがある
3. 黄褐色土 φ 1~3mmの橙色バミスを5%程度含む 2よりしまりがありブロック状になっている
4. 黄褐色土 φ 0.5~2mmの橙色バミスを8%程度含む
5. 褐色土 φ 3~5mmの橙色バミスを10%程度含む



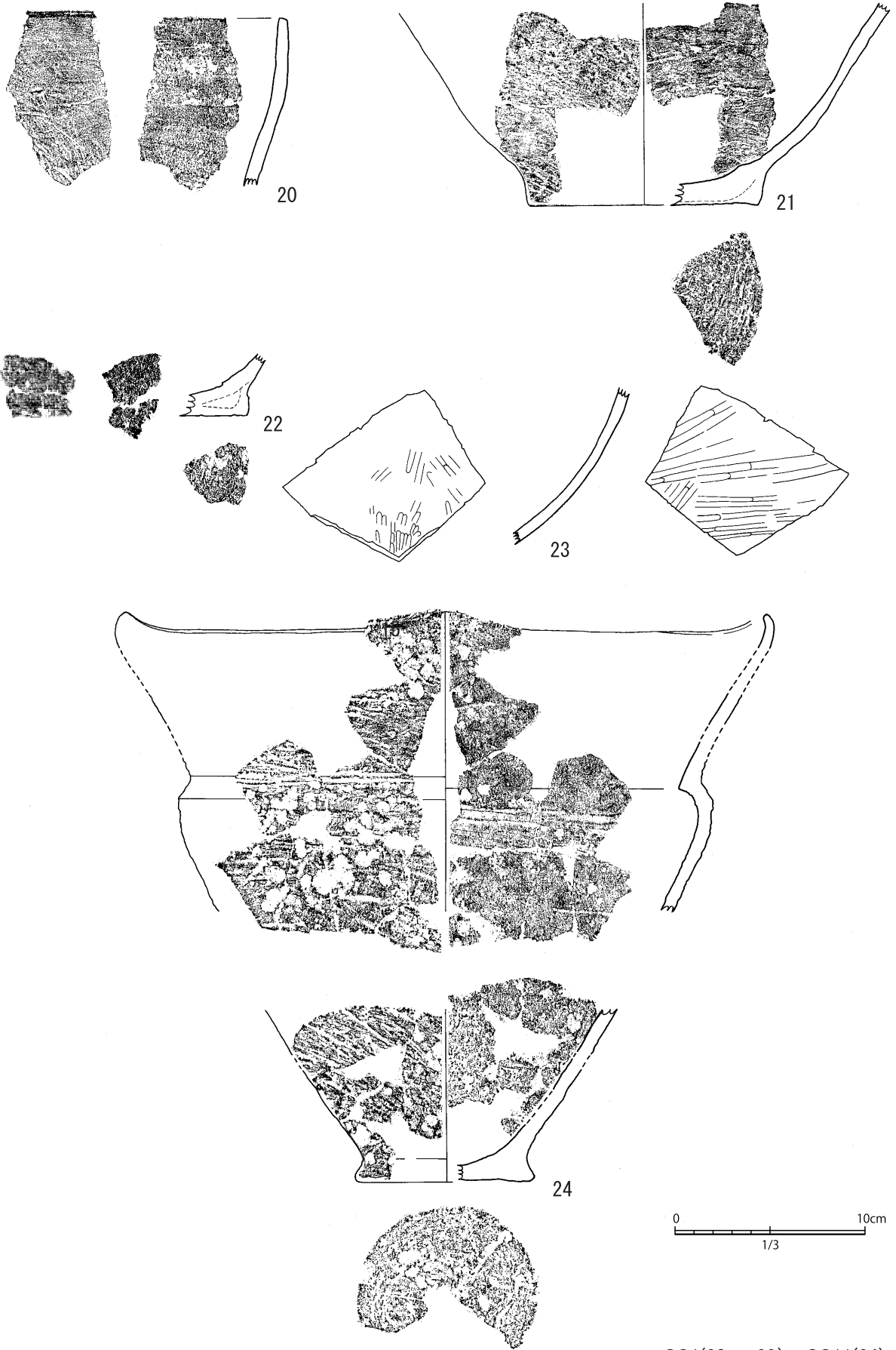
1. 暗褐色土 φ 1mmの橙色バミスを2%含む
2. 褐色土 φ 2~4mmの橙色バミスを5%含む



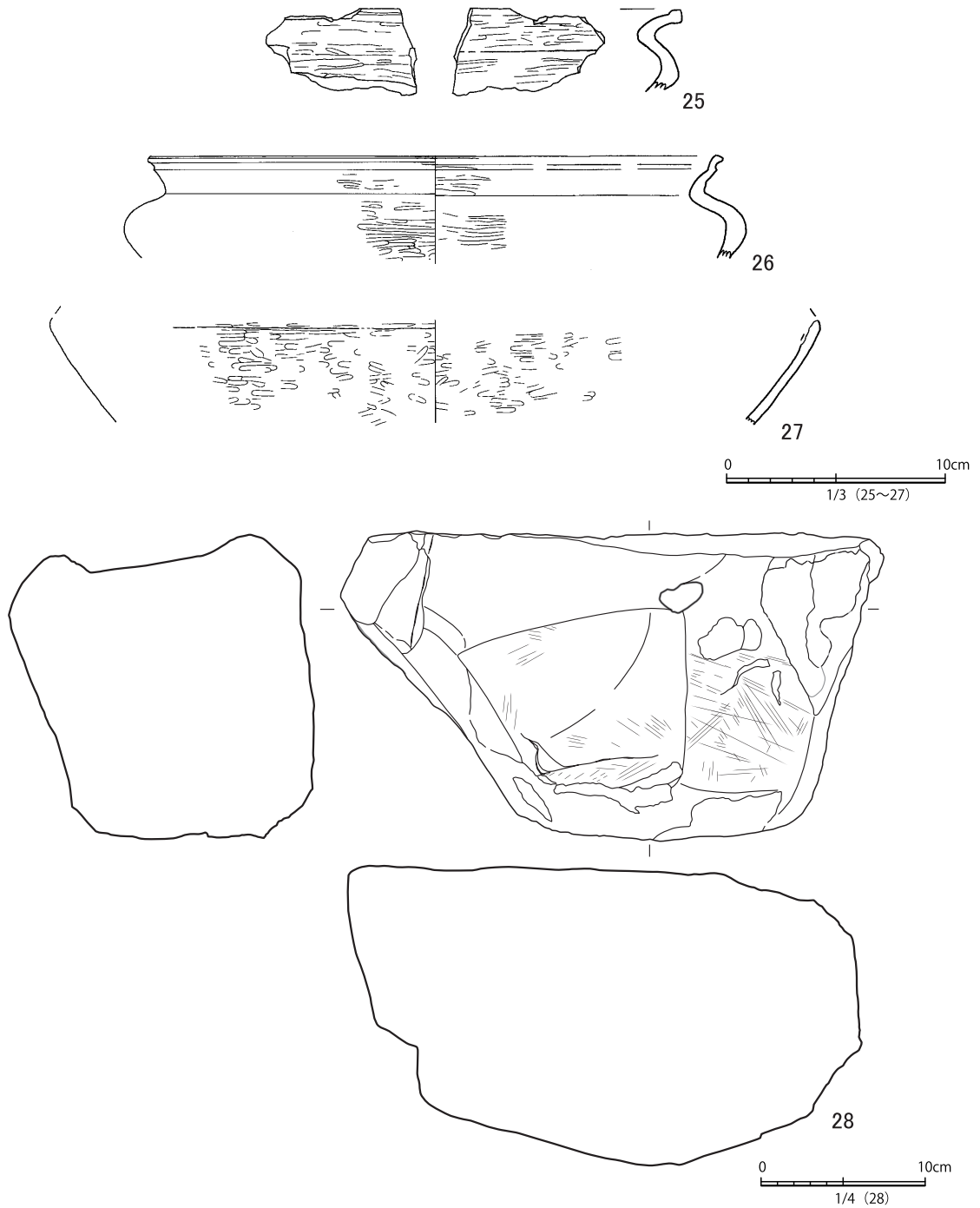
1. 暗褐色土
2. 褐色土 φ 1~5mmの橙色バミスを5%程度、φ 1~3mmの炭化粒をまばらに含む



第25図 1・4・6・9・11・15号土坑実測図



第26图 1·11号土坑出土遗物实测图



第27図 11号土坑出土遺物実測図

15号土坑 (第25図)

C8グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは緩やかである。遺物は埋土中より、深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

17号土坑 (第28図)

B10グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.4m、検出面からの深さは約0.4mである。断面形はすり鉢状に近く、北東側は段落上に深くなる。遺構に伴う遺物は出土していない。

19号土坑（第28図）

B9グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中より、深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

21号土坑（第28図）

C9グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は逆台形状で、東側の立ち上がりは緩やかである。遺構に伴う遺物は出土していない。

23号土坑（第28図）

C8グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.0m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は皿状で、立ち上がりは急である。遺物は、床面付近より縄文土器及び石器が出土しており、深鉢3点（29～31）、浅鉢3点（32～34）、石器2点（35・36）を図化した。29の口縁部は「く」の字形に屈曲し、口径が胴部最大径より大きく、その胴部の屈曲はゆるい器形をなす。内外面はともに貝殻条痕後ナデ調整される。30は逆「ハ」の字形に広がる胴部である。内外面ともにナデ調整されるが、内面に比べ外面は粗いナデ調整である。また、外面には黒斑が大きく2カ所ある。31は底径9.5cmの底部で、その端部は外方に張り出す。32は頸部を中心とする破片で、短く外反する口縁部が付くと考えられる。また、胴部にかけて接合痕が残る。33は胴部から底部で、平底に近い丸底を呈す。内外面は丁寧なミガキ調整で、内面に黒斑がある。34は口縁部から底部である。復元口径は41.5cm、外面は貝殻条痕後粗いナデ調整、内面は貝殻条痕文が認められる。また、外面にススが付着している。

35・36は砂岩製の磨石で、35は平面形が円形を呈し、全体的に磨面が見られるが、一部が欠損している。36は正面に磨面が残るが、裏面側は複数回の打割と剥離調整が認められる。

24号土坑（第28図）

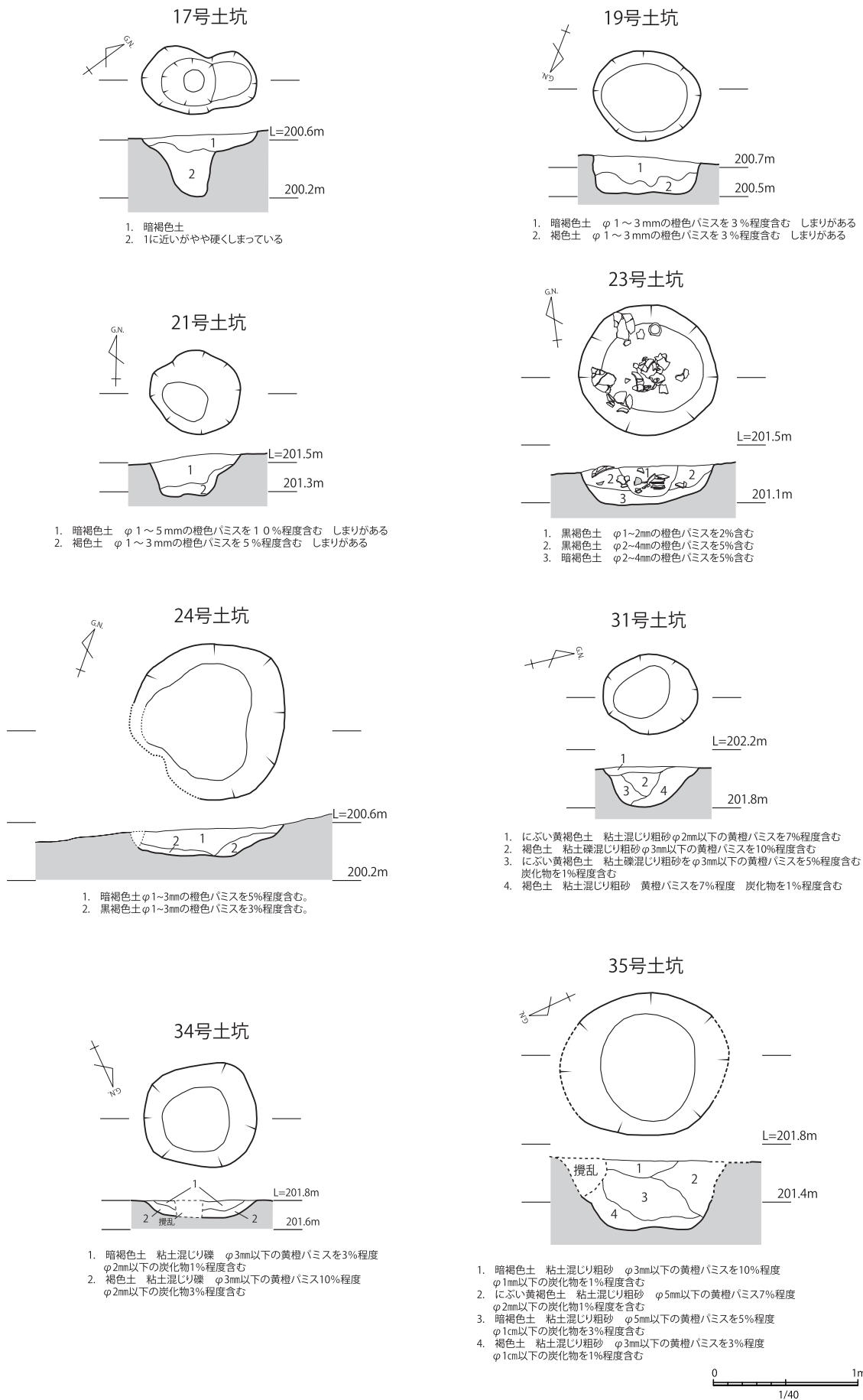
C10グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.2m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は方形に近く、南西側は攪乱している。遺物は、埋土中より縄文土器が出土しており、深鉢1点（37）、浅鉢3点（38～40）を図化した。37は復元底径8.6cmの底部で、端部は外方に張り出している。38は口縁部が欠損しており、胴部は屈曲して稜をなす。39は短く「く」の字形に屈曲する口縁部で、その端部は玉縁状となる。胴部は屈曲してうすい稜をなす。40は胴部でも下半部にあたる。内外面には丁寧なヘラミガキ調整が施される。

31号土坑（第28図）

D2グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.7m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は北側の立ち上がりが緩やかな椀状で、遺構に伴う遺物は出土していない。

34号土坑（第28図）

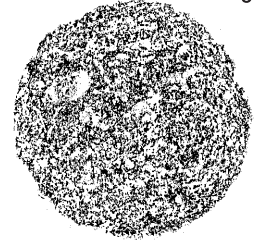
C2グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約0.8m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約0.15mである。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状である。遺物は、埋土中より縄文土器が出土しており、浅鉢2点（41・42）を図化した。41・42は内外面ともに丁寧なミガキ調整で、41は短く外反する口縁部がつき、その端部は短く屈曲する。また、胴部最大径が口径を上回る。42は口縁端部を失うが、41と類似した器形と思われる。



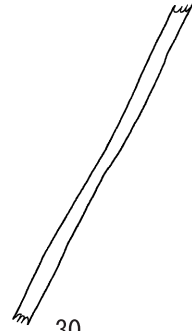
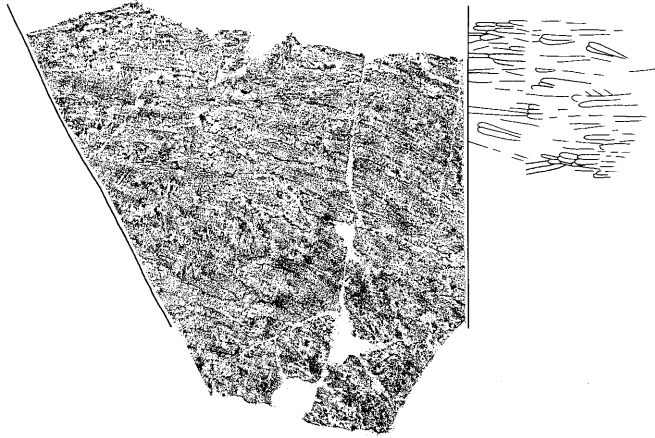
第28図 17・19・21・23・24・31・34・35号土坑実測図



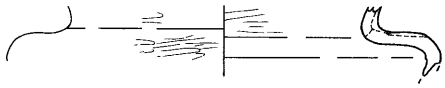
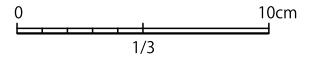
31



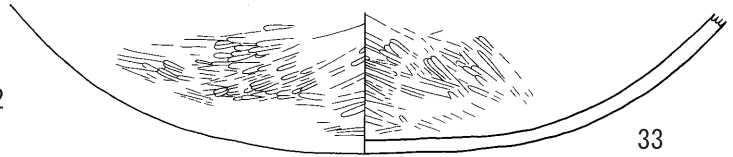
29



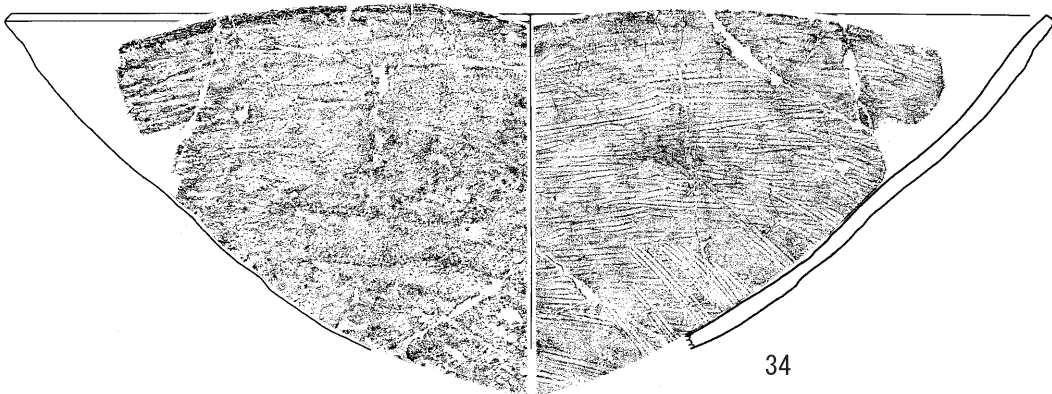
30



32

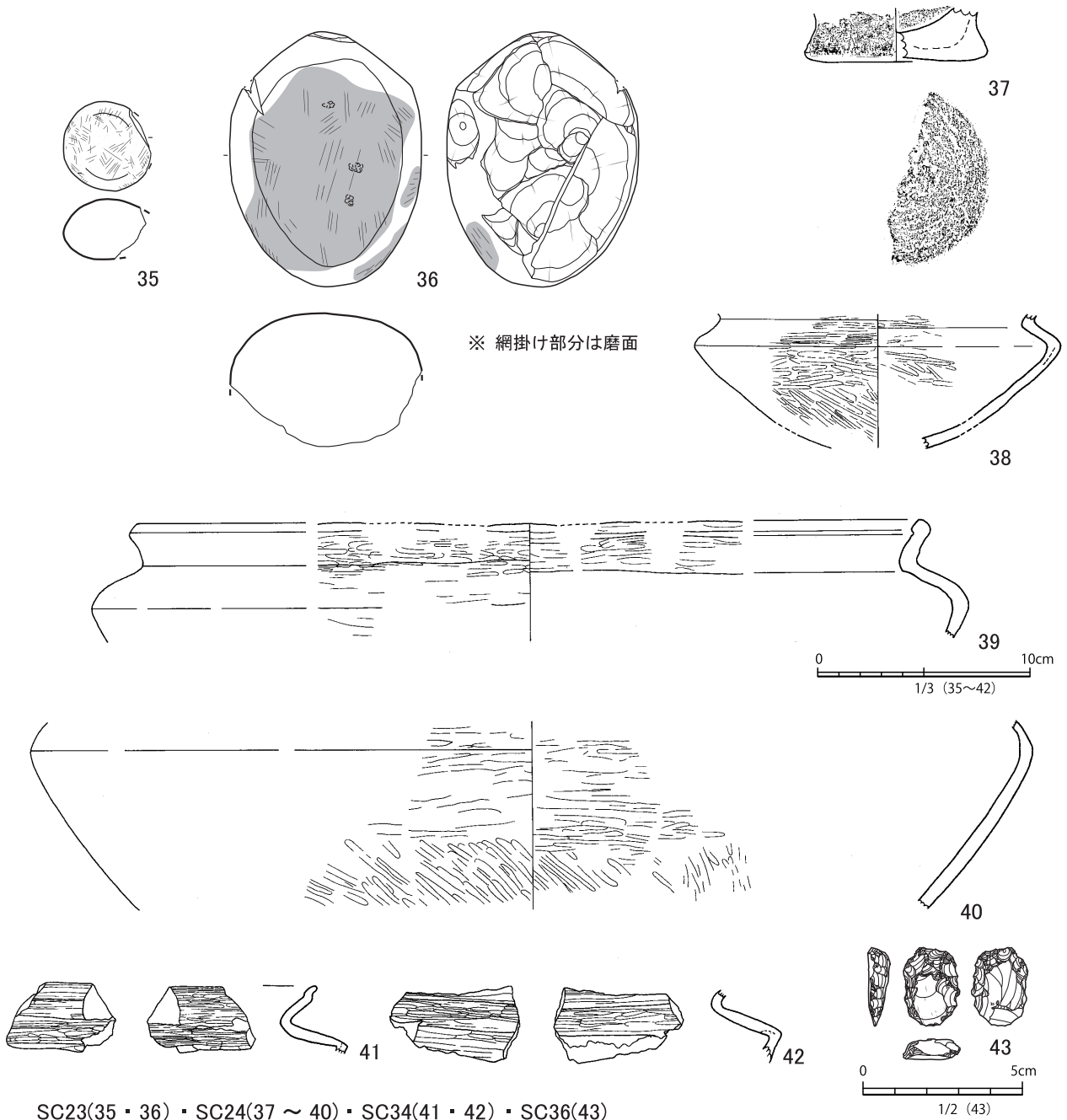


33



34

第29图 23号土坑出土遺物実測図



SC23(35・36)・SC24(37～40)・SC34(41・42)・SC36(43)

第30図 23・24・34・36号土坑出土遺物実測図

35号土坑 (第28図)

B3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は逆台形で立ち上がりは急である。遺物は埋土中より深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

36号土坑 (第31図)

B3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.2m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物には縄文土器及び石器があり、石器1点(43)を図化した。43は黒曜石製(腰岳産)のスクレーパーで、周縁を剥離調整して刃部とする。

40号土坑（第31図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.4m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状であり、遺物は底面よりやや浮いた位置で縄文土器及び石器が出土している。出土遺物は、隣接する41号土坑より出土した遺物と互いに接合関係があり、接合関係にある深鉢2点(44・45)を含め、浅鉢1点(46)、石器1点(47)を図化した。

44は口縁部が外反し、口縁部外面に断面三角形の突帯がつく。45は復元底径8cmの底部で、端部が外方に張り出す。46は直線的に開く口縁部で、口縁端部は玉縁状に肥厚する。47はホルンフェルス製の石鏃である。平面形は三角形で、正面の両側縁に剥離調整を施している。

41号土坑（第31図）

B3グリッドに位置している。平面形は不整な方形で、長軸約1.9m、短軸約1.7m、検出面からの深さは約1.0mである。断面形は逆台形状で、立ち上がりは急である。埋土は大きく5層に分かれるが(第31図)、特に4層中(床面よりやや浮いた位置)より大量の縄文土器片が出土しており、その総重量は約14.1kgである。埋土の堆積状況により、この4層を含む2～5層は、人為的な埋め戻しに伴うもの、1層はその後の自然堆積と判断される。遺物は、40号土坑と接合関係にある62～64を含め、深鉢13点(48～58・62・63)、浅鉢4点(59～61・64)を図化した。

なお、4層中より炭化物が出土しており、AMS法による放射性炭素分析を実施した結果、 2925 ± 25 年¹⁴C BPの測定値が得られた。

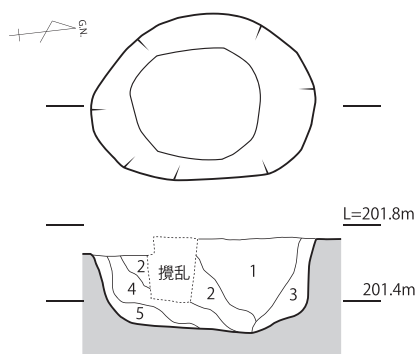
48～58は深鉢で、内外面ともにナデ調整される。48～50は口縁部がやや直立気味に外反している。また、48は胴部最大径が口径を上回り、胴部が鋭角に屈曲するのに対し、49・50は口径と胴部最大径が等しく、胴部の屈曲は緩くなる。51・52は口縁部や胴部に屈曲をなさず、そのまま立ち上がる。51は口縁部に補修孔が1カ所あり、口縁端部の外面は台形状に肥厚し、受け口状となる。52・53は口縁部外面に断面三角形を呈する突帯がつく。54～57は端部が外方に張り出す底部で、54・55・57は上げ底状である。58は口縁部が外反し、口縁部外面に断面が台形状の突帯がつく。胴部は稜をなして鋭角に屈曲している。59～61は縄文土器の浅鉢で、内外面ともにミガキ調整されている。59は口縁部が短く内傾する。60は口縁部が僅かに外反し、口縁部内面に沈線文が一条巡る。胴部は張り出し気味で、扁球状を呈する。61は丸底の浅鉢で底部外面には、あばた状の焼成時破裂痕が認められる。

62～64は40号土坑と互いに接合関係のある縄文土器である。62・63は深鉢で、口縁部は外反しており、口縁部のつけ根と胴部の屈曲部が近接し、頸部内面には明確な段を有する。62は口縁部外面に断面三角形の突帯がつく。64は精製浅鉢で、大きく外方に開く口縁部に半球状の胴部から底部がつく。口縁部内面には沈線が1条施される。

43号土坑（第31図）

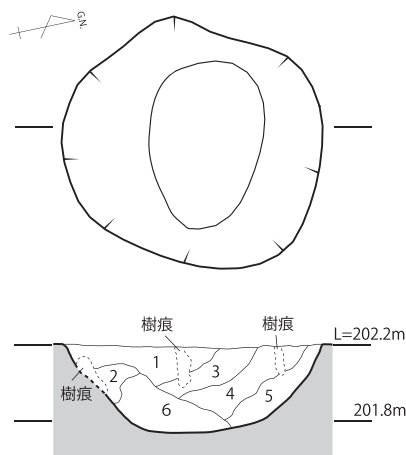
F6グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約0.9m、検出面からの深さは約0.8mである。断面形は方形に近く、南側は段落上に深くなっている。埋土は大きく1～6層に分かれるが、各層にブロック状の土塊が含まれることから、人為的な埋め戻しによるものと考えられる。遺物は土坑底面上で、深鉢の底部(65)が1点、立位の状態で出土した。65は底径9.1cmの底部で、端部が外方に張り出しており、内外面はともにナデ調整される。

36号土坑



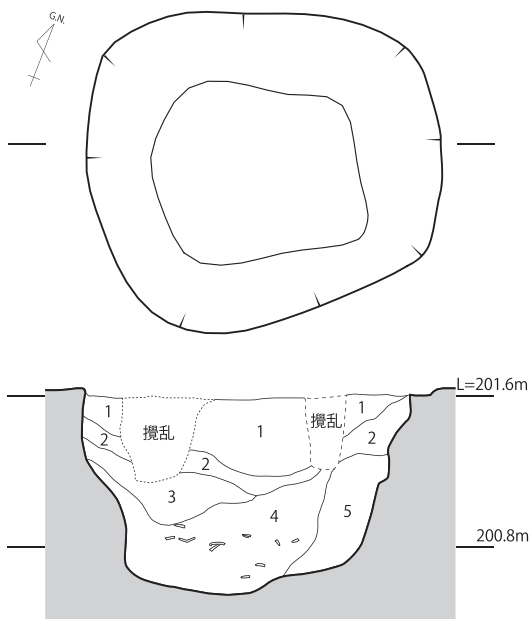
1. にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ2mm以下の黄橙/バミスを5%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
2. 褐色土 粘土混じり粗砂 φ2mm以下の黄橙/バミスを3%程度 炭化物を極わずか含む
3. 褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の黄橙/バミスを5%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
4. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の黄橙/バミスを15%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む
5. 黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の黄橙/バミスを5%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度含む

40号土坑



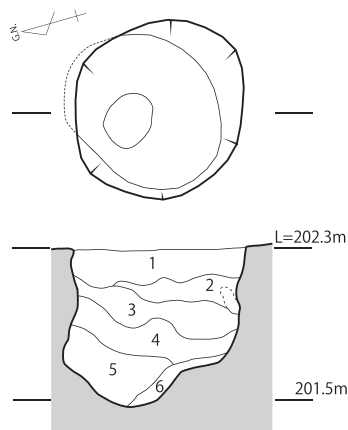
1. 褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の黄橙/バミスを15%程度, φ1mm以下の炭化物をわずかに含む φ1~2mmの炭化物を5%程度含む
2. 黄橙ロームのブロックが主体を成す 基本土層VII層のものと考えられる 壁面の崩落土か
3. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の黄橙/バミスを7%程度, φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
4. 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ1cm以下の黄橙/バミスを7%程度, φ5mm以下の炭化物を3%程度含む
5. にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ1cm以下の黄橙/バミスを10%程度, φ1cm以下の炭化物を1%程度含む
6. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ1cm以下の黄橙/バミスを3%程度, φ1cm以下の炭化物を3%程度含む

41号土坑

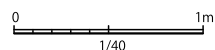


1. 褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の黄橙/バミスを15%程度, φ3mm以下の炭化物を1%程度含む
2. 褐色土 粗砂混じり粘土 φ5mm以下の黄橙/バミスを15%程度, φ3mm以下の炭化物を1%程度含む
3. 暗褐色土 粗砂混じり粘土 φ3mm以下の黄橙/バミスを10%程度, φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
4. 黒褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の黄橙/バミスを10%程度, φ5mm以下の炭化物を5%程度 φ3mm以下のアカホヤブロック 含む
5. 暗褐色土 粗砂混じり粘土 φ3mm以下の黄橙/バミスを3%程度, φ2mm以下の炭化物を1%程度 φ3cm前後の褐色礫混シルトブロックを20%程度含む しまりが弱い

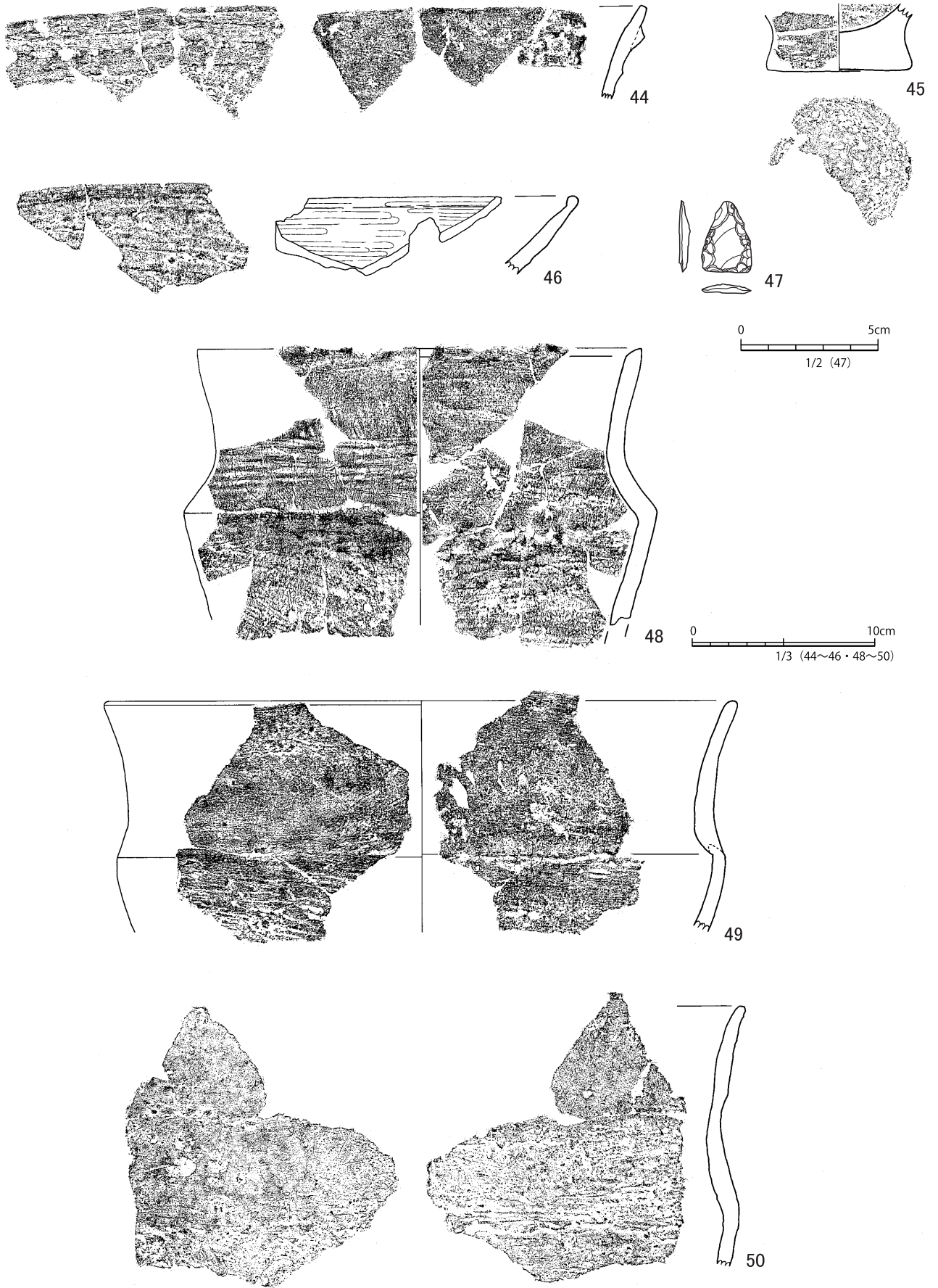
43号土坑



1. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄橙/バミスを7%程度 φ3mm以下の炭化物を3%程度含む
2. 黒褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄橙/バミスを10%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
3. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄橙/バミスを10%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度含む
4. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ2cm以下の明黄橙/バミスを3%程度 φ3mm以下の炭化物を3%程度, 基本土層VII層のφ3cm以下のブロックを10%程度含む
5. 暗褐色土 礫混じりシルト φ5mm以下の明黄橙/バミスを5%程度 φ5cm以下のにぶい黄褐色土ブロックを15%程度含む
6. 黒褐色土 礫混じりシルト φ3mm以下の明黄橙/バミスを3%程度 φ3cm以下の黒褐色土ブロックを7%程度含む

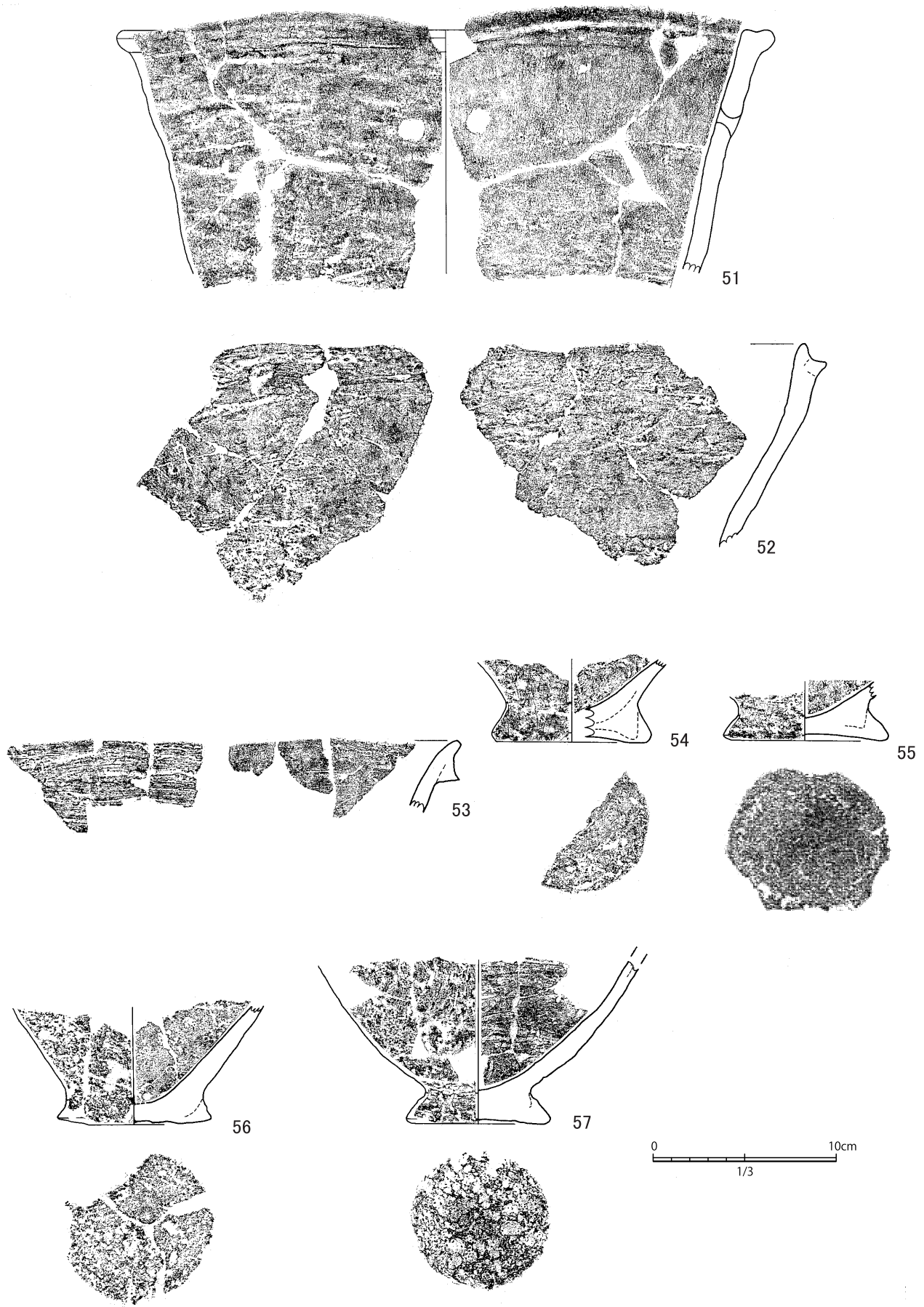


第31図 36・40・41・43号土坑実測図

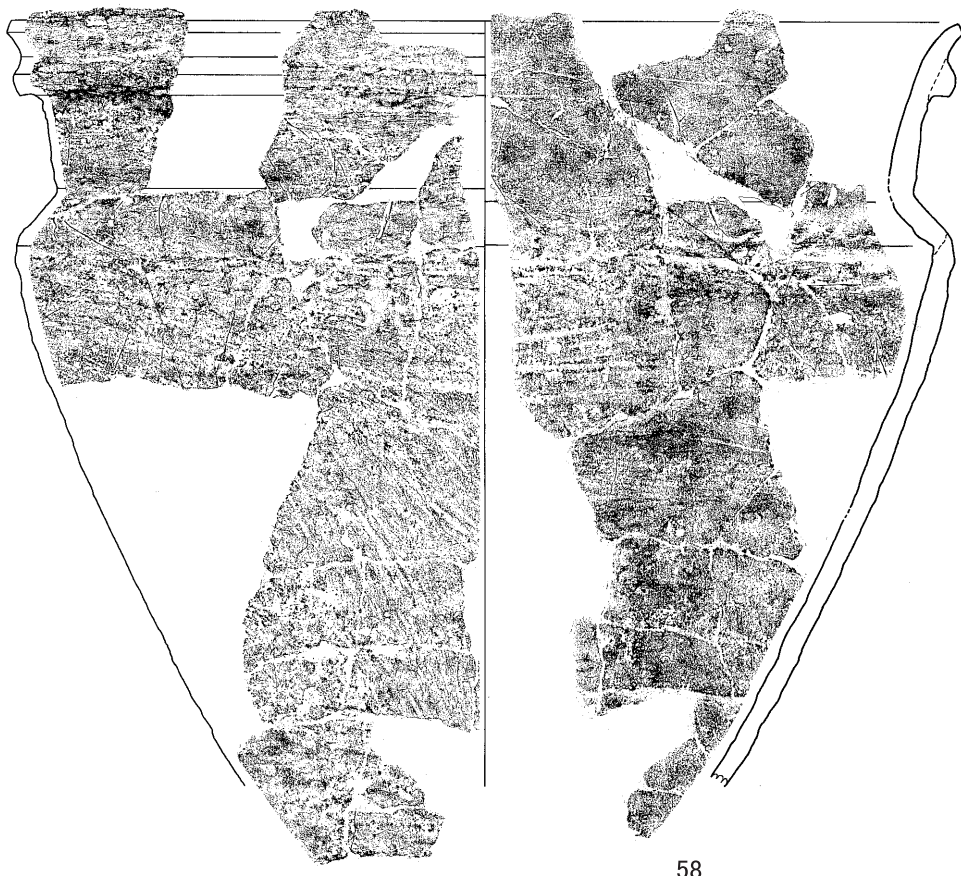


SC40(44 ~ 47) ・ SC41(48 ~ 50)

第32図 40・41号土坑出土遺物実測図



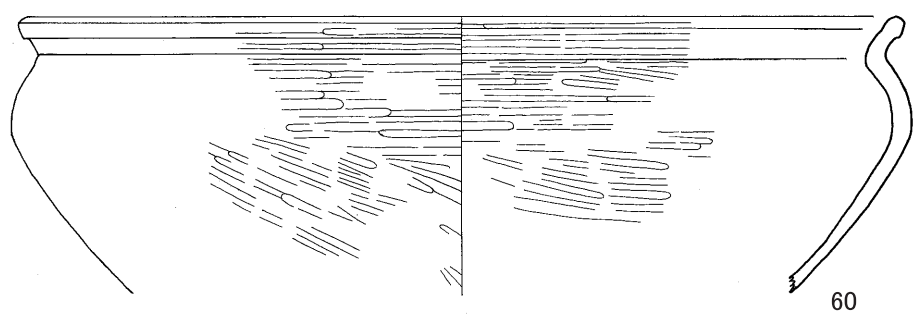
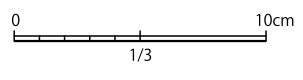
第33图 41号土坑出土遺物実測図（1）



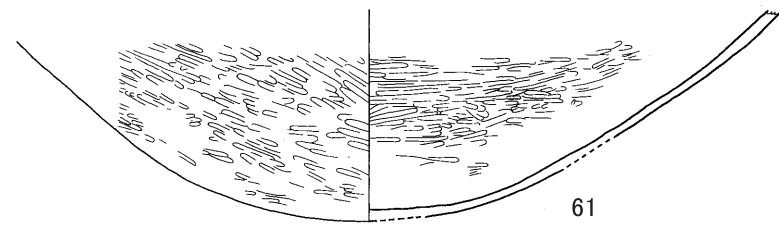
58



59

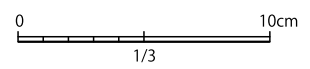
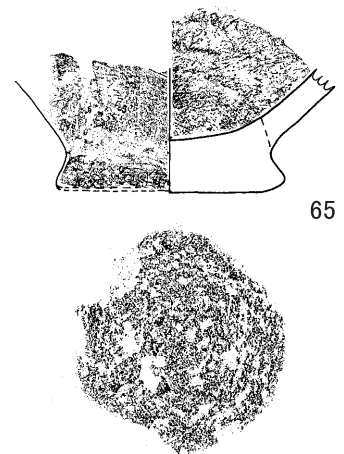
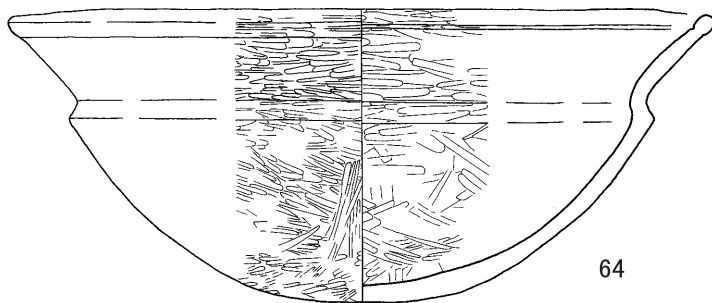
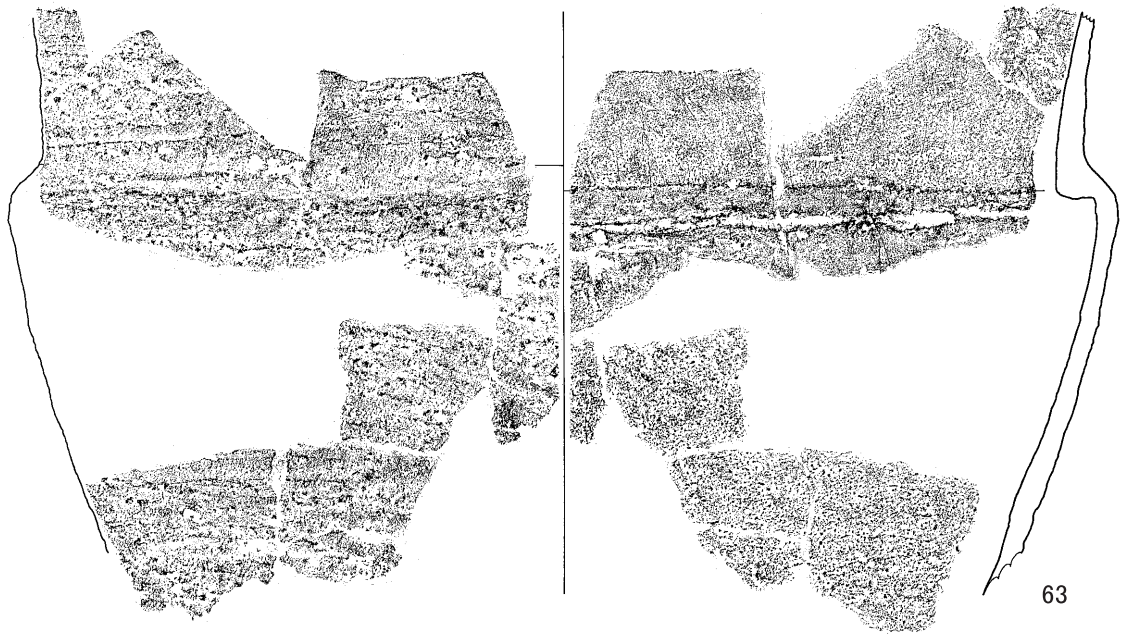
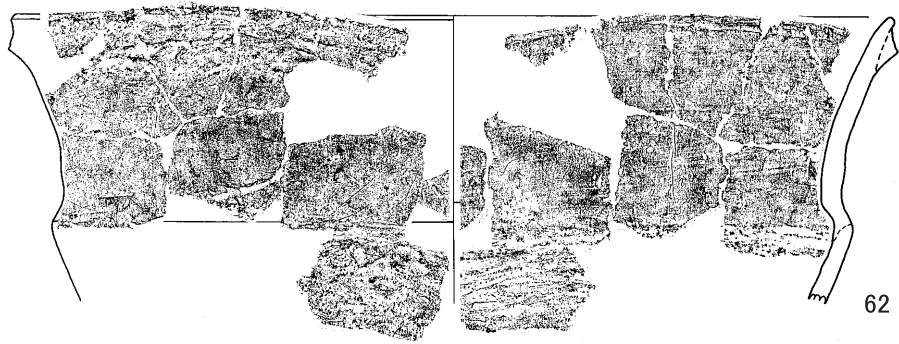


60



61

第34图 41号土坑出土遗物实测图(2)



SC41(62 ~ 64) · SC43(65)

第35图 41·43号土坑出土遺物実測図

52号土坑（第36図）

B5グリッドに位置している。平面形は方形基調で、北側は張り出している。長軸約1.3m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.6mである。断面形は椀状に近く、北側は緩やかな傾斜がつく。遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

53号土坑（第36図）

C4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.0m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状で、遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

54号土坑（第36図）

B4～C4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.1m、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は立ち上がりの緩やかな椀状で、遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

55号土坑（第36図）

B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.3m、短軸約1.2m、検出面からの深さは約0.55mである。断面形は椀状に近く、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点(66)、浅鉢1点(67)を図化した。66は胴部で外面がナデ調整、内面には貝殻条痕文が認められる。67は内外面ともにミガキ調整され、口縁部の内外面に沈線を施す。

57号土坑（第36図）

C4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.1m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中から、縄文土器が出土しており、深鉢1点(68)、浅鉢1点(69)を図化した。68は口縁部外面に幅広の突帯を貼り付け、さらに1条の沈線を施す。69は扁球状の器形を呈する。内外面ともにミガキ調整で、外面に接合痕が残る。

58号土坑（第36図）

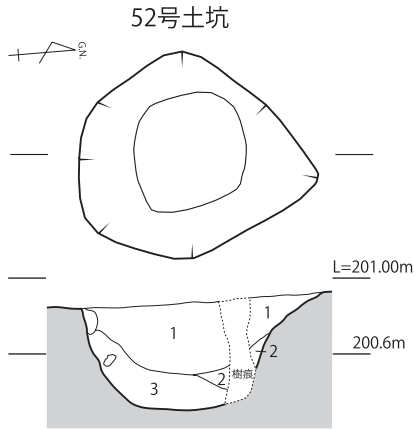
B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.1m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.25mである。断面形は立ち上がりの緩やかな皿状であり、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中より、縄文土器の深鉢片等が出土しているが、小片のため図化していない。

59号土坑（第37図）

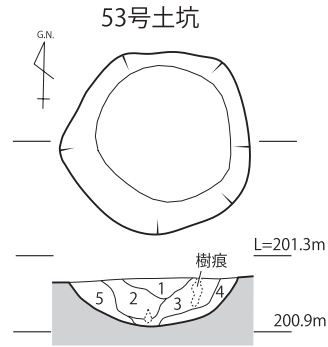
B4グリッドに位置している。平面形は方形基調の不整形で、長軸約1.6m、短軸約1.2m、検出面からの深さは約0.7mである。断面形は逆台形で、立ち上がりは急である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、浅鉢1点(70)、深鉢1点(71)を図化した。70は口縁端部を玉縁状に肥厚させ、その内外面に沈線を施す。71は口縁部が短く、直立気味に外反し、口径と胴部最大径が近似する。また、胴部の屈曲は緩やかで、内外面には貝殻条痕文が認められる。

60号土坑（第37図）

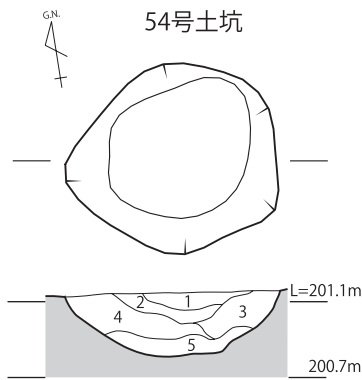
C4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.9m、短軸約0.7m。検出面からの深さは約0.25mで、断面形は皿状である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、浅鉢1点(72)を図化した。72は大きく外方に開く器形を呈する。口縁端部の外面は連続的な指頭痕が残るが、口縁端部と口縁部内面は丁寧にナデ調整されていることから、指頭痕は調整痕というより、加飾的な意味合いが強いとみられる。



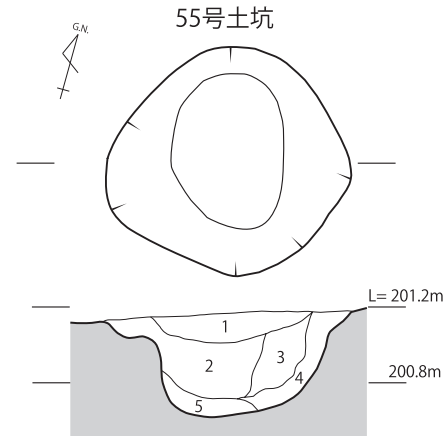
1. 黒褐色土 φ5mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ2mm以下の炭化物を1%程度含む
2. にぶい黄褐色土 φ5mm以下の明黄褐/バミスを3%程度含む
3. 褐色土 φ50mm以下のにぶい黄褐ブロックを20%程度含む 壁面が崩壊したものと考える



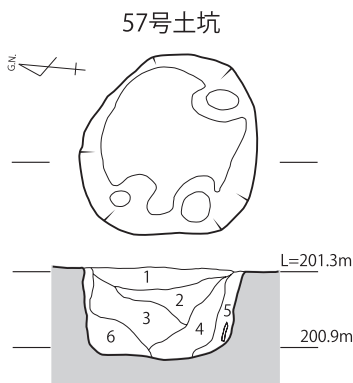
1. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ2mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
2. にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを7%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度含む
3. 黒褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度含む
4. にぶい黄褐色土 粘土混じり礫 φ2mm以下の明黄褐/バミスを7%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む
5. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度 黄褐土(基本土層VII層)ブロックを20%程度含む



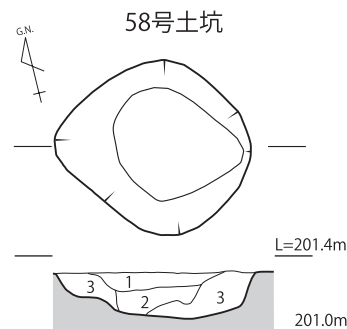
1. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ2mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ2mm以下の炭化物を1%程度含む
2. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 径10cm以下のVI層(御池ボラ)ブロックを30%程度含む
3. 黒褐色土 粘土混じり粗砂 径5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ2mm以下の炭化物を1%程度含む
4. 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 径5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 径3mm以下の炭化物を3%程度含む
5. にぶい黄褐色土 粘土混じりシルト φ1mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む



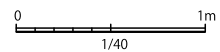
1. 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ2mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
2. 暗褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む
3. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ1cm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
4. にぶい黄褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ1cm以下の炭化物を1%程度含む
5. 灰黄褐色土 粘土混じり礫 φ5mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ2mm以下の炭化物を1%程度含む



1. 褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを15%程度 φ5mm以下の炭化物を3%程度含む
2. にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ3mm以下の炭化物を3%程度含む
3. 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを7%程度 φ3mm以下の炭化物3%程度を含む
4. にぶい黄褐色土 φ3mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ1cm以下の炭化物を3%程度含む
5. 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを30%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む 壁面の崩壊土と考えられる
6. 褐色土 粘土混じり礫 φ5mm以下の明黄褐/バミスを3%程度 φ2mm以下の炭化物を1%程度含む 壁面の崩壊土と考えられる



1. 黒褐色土 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度含む
2. 灰黄褐色土 φ5mm以下の明黄褐/バミスを15%程度含む
3. にぶい黄褐色土 φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度含む



第36図 52~55・57・58号土坑実測図

61号土坑（第37図）

B4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.4m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は逆台形状で、西側は緩やかな傾斜がつく。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢3点（73～75）、浅鉢1点（76）を図化した。73・74は端部が外方に張り出す底部で、内外面はナデ調整される。75は口縁部外面に幅広の突帯を貼り付け、1条の沈線文を入れる。76は頸部に蝶ネクタイ状の突起を貼り付けている。

65号土坑（第37図）

B4グリッドに位置している。平面形は不整な円形で、直径約1.3m、検出面からの深さは約1.0mである。断面形は逆台形に近く、底面に直径0.4m、深さ0.3mの小穴がある。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点（77）、浅鉢5点（78～82）を図化した。

77は端部が外方に緩く張り出す底部である。78～80は胴部で、内外面ともにミガキ調整される。81は埋土の中位付近から出土した浅鉢で、1個体が押しつぶされたような状況（図版11）で出土した。口縁部は短く直口する器形で、胴部は長胴を呈し、底部は平底に近い丸底である。内外面ともに丁寧なヘラミガキ調整され、口縁部直下には焼成時破裂痕が1箇所認められる。底部には被熱痕が、胴部全体にはススが付着している。82の口縁端部外面にみられる指頭痕は72と同様な手法である。

66号土坑（第40図）

C3グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は皿状で、立ち上がりは緩やかである。遺物は床面付近から縄文土器及び石器が出土しており、深鉢4点（83～86）、浅鉢1点（87）、石器1点（88）を図化した。

83は短く外反する口縁部で、内外面ともに貝殻条痕後に粗いナデ調整される。84～86は内外面ともにナデ調整された胴部で、逆「ハ」の字形に直線的にひらく。85は胴部と頸部の境目に屈曲をもつ。87は大きく外方に向けて立ち上がる口縁部で、その外面は粗いナデ調整、内面はナデ調整される。88は砂岩製の磨敲石である。表裏面に磨面が見られ、敲打痕が周縁を巡る。

67号土坑（第40図）

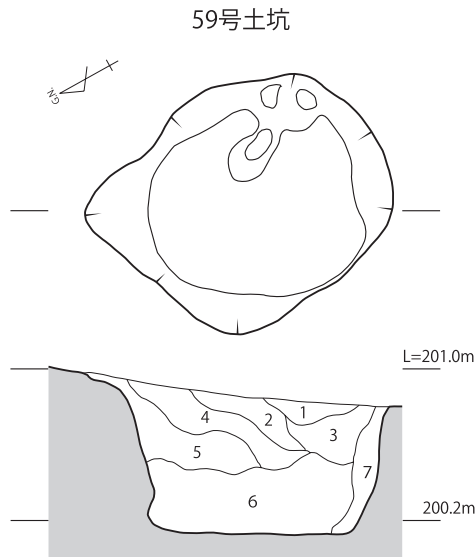
D4グリッドに位置している。平面形は不整な楕円形で、長軸約1.3m、短軸約1.1m、検出面からの深さは約0.65mである。断面形は逆台形で、西側は段落上に深くなっている。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢1点（89）、浅鉢1点（90）を図化した。

89は端部が外方に強く張り出す底部で、底径8.4cm、内外面はナデ調整される。90は口縁端部を僅かに肥厚させ、内面に沈線を施す。

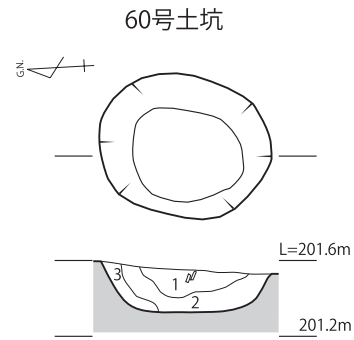
71号土坑（第40図）

C8グリッドに位置している。平面形は方形基調で、東側の壁面は崩れている。長軸約1.1m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約0.5mである。断面形は方形に近く、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は埋土中から縄文土器が出土しており、深鉢2点（91・92）を図化した。なお、92は、65号土坑より出土した遺物と互いに接合関係がある。

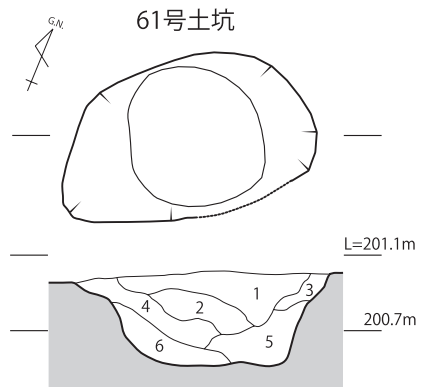
91は口縁端部を肥厚させ、内面に沈線文を施す。92は口縁部が大きく外方に開き、外面側は貝殻条痕文が認められるが、内面側はミガキ調整される。



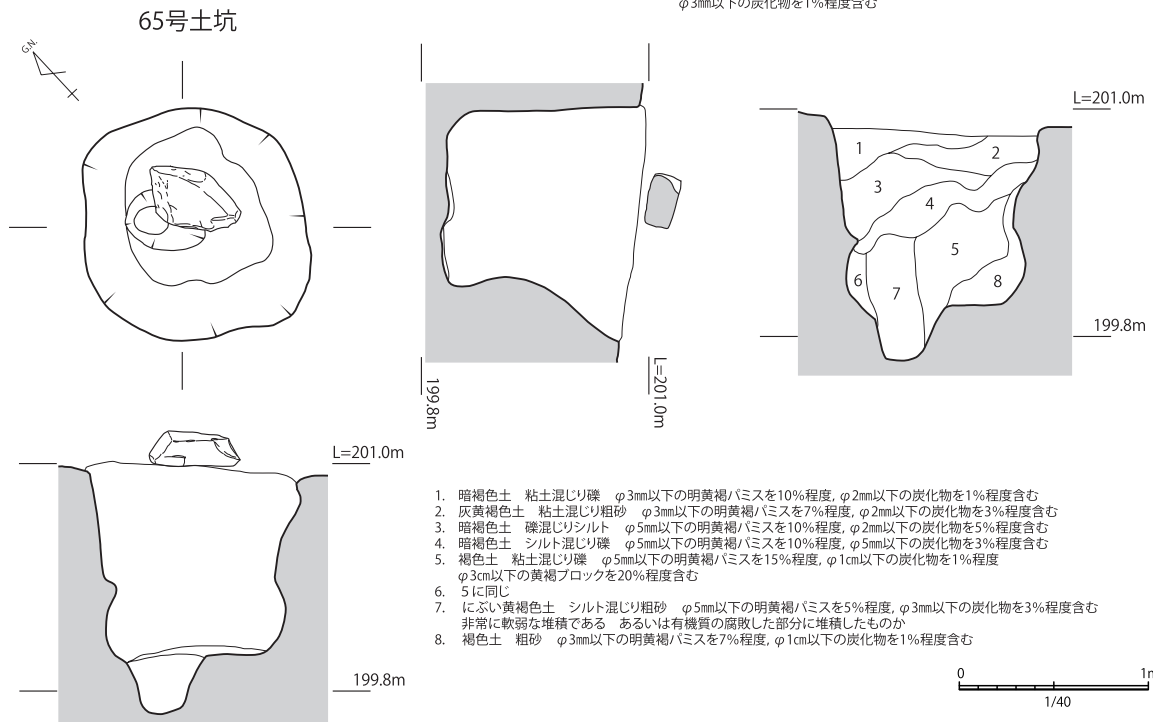
- 褐色土 粘土混じり礫 φ2mm以下の明黄褐/バミスを15%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む
- にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
- 褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを15%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
- にぶい黄褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを20%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む
- 暗褐色土 礫混じりシルト φ3mm以下の明黄褐/バミスを7%程度 φ5mm以下の炭化物を3%程度含む
- 暗褐色土 礫混じりシルト φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ5mm以下の炭化物を3%程度、φ3cm以下のにぶい黄褐ブロック30%程度含む
- 褐色土 礫混じり粗砂 φ2mm以下の明黄褐/バミスを3%程度 φ1mm以下の炭化物を3%程度含む



- にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む
- にぶい黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを5%程度を含む
- 褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを5%程度 φ1mm以下の炭化物を1%程度含む

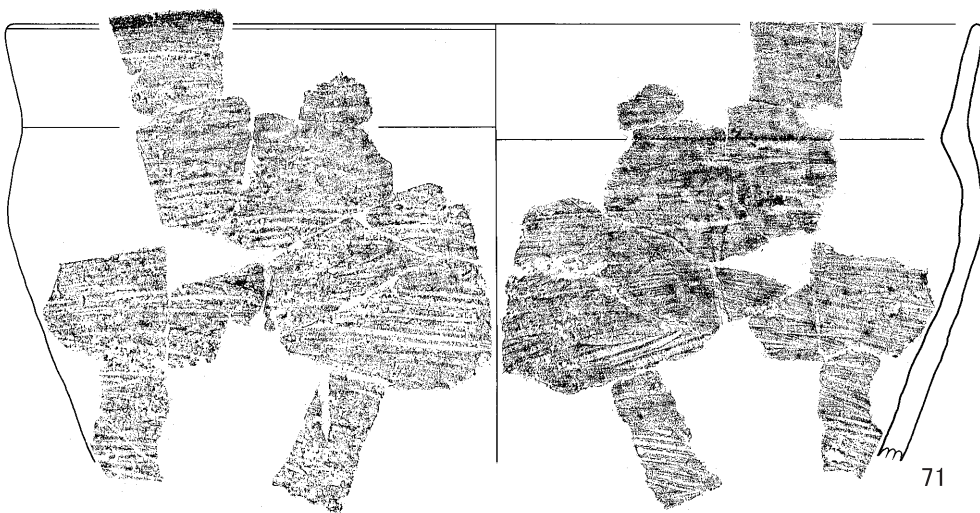
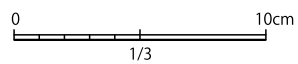
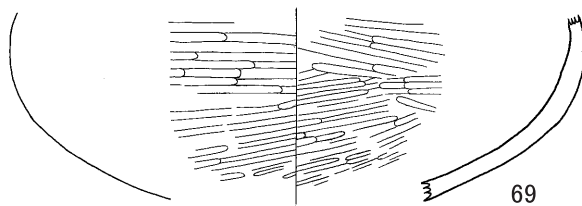
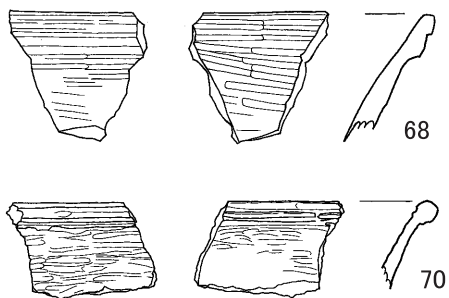
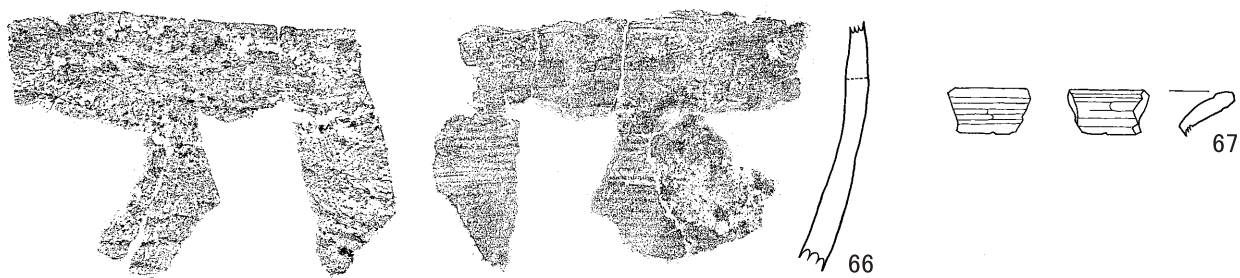


- 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ3mm以下の炭化物を3%程度含む
- 黒褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを30%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
- 基本VI層ブロック 壁面が崩落したものと考えられる
- 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ3mm以下の炭化物を3%程度含む
- 黒褐色土 粘土混じり粗砂 φ1cm以下の明黄褐/バミスを10%程度 φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
- 暗褐色土 粘土混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを7%程度 φ3mm以下の炭化物を1%程度含む



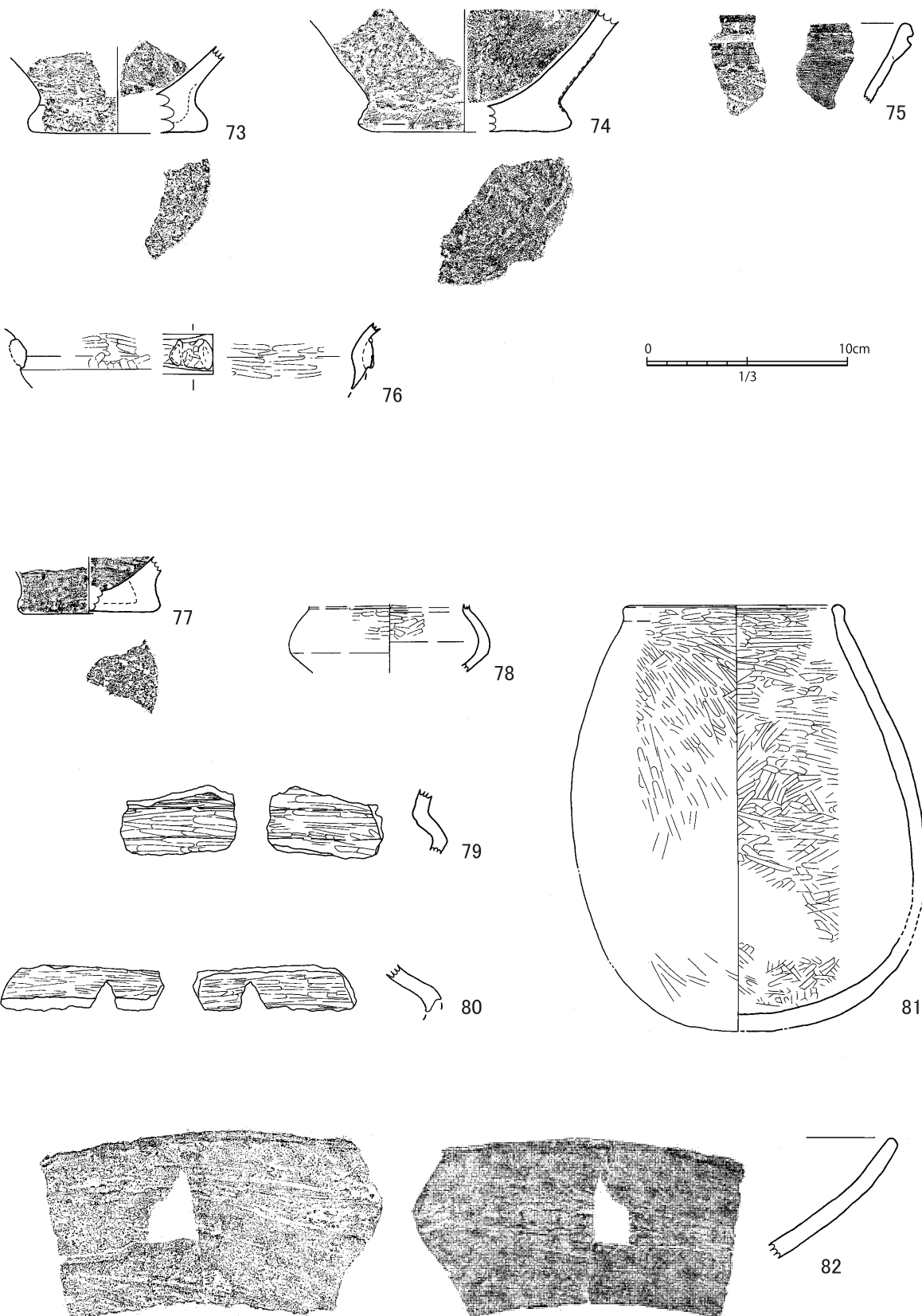
- 暗褐色土 粘土混じり礫 φ3mm以下の明黄褐/バミスを10%程度、φ2mm以下の炭化物を1%程度含む
- 灰黄褐色土 粘土混じり粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを7%程度、φ2mm以下の炭化物を3%程度含む
- 暗褐色土 礫混じりシルト φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度、φ2mm以下の炭化物を5%程度含む
- 暗褐色土 シルト混じり礫 φ5mm以下の明黄褐/バミスを10%程度、φ5mm以下の炭化物を3%程度含む
- 褐色土 粘土混じり礫 φ5mm以下の明黄褐/バミスを15%程度、φ1cm以下の炭化物を1%程度 φ3cm以下の黄褐ブロックを20%程度含む
- 5に同じ
- にぶい黄褐色土 シルト混じり粗砂 φ5mm以下の明黄褐/バミスを5%程度、φ3mm以下の炭化物を3%程度含む 非常に軟弱な堆積である あるいは有機質の腐敗した部分に堆積したものか
- 褐色土 粗砂 φ3mm以下の明黄褐/バミスを7%程度、φ1cm以下の炭化物を1%程度含む

第37図 59~61・65号土坑実測図



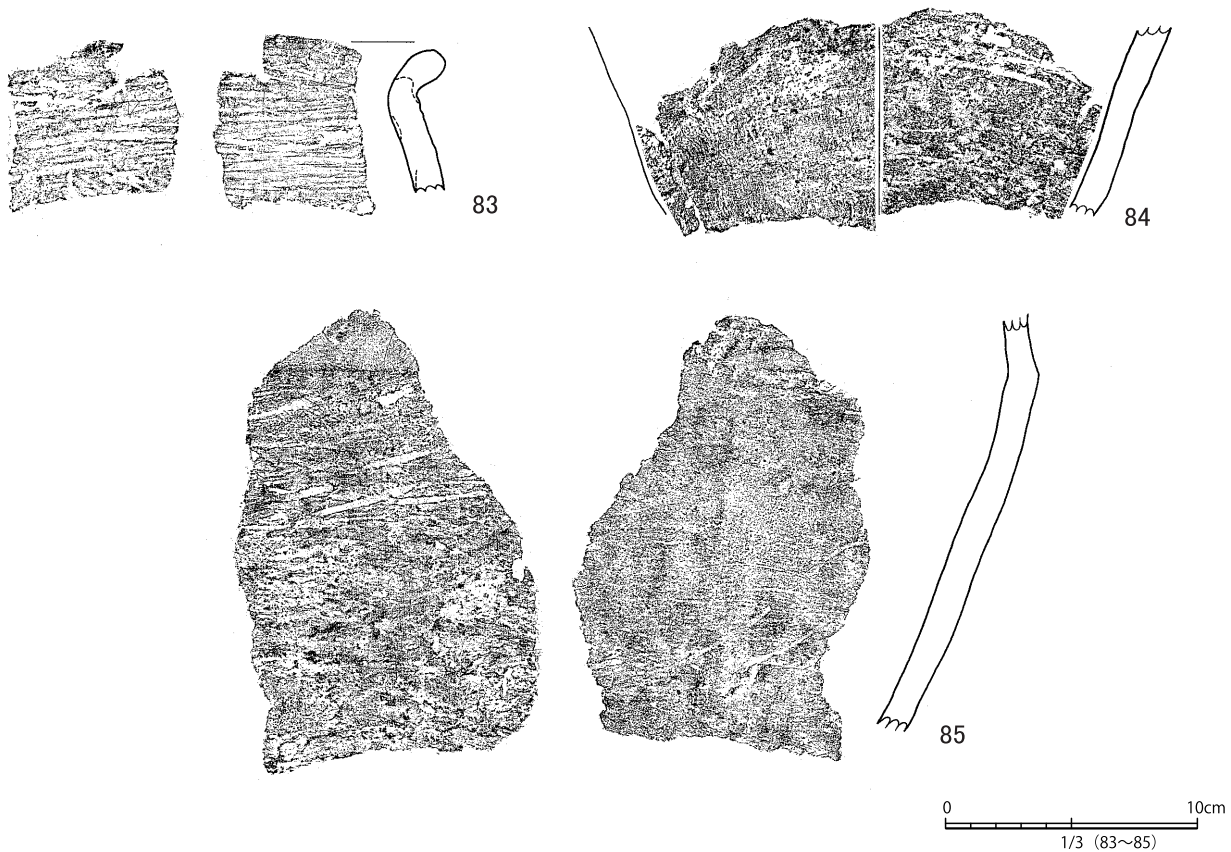
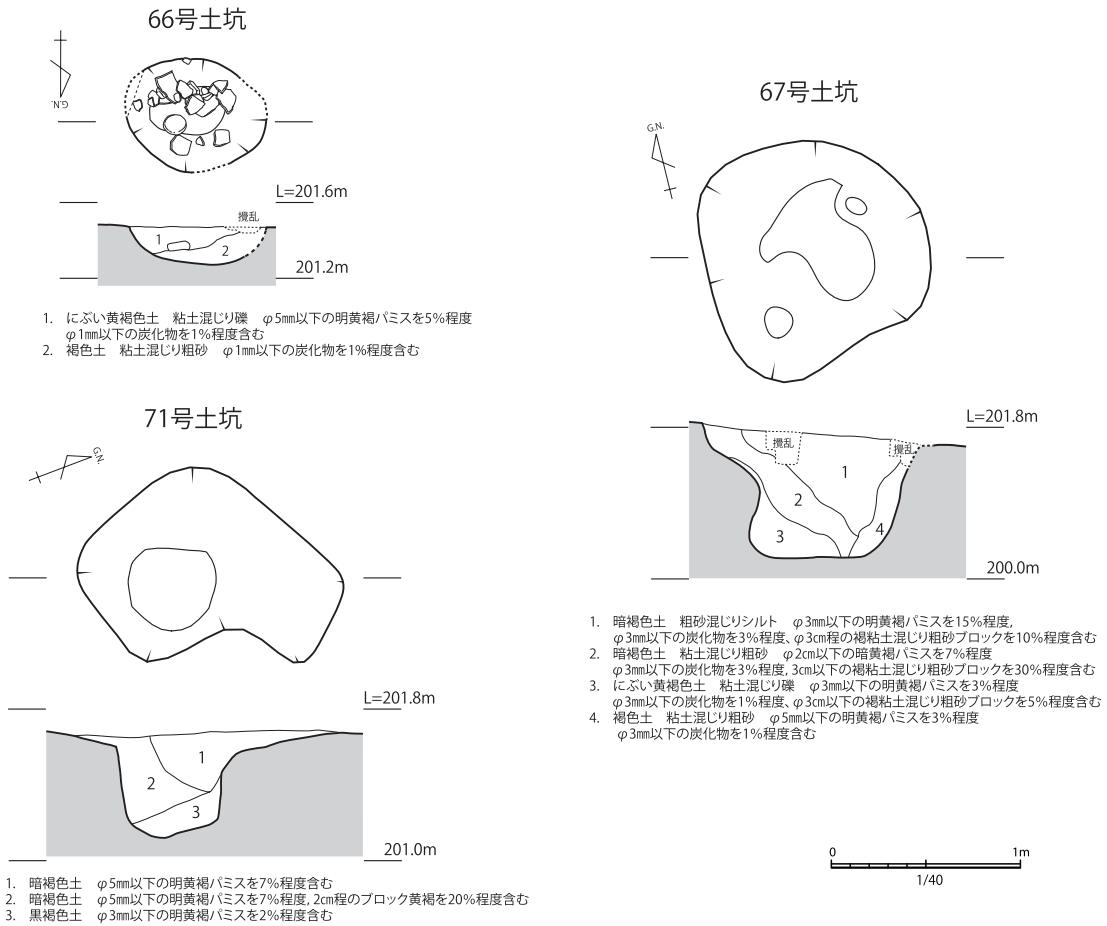
SC55(66 · 67) · SC57(68 · 69) · SC59(70 · 71) · SC60(72)

第38图 55·57·59·60号土坑出土遺物実測図



SC61(73 ~ 76) · SC65(77 ~ 82)

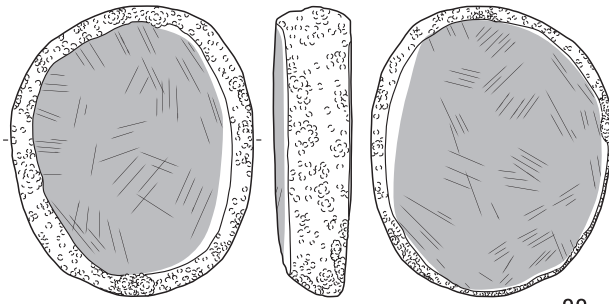
第39图 61·65号土坑出土遺物実測図



第40図 66・67・71号土坑及び66号土坑出土遺物実測図

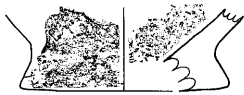


0 10cm
1/3 (86・87・89~92)



※ 網掛け部分は磨面

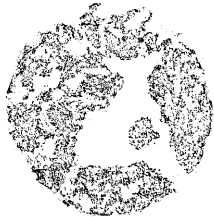
0 10cm
1/3 (88)



89



90



91



92

SC66(86 ~ 88) ・ SC67(89 ・ 90) ・ SC71(91 ・ 92)

第41図 66・67・71号土坑出土遺物実測図

(2) 遺物 (IV層出土)

a) 縄文土器 (第42図～第51図)

縄文時代後期 93～113は縄文時代後期に属する深鉢で、宮ノ迫式、中岳Ⅱ式を中心とする。

93・94は僅かに外反する口縁部で、外面に貝殻腹縁刺突文、頸部に凹線を施す。95・96は胴部に凹線ないし沈線が施されている。97は口縁部外面に刺突文、沈線間に縄文が施されている。98は2条1組となる凹線文の間に貝殻腹縁刺突文を施す。99は、胴部外面に短沈線文と凹線文を施す。100～103は胴部外面に凹線文を施し、101～103の内面には貝殻条痕文が認められる。104は口唇部に刻目を交互につけ、口縁部外面に貝殻条痕文と凹線文を施す。105の外面は貝殻条痕後ナデ調整され、口縁部外面に貝殻腹縁刺突文を施す。また、内外面にススが付着している。

106～111は口縁部で、口縁端部が肥厚しており、口縁部の端面には108は1条、109～111は2条の沈線文が巡る。112は胴部で、2条の沈線文と列点文を施す。また、外面が僅かに赤色であったため、分析した結果、鉄成分による赤色顔料(ベンガラ)と思われる。113は胴部と頸部の境目に刺突列点文が施される。

縄文時代晩期 114～213は縄文時代晩期に属し、入佐式や黒川式土器に相当する。そのうち114～161は深鉢で、その器形は口縁部が大きく外反するもの、胴部最大径と口径が等しく僅かに外反するもの、内湾するものがある。また、口縁端部を肥厚させるものや、口縁部外面に突帯をつけるものもある。

114は口縁部がやや内湾ぎみの複合口縁で、口縁部内面は平滑に仕上げられる。115は口縁部から胴部で、口縁部の内外面に沈線を施す。116は口縁部が僅かに肥厚し、内外面ともに粗いナデ調整される。また、外面にススが付着している。117は口縁部が外反している。また、口径が胴部最大径を上回り、胴部の屈曲が緩やかである。118は口縁部外面に縦方向の2本の沈線文が入る。119は外反する口縁部で、口縁端部が僅かに肥厚している。また、外面にススが付着している。120は大きく外反する口縁部で、内外面ともにミガキ調整される。121～124は波状口縁を呈する。また、外面全体にススが付着しており、そのうち121～123は内面に黒斑がある。この121～123は内外面ともナデ調整され、124は口縁部外面に貝殻条痕文を施し、内面はナデ調整される。125は頸部に胴部の屈曲部が近接し、頸部内面には明確な段がつく。また、口縁部はやや直立気味に外反する。126・127は直立気味に外反する口縁部で、126は内外面ともに貝殻条痕文を施す。127は、内外面ともに貝殻条痕後ナデ調整され、胴部にかけて接合面が見られる。

128・129は胴部から頸部にかけて稜をなして緩やかに屈曲する。128の外面はナデ調整され、128の内面及び129の内外面は、貝殻条痕後粗いナデ調整される。129・130は口縁端部が肥厚している。

131～137は口縁部外面に断面三角形の突帯がつくが、134～137の突帯は、131～133に比べ、下がった位置に貼り付けられる。また、132は外面に貝殻条痕文を施すが、それ以外はナデ調整される。

138は稜をなして屈曲する胴部である。内外面ともに貝殻条痕文が施される。139は口縁部外面に三角形を呈する突帯が施され、胴部から口縁部にかけて肩部を形成し、稜をなして屈曲する。また、口縁部は緩やかに外反し、口径と胴部最大径が等しくなる。

140～143は直立気味に立ち上がる口縁部である。141は口縁端部を玉縁状に肥厚させ、その内面には沈線を施す。142は口縁部に4条の沈線文が巡り、内外面ともに貝殻条痕文を施す。143は肥厚した口縁部をもつ。144は口縁部が緩やかに立ち上がり、外面に貝殻条痕文を施す。145は口縁部が僅かに外反し、断面台形状の突帯がつく。

146～148 は口縁部が大きく内湾するものである。146 は口縁部を僅かに帯状に肥厚させ、ナデ調整し、頸部からは貝殻条痕文を施す。147・148 は口縁部外面に断面三角形の突帯がつく。

149～161 は底部で、底部から外側へ直線的に開く一群である。底部下端が外方に張り出すもの（150～160）のなかには上げ底状（159・160）のものがある。

149・150 は底面にアジロ編み圧痕があり、底面のみに白色の微細粉末が固化した物質が付着している。また、149 は外面に貝殻条痕文を施し、内面をナデ調整、150 は内外面ともに貝殻条痕文を施し、底面内部は指頭痕が残る。151～161 は内外面ともにナデ調整され、161 の外面には指頭痕が残る。

162～193 は精製浅鉢である。器形は口縁部が大きく外反するもの、口縁部が短く胴部最大径が口径より大きくなるもの、内湾するものがある。また、口縁端部を玉縁状に肥厚させるものや、リボン状の突起をつけるものもある。調整については、基本的に黒色磨研がなされるが、黒色処理がされず、明黄褐色（174）や浅黄色（175）の色調をもつものもある。162 は頸部から口縁部にかけて外反し、さらに口縁端部が立ち上がる。その外面には沈線が施される。163 は頸部から口縁部にかけて大きく弧状に外反し、さらに口縁端部が短く直立する。また、口縁部の外面に沈線文が巡る。

164～169 は口縁部で、口縁端部が玉縁状を呈するものである。164 は口縁部内面に沈線文が巡り、165・166 は口縁部外面に沈線文が巡る。167 は口縁端部を内面側に肥厚させたもので、口縁部外面に沈線文が巡る。168 は口縁部内外面に沈線文が巡り、リボン状の突起がつく。また、胴部は明確な稜をなして張り出す。169 も口縁部にリボン状の突起がつく。170 は胴部が扁球状に張り出しており、内外面に黒斑がある。

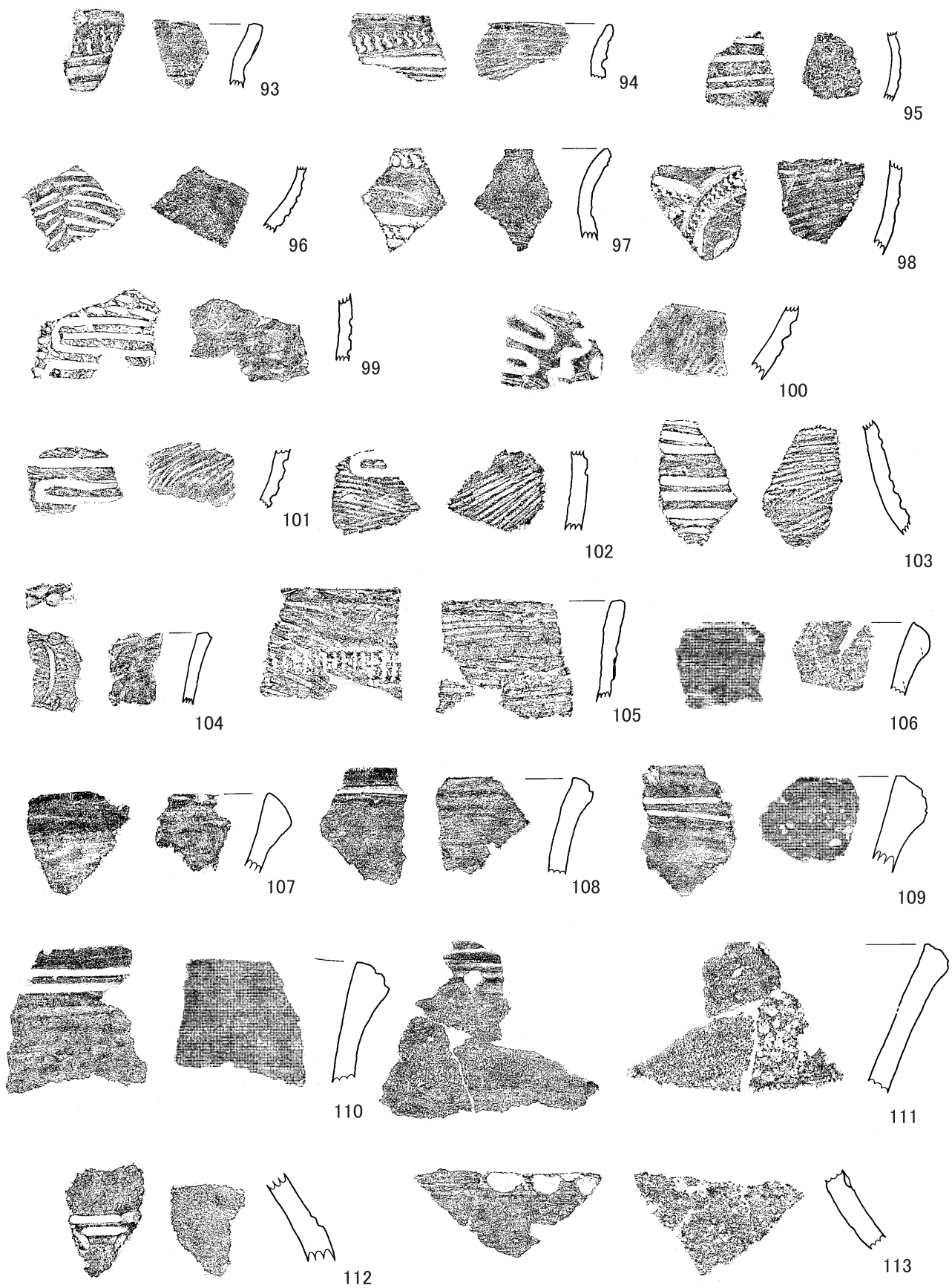
171～179 は口縁部から胴部にかけてのものである。そのうち171～175・177～179 は、口縁端部が玉縁状を呈し、口縁部が短く、胴部が張り出している。171・172・174・177～179 は口縁部の内外面に沈線文が巡り、173・175 は口縁部内面に沈線文が巡る。176 は口縁部が肥厚せず、外反する。177・179 は口縁部にリボン状の突起がつく。180 は171、181 は168 等に類似する口縁部から胴部の資料である。

182～186 は短く屈曲する口縁部をもつものである。182・183 は口縁部が短く外反し、胴部は稜をなして張り出す。また182 は口縁部内面に沈線文が巡る。184 は口縁端部にリボン状の突起が複数個つく。185 は口縁端部にひれ状の突起がつく。186 は内湾する1次口縁端部に粘土紐をのせて、玉縁状の2次口縁とする。

187～189 は内傾する口縁部である。187 は端部が僅かに肥厚する。188 はやや直立ぎみに内傾する口縁端部に、粘土帯を貼り付けて肥厚させる。189 は波状口縁で、波頂部は円形の刺突文となる。また、口縁部外面には沈線を施す。接合痕の端面には、貝殻腹縁による平滑なナデ調整痕が認められる。

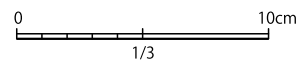
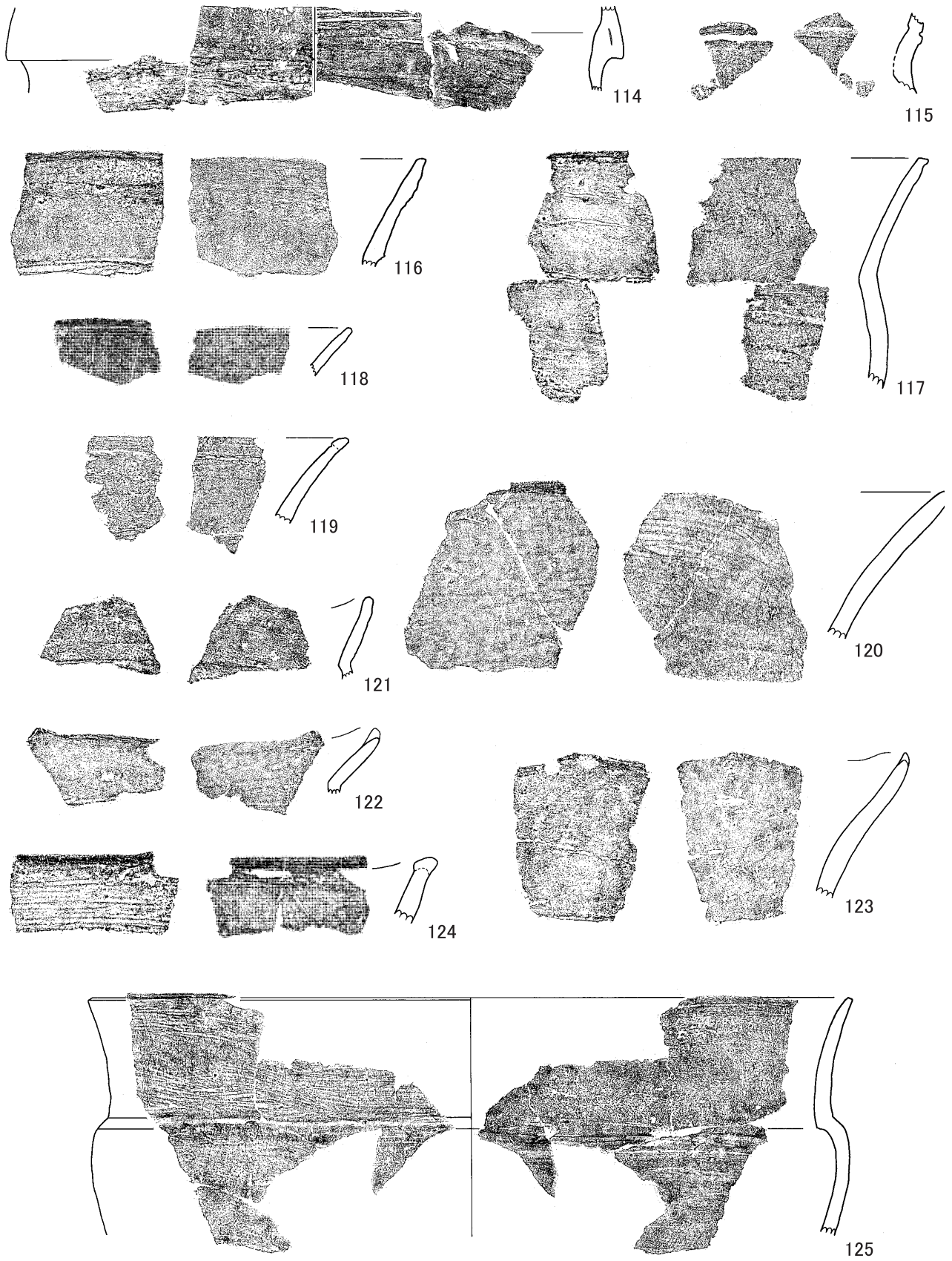
190～193 は胴部下半から底部にかけてのもので、内外面ともにミガキ調整である。

194～213 は粗製浅鉢である。器形は直線的に外方へ開くものがほとんどであるが、口縁部が直立気味なもの（207・208）、内傾するもの（213）もある。また、口縁部の端部は丸くまとまるものが多いが、尖り気味なもの（200）、口縁部外面に粘土帯を貼り付けて肥厚させるもの（207・208）がある。さらに、器面調整の特徴としては、外面は粗いナデ・貝殻条痕文、内面はナデ調整を基本とするが、194 は外面、195・201・203・205・206・212 は内面にミガキ調整がなされる。198 は口縁部に補修孔が1つある。206・209～211 の胴部下半の外面には繊維圧痕を有し、209 は布目状の圧痕がある。212 は口縁部外面に刺突列点文が施される。213 は口縁部外面に3条のうすい突帯がつく。

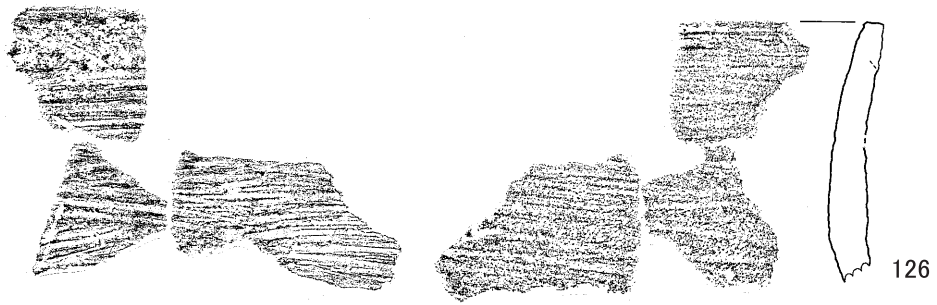


0 10cm
1/3

第42図 縄文時代後期土器実測図



第43図 縄文時代晩期土器実測図（1）



126



127

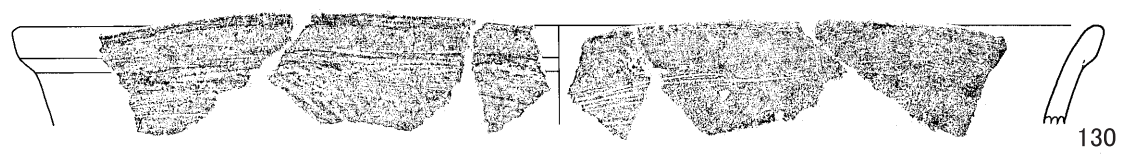


128

0 1/3 10cm



129



130

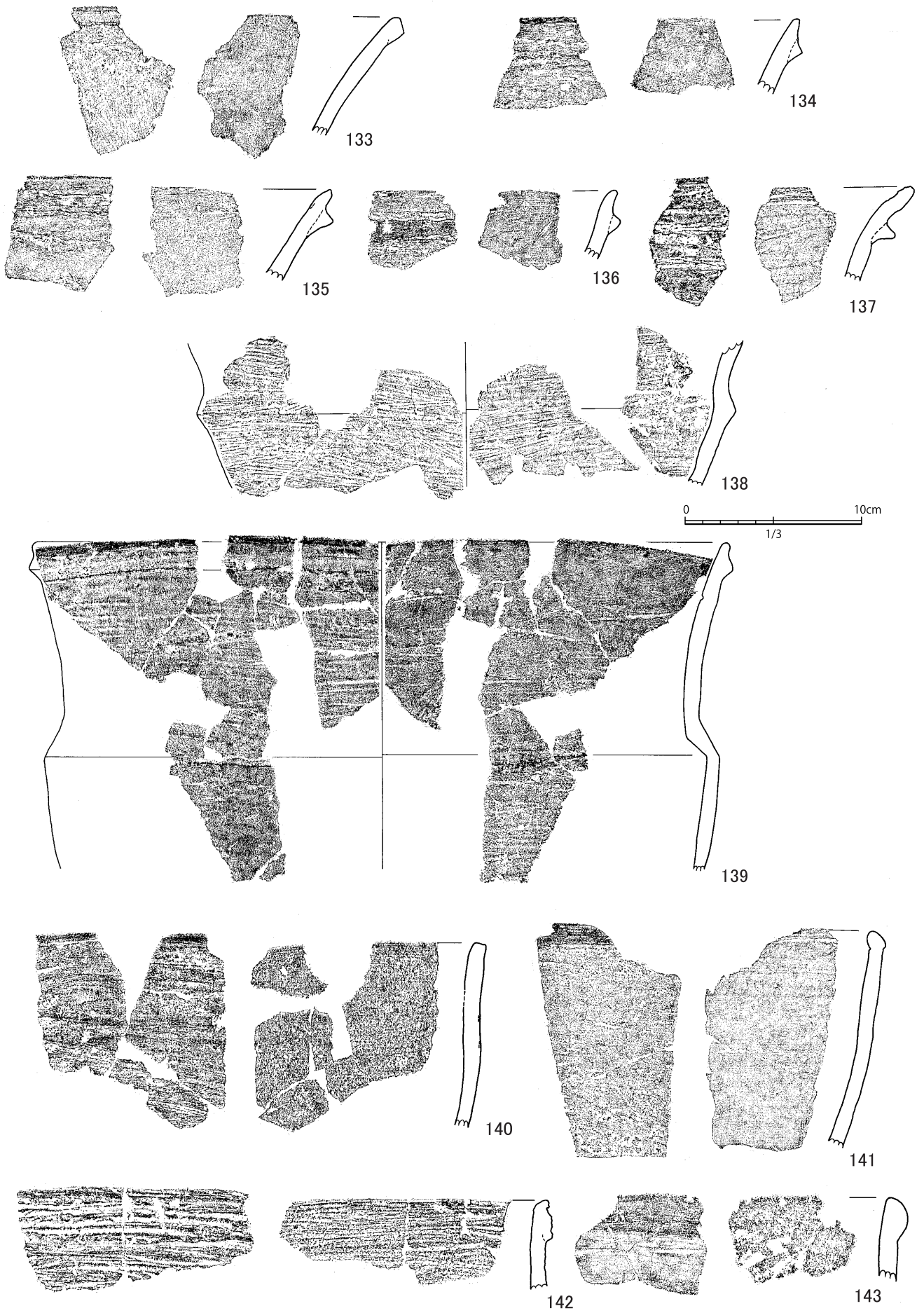


131

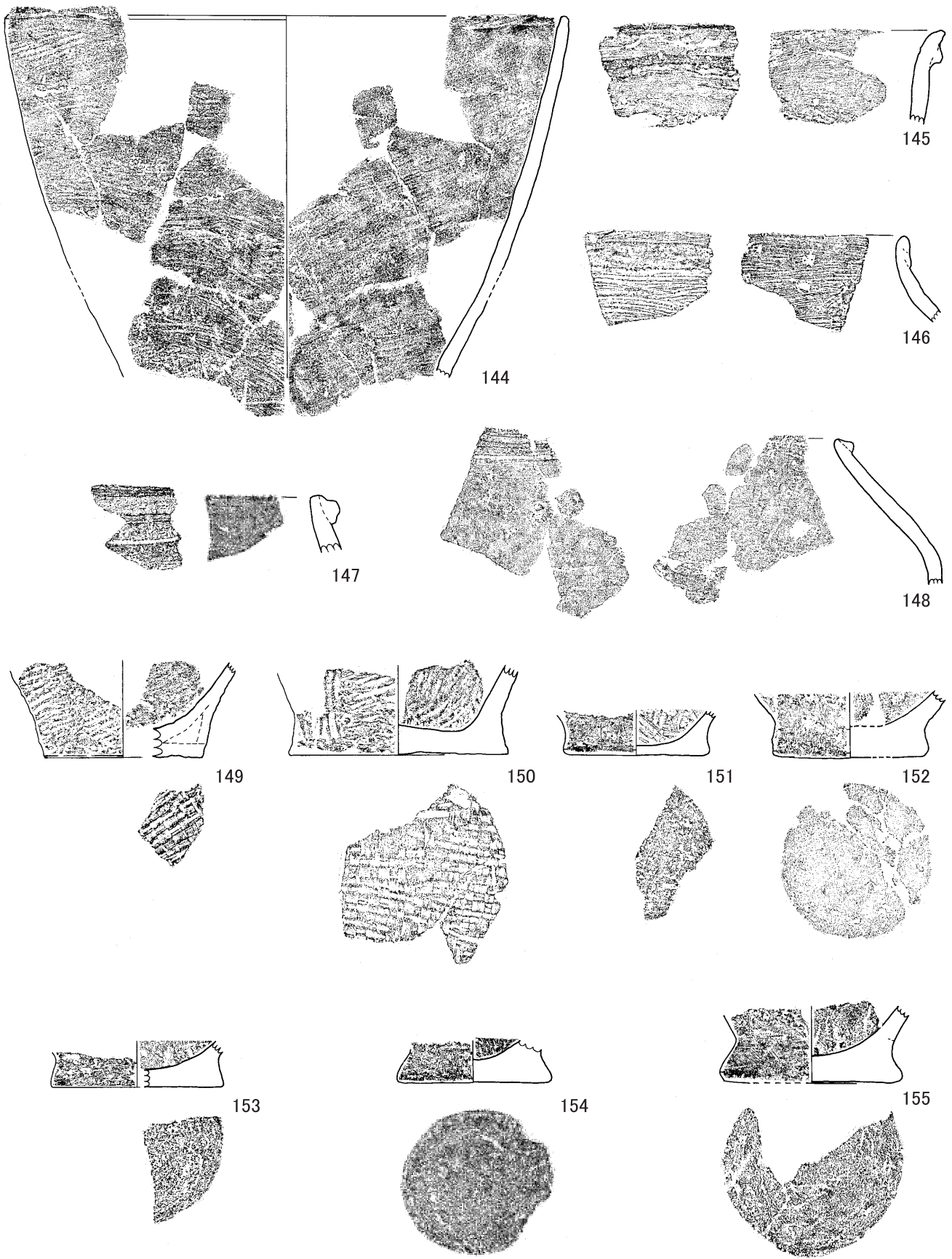


132

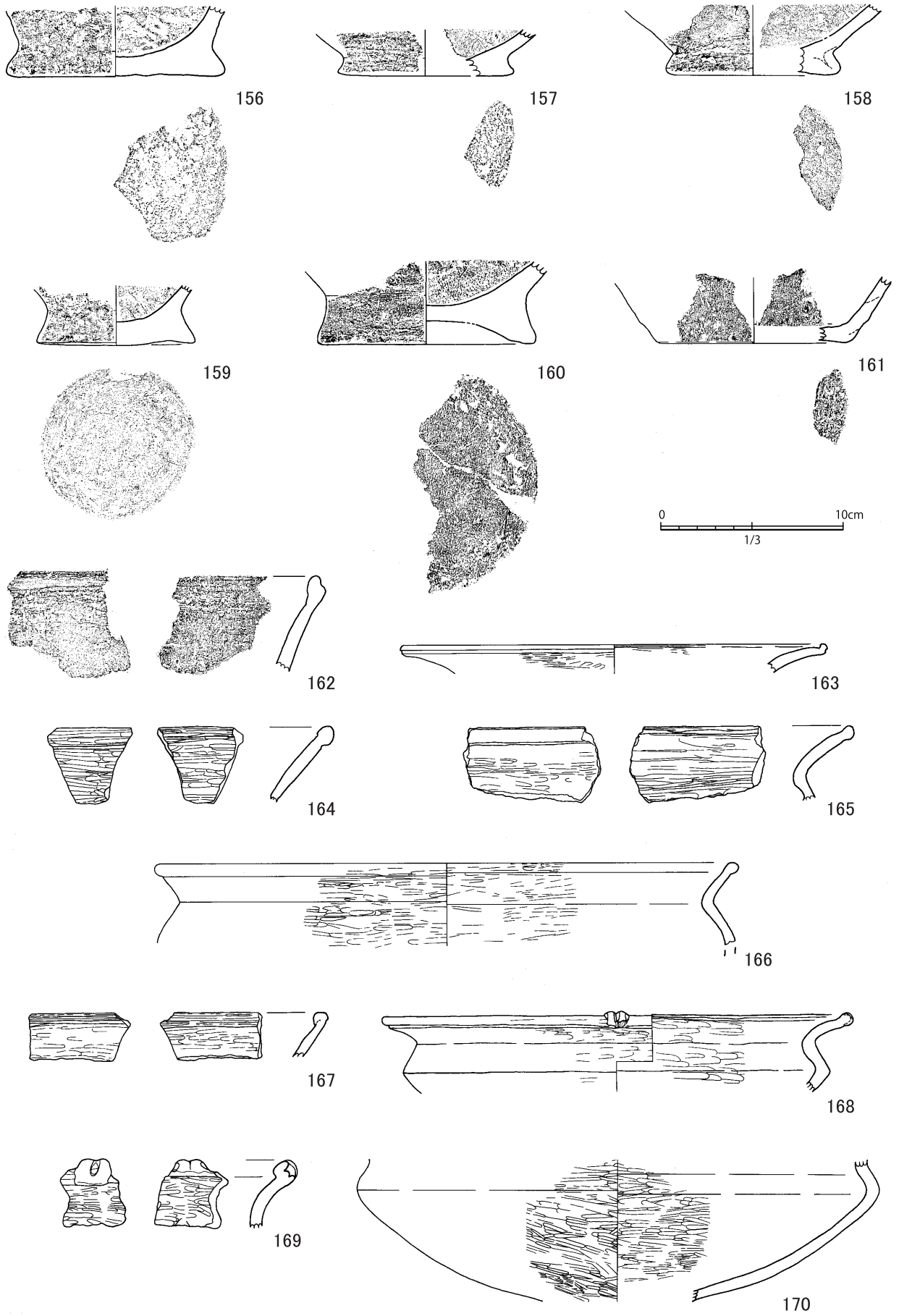
第44図 縄文時代晩期土器実測図(2)



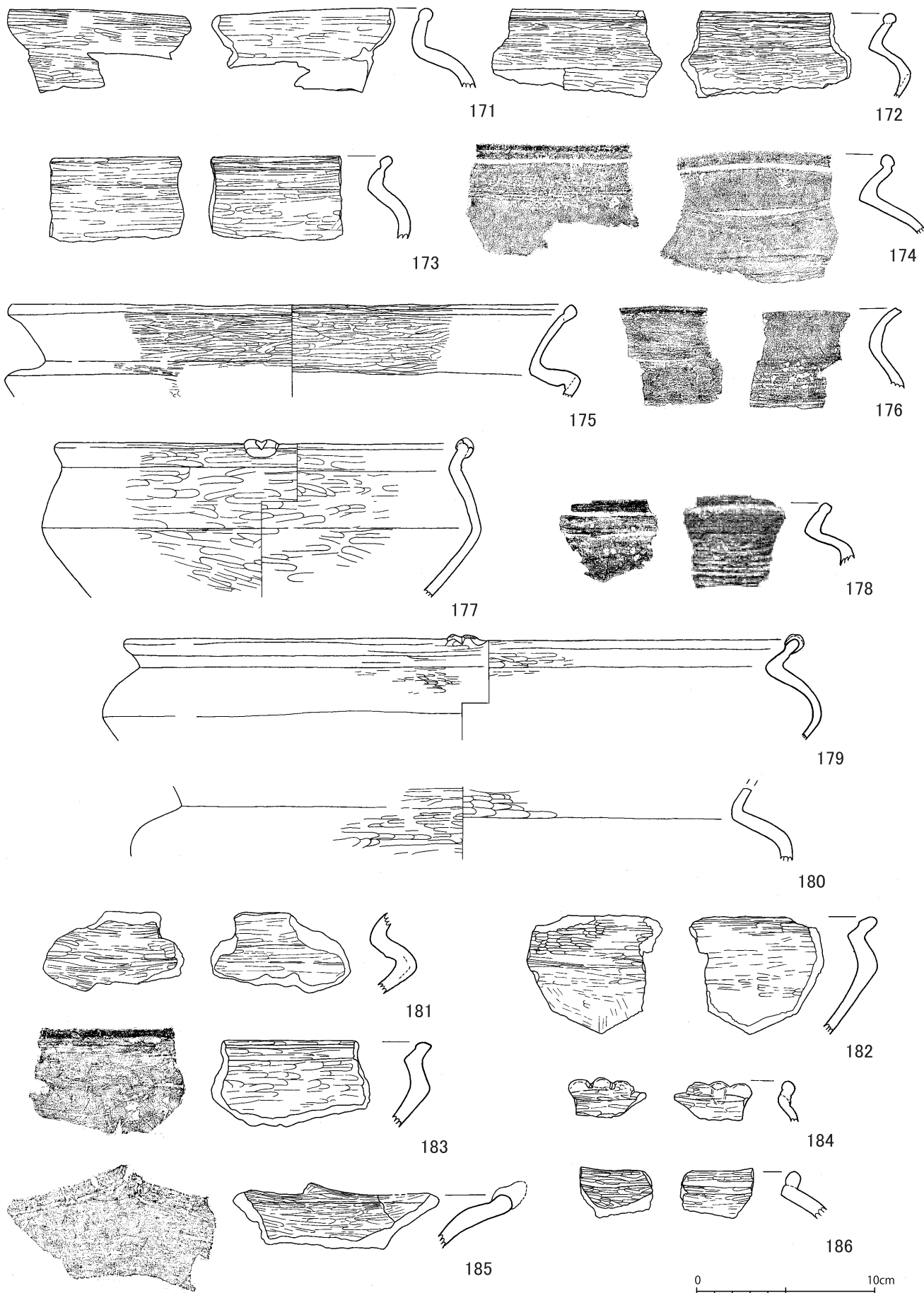
第45図 縄文時代晩期土器実測図（3）



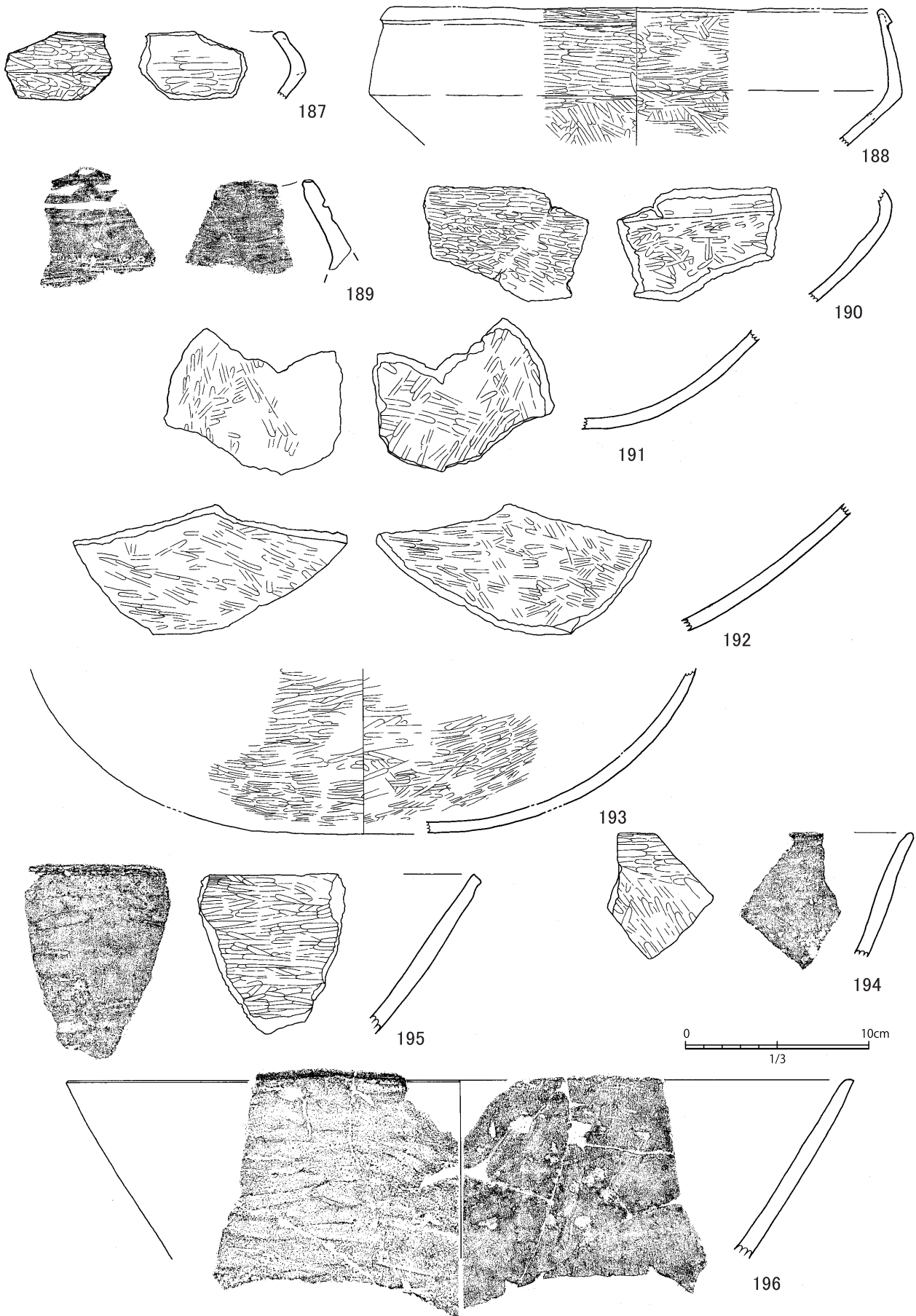
第46図 縄文時代晩期土器実測図（4）



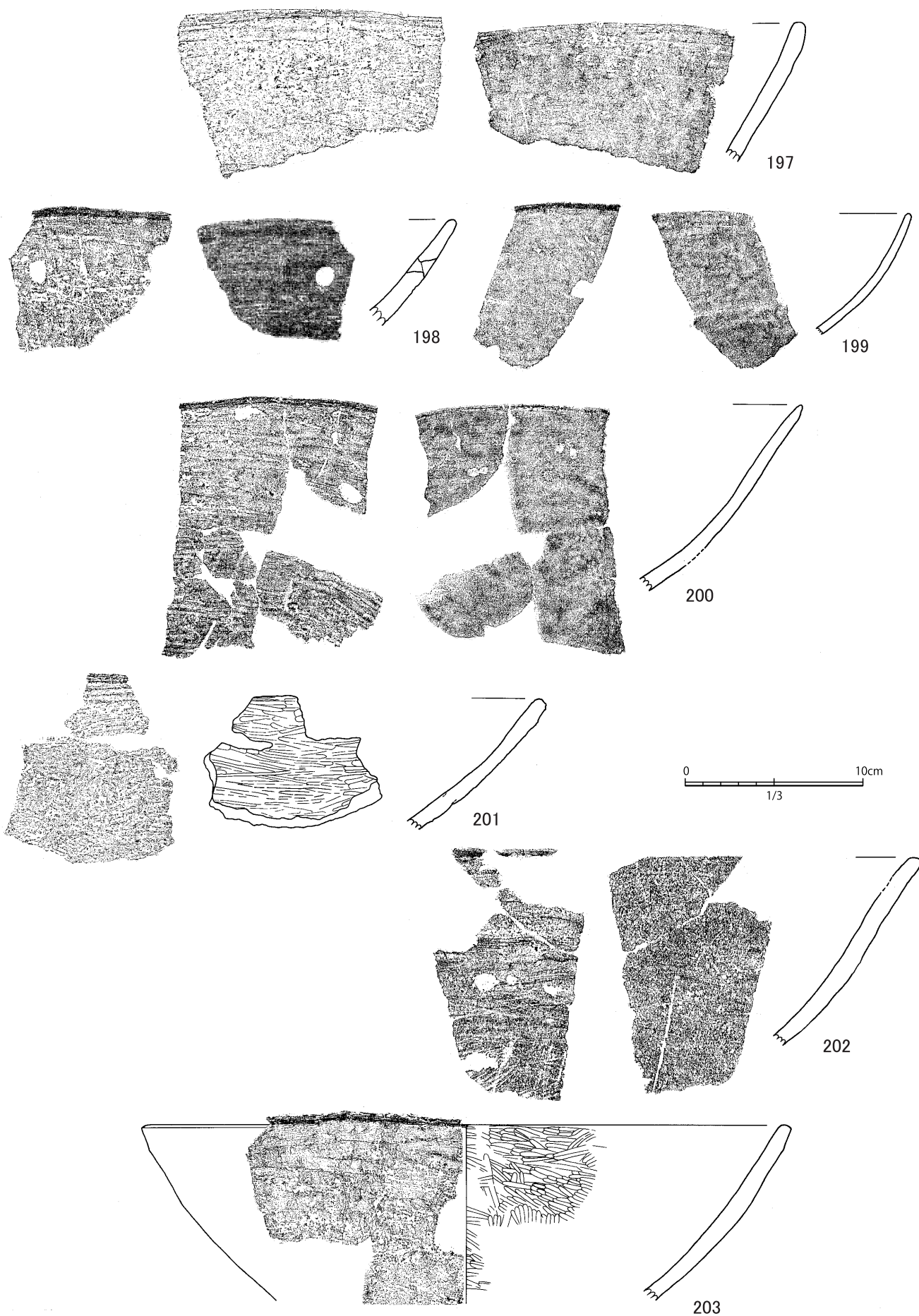
第47図 縄文時代晩期土器実測図（5）



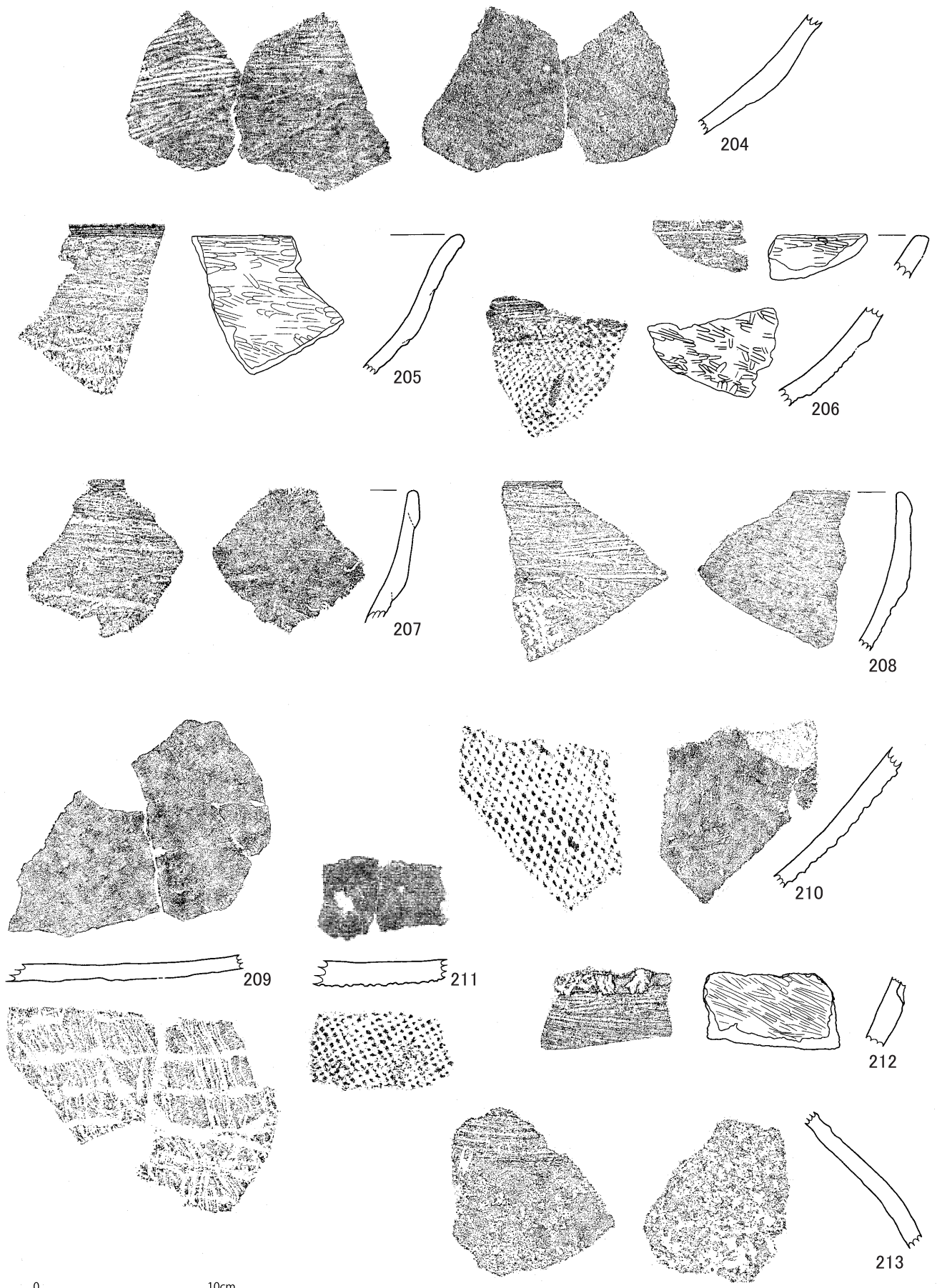
第48図 縄文時代晩期土器実測図（6）



第49図 縄文時代晩期土器実測図（7）



第50図 縄文時代晩期土器実測図（8）



第51図 縄文時代晚期土器実測図 (9)

b) 縄文時代後期～晩期の石器（第 52 図～第 55 図）

ここでは、IV層出土の石器について図化掲載する。本来ならば縄文時代後期と晩期の石器に区分すべきであるが、形態上の類別が困難であるため一括して報告する。なお、IV層及び遺構内出土の縄文土器の大半は黒川式土器であるため、石器も縄文時代晩期に属するものが多いと考えられる。

214～221 は石鏃である。214～221 は平面形が二等辺三角形に近い形状で、特に 214～219 は側縁の先端部に近い位置に屈曲点をもつことから、将棋の駒のような形状を呈する。基部は、浅い抉りをもつもの（214・217・219・220）、平基（215・216・218）、V字状（221）がある。また、217 は側縁の中ほどに突出部を作り出している。219 は正面及び裏面の中央部分に研磨によって平坦面を作り出している局部磨製石鏃である。

なお、これら石鏃の石材は、チャート（214・216・218・220）、ガラス質安山岩（215・217）、緑色頁岩（219）、腰岳産黒曜石（221）である。

222～224 はスクレーパーである。222 はチャート製で、弧状の刃部をもつ削器である。223 は頁岩製で、両側縁に円弧状を呈する2つの刃縁部を有する削器である。224 はチャート製で、全体形が二等辺三角形を呈し、両側縁に直線的な刃部をもつ。

225 はチャート製の楔形石器である。平面形が台形状を呈し、上端と右側面の表裏面から調整を施している。

226～235 は打製石斧である。226～229 は基部と刃部が同じ幅で、両側縁が直線的ないし弧状となる短冊形の平面形を呈する。また、基部の端面は直線的なもの（226～228）、三角形を呈するもの（229・230）がある。230 は刃部が欠損しているが、本来的には短冊形と考えられる。

231～234 は基部と刃部の境にくびれ、または刃部が大きく撥形に開く一群である。基部の端面は丸みを帯びている。235 の平面形は短冊形に近いが、基部が丸みを帯びている。

なお、これら打製石斧の石材は、ホルンフェルス（226～228・230・231・233・234）、砂岩（229）、頁岩（232・235）である。

236～239 は磨製石斧である。236 は全体形が台形状を呈し、両側面に稜を作り断面は隅丸長方形となる。また、刃部には使用時の欠損とみられる剥離痕がある。237 は刃部を欠損しているが、本来的には台形状を呈すると考えられる。238 は断面が楕円形で、棒状を呈している。また、基部の一部が欠損しており、刃部に向かって細くなっている。239 は断面形が扁平で両刃である。剥離による整形の後、研磨が行われたと考えられる。

なお、これら磨製石斧の石材は、閃緑岩（236）、ホルンフェルス（237～239）である。

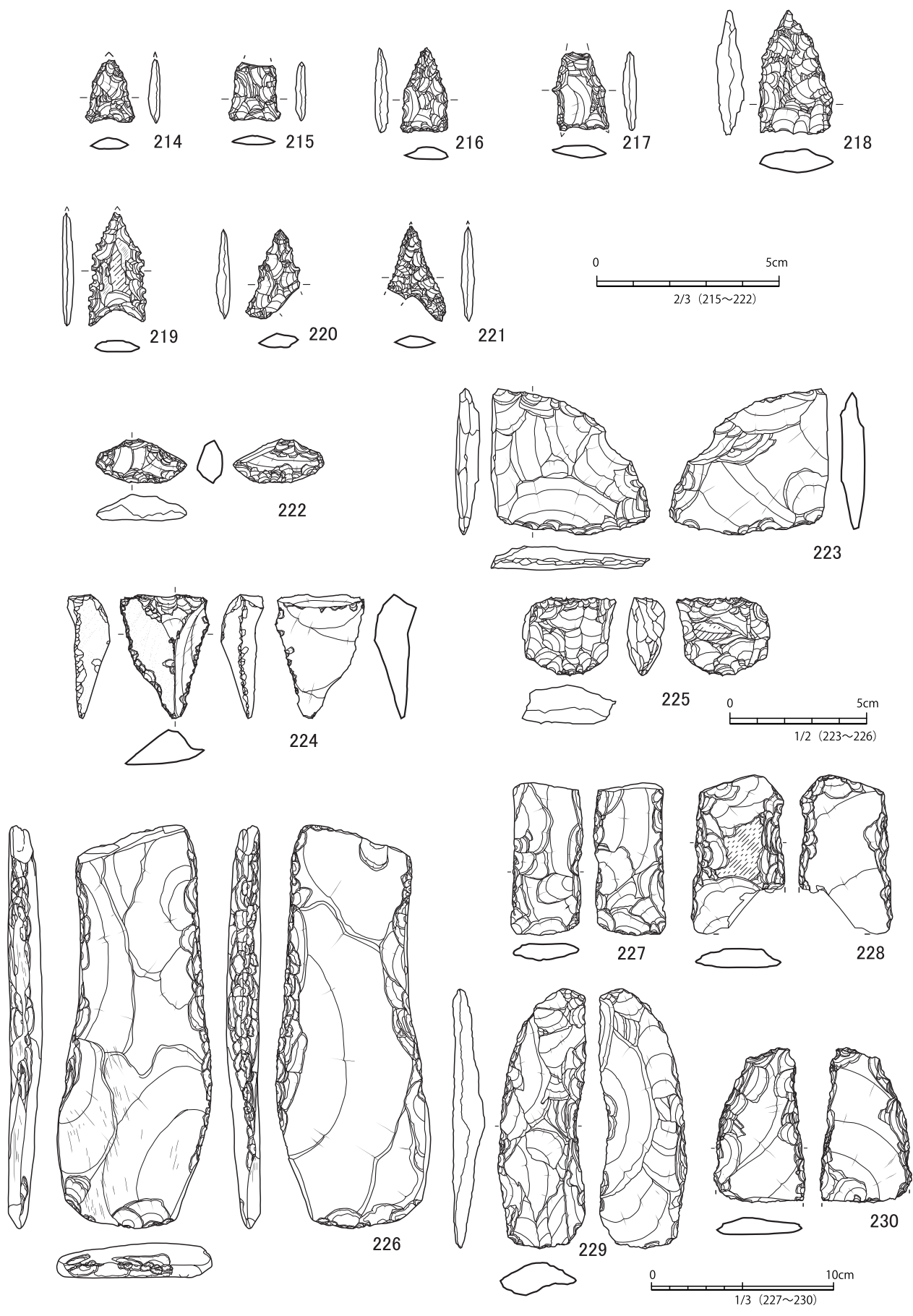
240 は砂岩製の敲石である。側面部に集中的な敲打による器形変化が見られる。

241～252 は磨敲石である。20点出土したうち12点を図化した。241・242 は長軸長45mm程度の小礫の素材品である。どちらも片側一面のみに磨面が見られ、敲打痕が周縁をめぐる。243～245 は平面形が三角形もしくは縦長の円礫で、表裏面に磨面が見られる。243 は側面部に集中的な敲打によって生じた剥離がみられ、244・245 は敲打痕が周縁をめぐる。また、245 の磨面には、僅かな敲打痕がみられる。246～252 は一部が欠損している磨敲石で、周縁部全体に敲打痕がみられるもの（246・247・249・250・252）、周縁の一部に敲打痕がみられるもの（248・251）がある。

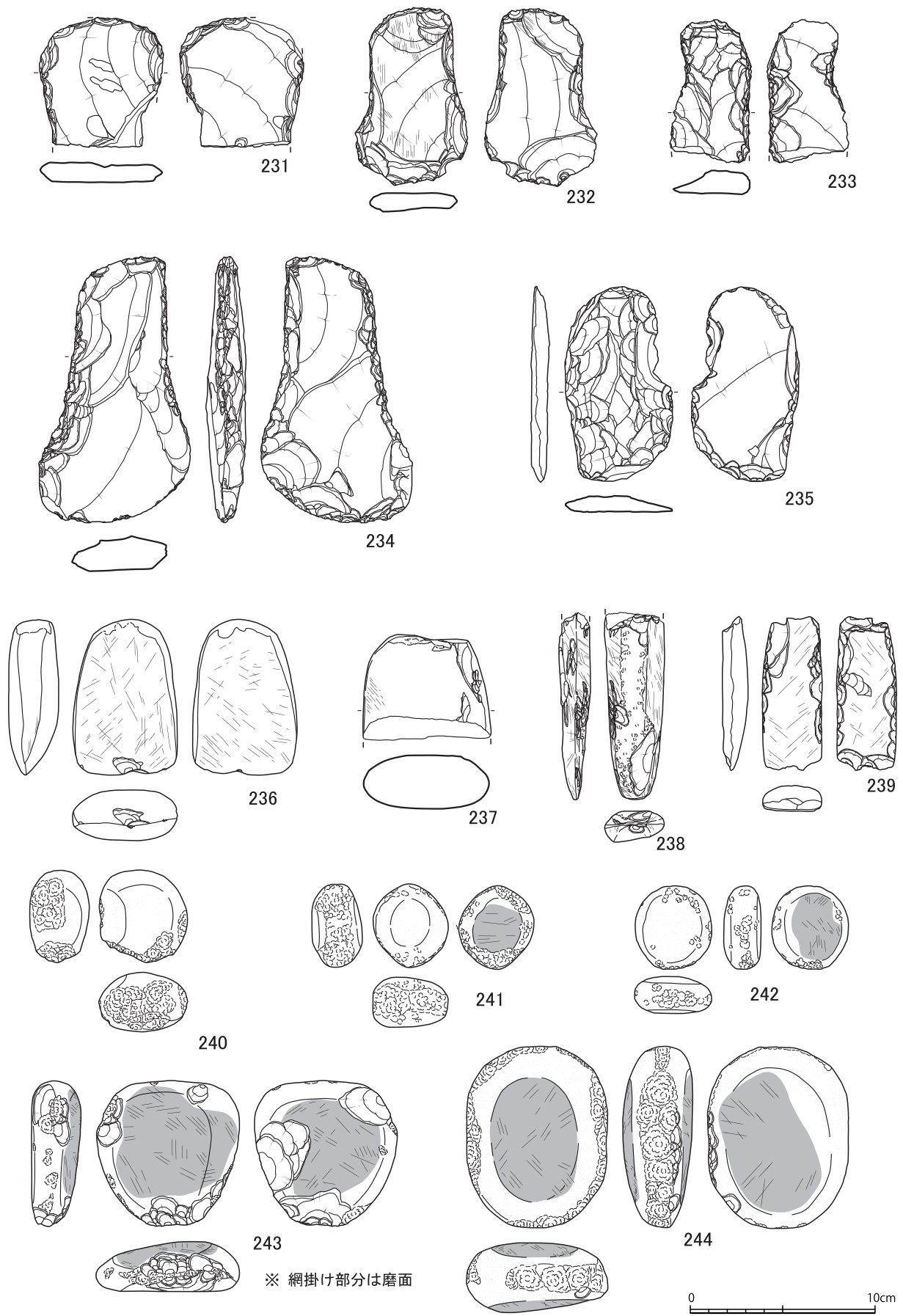
なお、これら磨敲石の石材は 245・248 が溶結凝灰岩製で、それ以外は全て砂岩製である。

253 は、砂岩製の石皿である。使用面は楕円形で全体的に凹み、直線状の擦痕や潰打痕が部分的に残る。

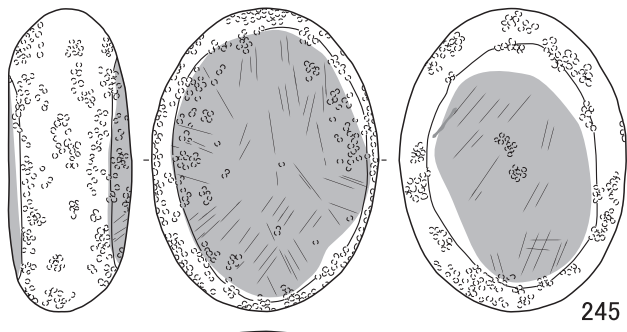
254 は砂岩製の砥石である。正面及び上面には不定方向で直線状の擦痕が残る。砥石の下半分は大きく失われているが、本来は平面形が長方形の形状であったと考えられる。



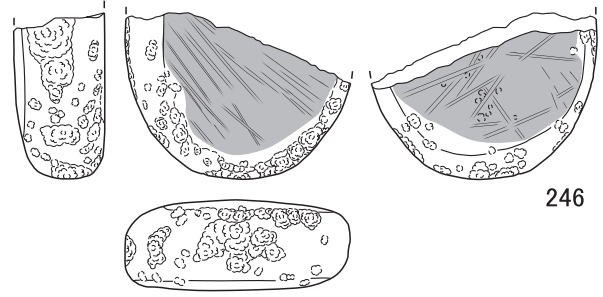
第52図 縄文時代後期～晚期石器実測図(1)



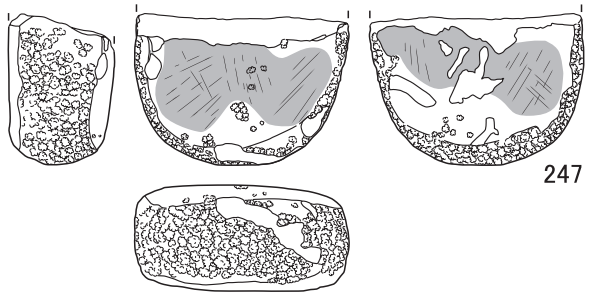
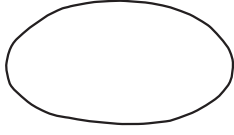
第53図 縄文時代後期～晩期石器実測図（2）



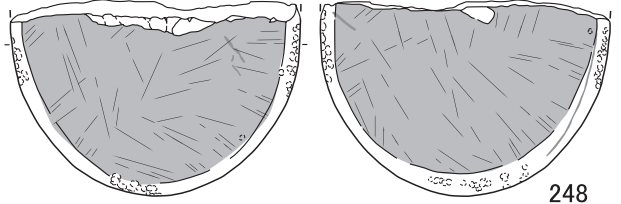
245



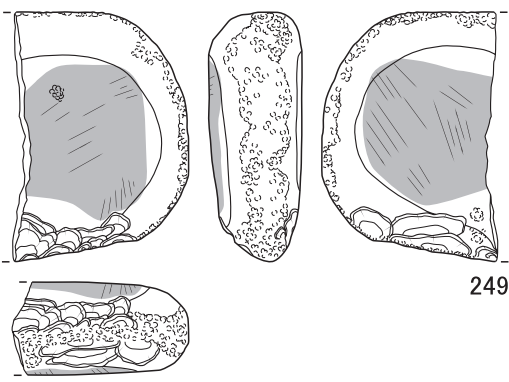
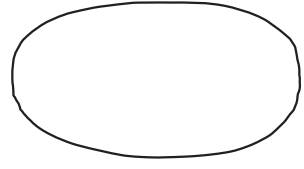
246



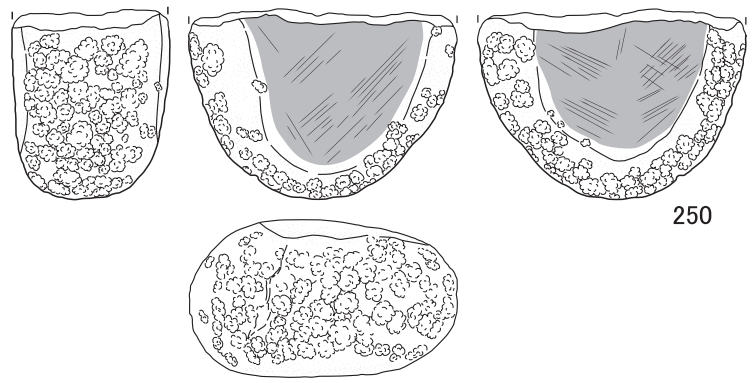
247



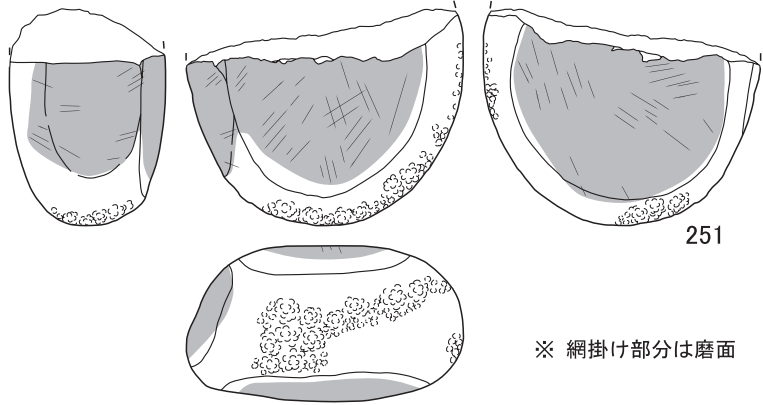
248



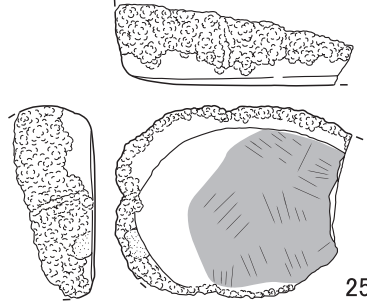
249



250

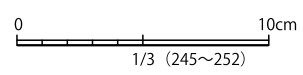


251

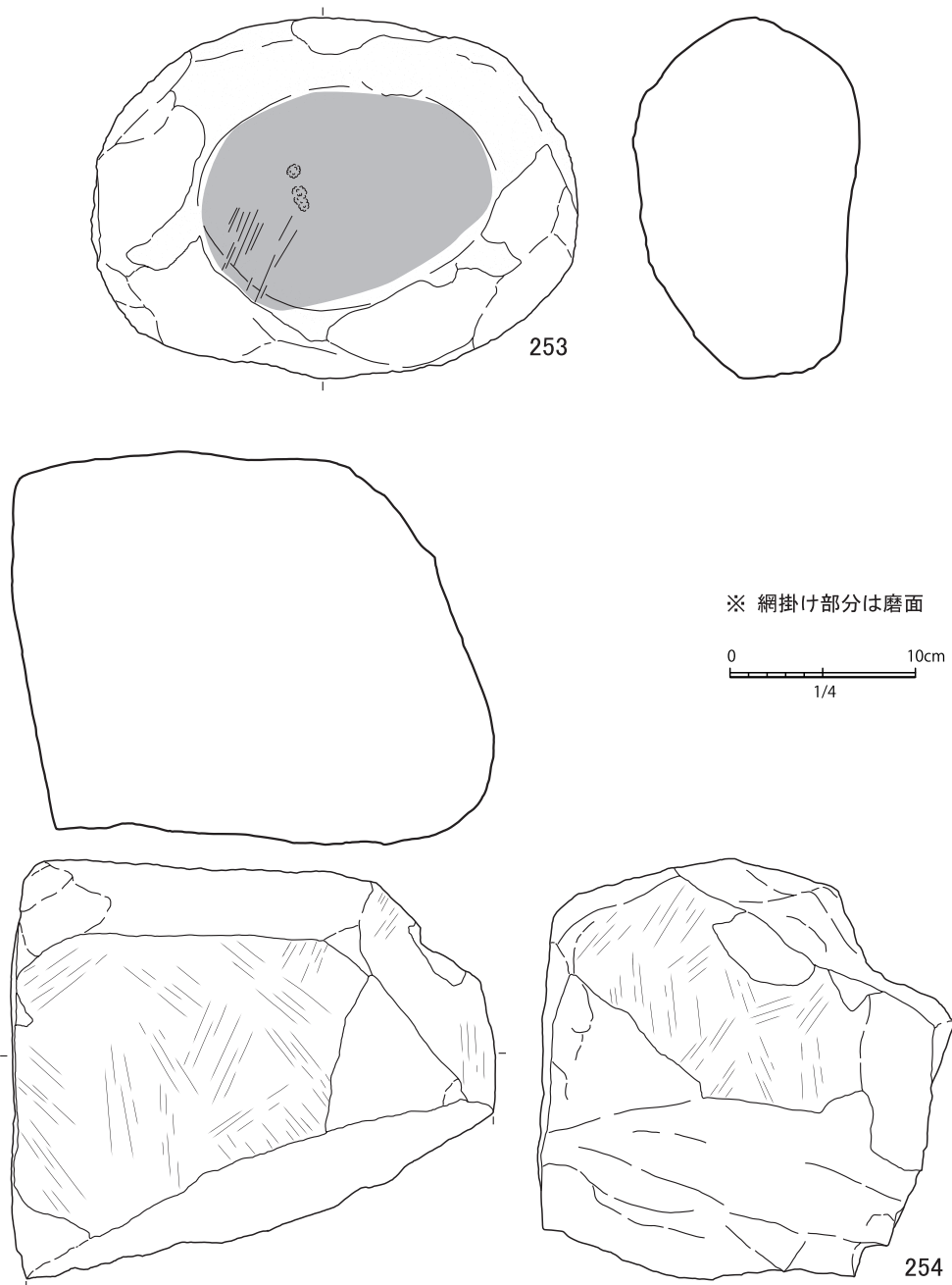


252

※ 網掛け部分は磨面



第54図 縄文時代後期～晩期石器実測図(3)



第55図 縄文時代後期～晩期石器実測図（4）

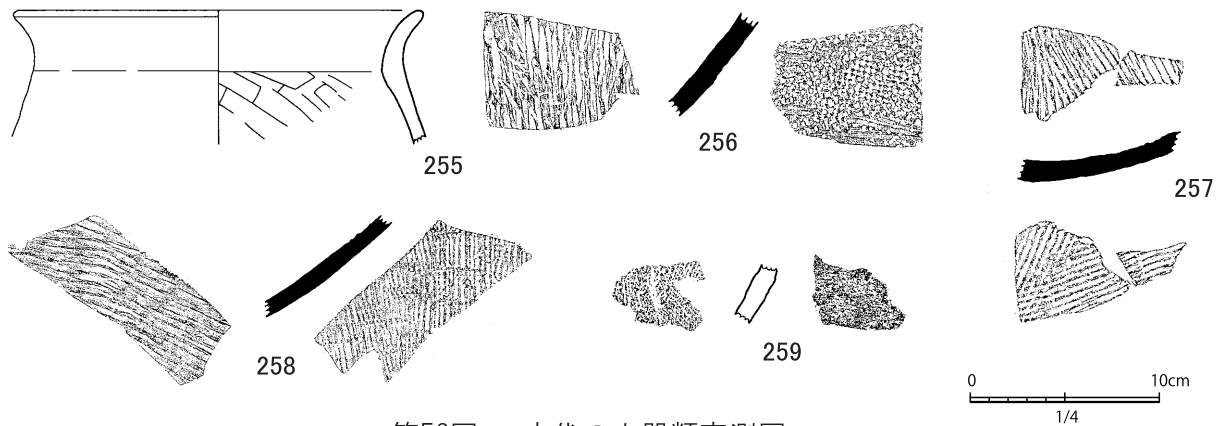
第5節 古代の遺物

1 概要

本調査区においては、古代の遺構は検出されなかったが、土師器や須恵器などがわずかに出土した。

（1）土器類（第56図）

255は、土師器甕の口縁部で、内面は丁寧なヘラケズリ削りが施される。256～258は須恵器甕片である。256の外表面は格子目タタキ、257・258の外表面は平行タタキ、256～258の内表面は平行当て具痕が残る。259は、製塩土器（布痕土器）の鉢の、胴部片である。内面には布目および紐状の圧痕が残る。胎土には金雲母が多量に含む。



第56図 古代の土器類実測図

第6節 中世の遺構

1 概要

中世の遺構としては、IV層上面にて検出された道路状遺構 10 条である。これらの道路状遺構は、調査区南側の谷際から北側の傾斜面にかけて確認され、等高線に対して直交する。遺構に伴う遺物は皆無であるが、検出された層位と遺構埋土に含まれる火山灰（桜島文明軽石）から、中世期に掘削されたものと判断される。

なお、表土中より中世の土師器の杯または、皿がわずかに出土したのみで、小破片であるために図化および編年的な位置づけは困難である。

(1) 道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

道路状遺構は、調査区南側の谷地形から調査区中央の丘陵尾根側に向かって延伸する。北側部分は、畑地造成等による削平により残存状況が悪い。なお遺構検出面は基本的にIV層であるが、南側部分については、斜面地による堆積層の流出により、IX層となっている。

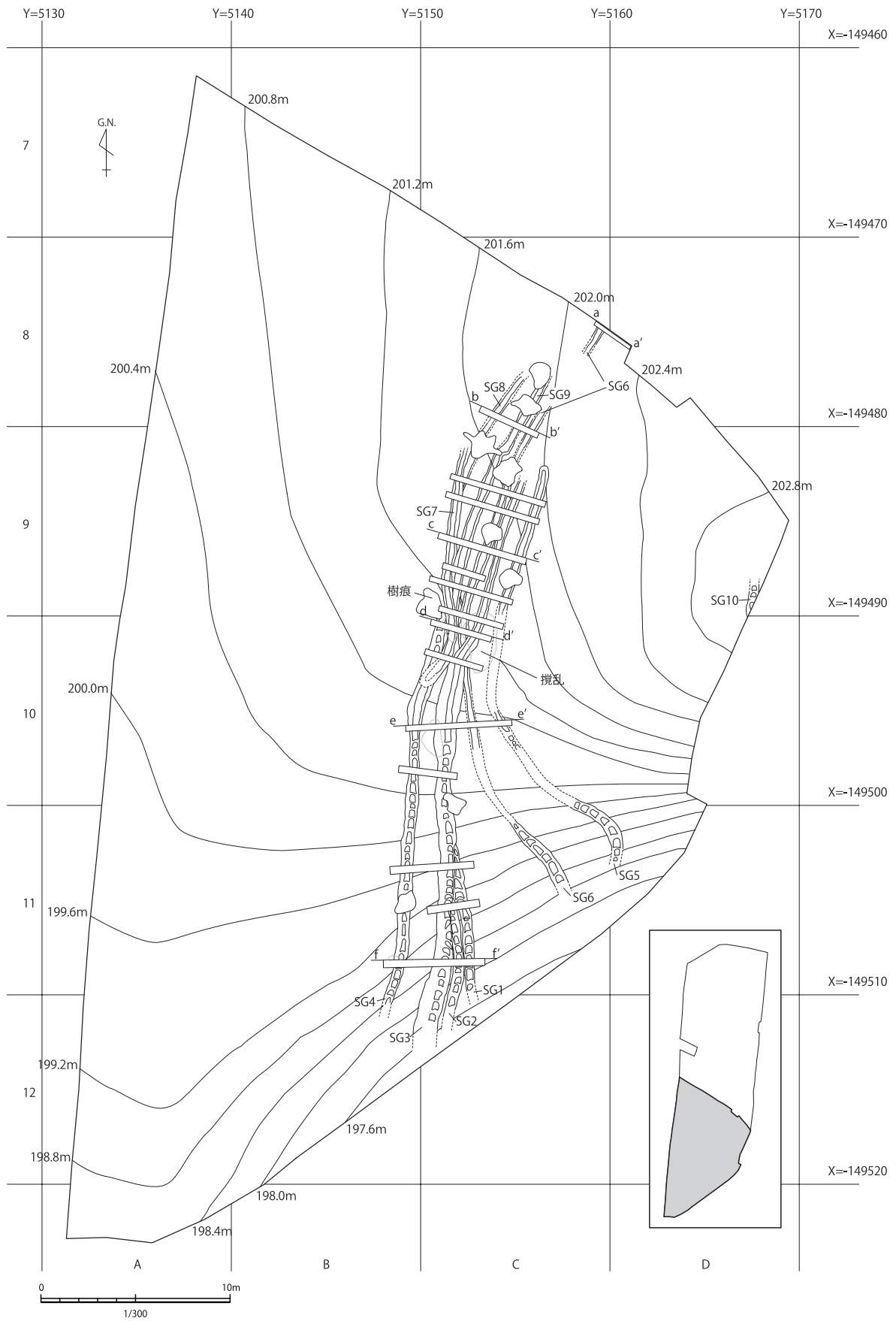
道路状遺構は大きく 3 つに大別され、調査区中央の谷下から南北に延びるもの（SG1～4）、調査区南東の谷下から北西に延びるもの（SG5・6）、調査区東側端にわずかに残るもの（SG10）がある。また、SG1～9 については、急斜面から緩斜面への地形変換部（第 57 図 d - d' / e - e'）にて走向を北北東へ変える。これら道路状遺構は、溝状に掘り込まれる形状で、その底面は硬化しているが、南側斜面地部分においては波板状凹凸面（図版 12）が形成されている。また、SG1～9 は、互いに隣接し、かつ複雑に切り合っているため、掘削等を繰り返しながら使用していたものと考えられる。また、SG2・3・4・6・7 は、遺構内埋土の堆積状況から桜島文明軽石（SZ-3、AD1471）の降下によって埋没していることが認められた。

1 号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG1 の西側には SG2 が近接しており、SG3 とは C11 グリッド付近で切られる。SG1 の現存長約 7.5 m、幅約 0.54 m、検出面からの深さは約 0.18 m で、断面形は逆台形状を呈する。底面は幅約 0.29 m で硬化し、急勾配の斜面地部分にかけては、直径約 0.18 ～ 0.45 m の半円形状の波板状凹凸面が連続している。

2 号道路状遺構（第 57 図・第 58 図）

SG2 は SG1 と SG3 に挟まれた位置にあり、SG3 とは C11 グリッド付近で切られる。SG1 との前後関係は平面的には不明であるが、SG1 と SG2 の埋土はお互いに近似している。SG2 の現存長約 7.6 m、幅約 0.54 m、検出面からの深さは 0.16 m で、断面形は半球状を呈する。底面は直径約 0.15 ～ 0.29 m の半円形状の波板状凹凸面が連続している。



第57図 道路状遺構分布図

3号道路状遺構（第57図・第58図）

SG3はSG1・SG2をC11グリッド付近で、SG6をC10グリッド付近で切る。現存長約27m、幅約0.5～1.2m、C9グリッド付近で後世の削平により消失している。検出面からの深さは最大で0.36mである。断面形は、南側斜面ではV字状、中央付近で逆台形状を呈し、北側では、底面を残すのみである。底面は幅約0.2～0.27mで硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約0.21～0.36mの半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

4号道路状遺構（第57図・第58図）

SG4は、道路状遺構群（SG1～9）の西端に位置し、B10グリッド付近でSG7に切られる。現存長約21m、幅約0.65m、検出面からの深さは約0.16mである。断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約0.18～0.44mで硬化しており、ほぼ全体に直径約0.21～0.4mの半円形状の波板状凹凸面が連続している。

5号道路状遺構（第57図・第58図）

SG5は、道路状遺構群（SG1～9）の東端に位置する。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約25m（推定）、幅約0.6mで、直線的なSG1～SG4・SG7～9に比べて、S字状の走向である。それは地形に沿った結果であると考えられる。検出面からの深さは約0.12m、断面形は、逆台形型を呈し、底面は幅約0.27～0.48mで硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約0.26～0.45mの半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

6号道路状遺構（第57図・第58図）

SG6は、SG5の西側に位置し、C10グリッド付近でSG7を切り、SG3に切られる。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約25m（推定）、幅約0.6mで、地形に沿って大きな円弧状となる。断面形は、基本的に逆台形状で、削平によって底面のみを残す部分が多い。検出面からの深さは最大で約0.12mである。底面は幅約0.24～0.48mで硬化しており、急勾配の南側斜面地においては、直径約0.14～0.46mの半円形状の波板状凹凸面が連続し、中央付近の緩斜面部分からは平坦面となる。

7号道路状遺構（第57図・第58図）

SG7は、B10グリッド付近でSG4を切り、SG6に切られる。SG7とSG4の平面的な位置関係から、SG7はSG4を再掘削した遺構の可能性がある。全長約12m、幅約0.6m、検出面からの深さは最大で約0.18m、断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約0.24～0.47mで硬化している。

8号道路状遺構（第57図・第58図）

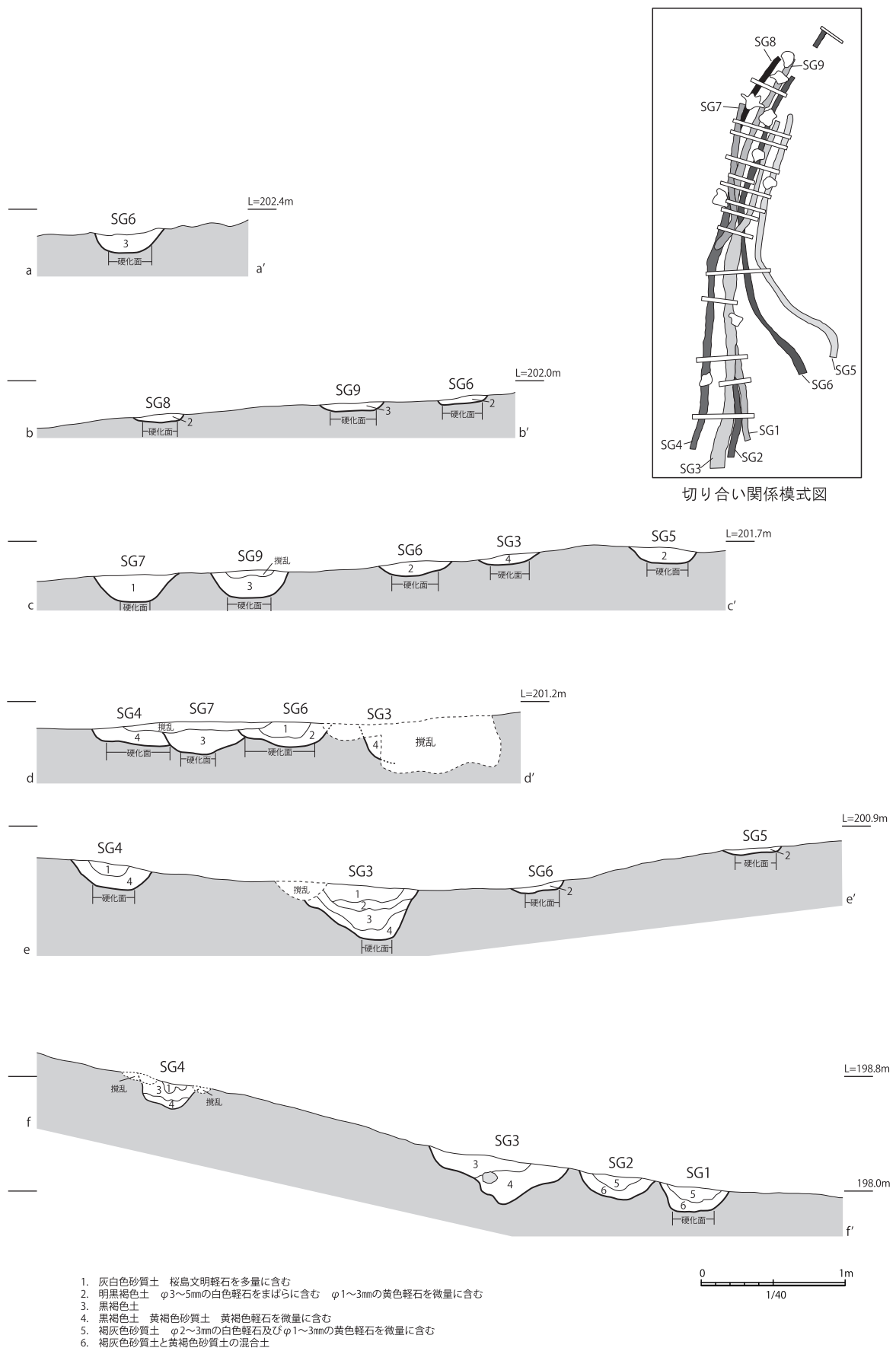
SG8はC9グリッド付近でSG7に切られる。後世の削平により部分的な遺存状況であるが、現存長約6m、幅約0.6m、幅約0.32～0.36mで硬化した底面部分のみを残す。

9号道路状遺構（第57図・第58図）

SG9はC10グリッド付近でSG7に切られる。現存長約12m、幅約0.6m、検出面からの深さは最大約0.2mで、断面形は逆台形状を呈し、その底面は幅約0.32～0.49mで硬化する。北側は削平により硬化した底面部分のみを残す。

10号道路状遺構（第57図・第58図）

SG10は調査区東端の壁面付近にて検出された。道路状遺構群（SG1～SG9）とは大きく離れた位置にある。部分的な検出であるので、全長等は不明であるが、平面には直径約0.33mの半円形状の波板状凹凸面が連続している。



第58図 道路状遺構土層断面実測図

第1表 土器観察表 (1)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					Gr.・層・遺構		外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A1	SC25	刻目 貝殻刺突文 沈線	貝殻条痕文 ケズリ状のナデ	浅黄橙 10YR 8/4 にぶい黄橙 10YR 7/3	浅黄橙 10YR 8/4	透明光沢粒少・黒色光沢粒少 (1mm以下) 灰白色粒少 (1mm以下)		内面に炭化物付着 外面にスス付着
2	縄文土器	深鉢	胴部	A1	B12Gr. Ⅸ層	貝殻条痕文 (線杉状) 貝殻腹縁刺突文	ケズリ状のナデ	にぶい黄橙 5YR 6/4	にぶい黄橙 5YR 6/4	灰白粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒多 (微細)		
3	縄文土器	深鉢	胴部	A1	B12Gr. Ⅸ層	貝殻条痕文 (線杉状)	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	灰白粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒多 (微細)		
4	縄文土器	深鉢	胴部	B1	D2Gr. Ⅸ層	貝殻条痕文 (線杉状)	ナデ	にぶい黄橙 10YR5/3	灰黄橙 10YR 5/3	黒褐色粒僅 (3mm以下)・浅黄橙色粒多・灰白色粒多 (2mm以下) 橙色粒少・透明光沢粒有 (1mm以下)		
5	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B1	C2Gr. Ⅸ層	貝殻条痕文 風化が著しい	ナデ	にぶい橘 7.5YR 5/3	灰黄褐 10YR 5/2	褐灰色粒僅 (3mm以下) にぶい橙色粒少・透明光沢粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒有 (2mm以下)・灰白色粒僅 (1mm以下)		復元底径 15.6 cm 底部の端面取り
6	縄文土器	深鉢	口縁部	C	A11Gr. Ⅸ層	ミガキ 貝殻腹縁刺突文 (羽状)	ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	雲母多 (2mm以下) 灰白粒少・浅黄橙粒多 (1mm以下)		
7	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	D2Gr. Ⅸ層	ミガキ 貝殻腹縁刺突文 貝殻条痕文 (鋸歯状)	ミガキ ナデ	暗灰黄 2.5YR4/2	暗灰黄 2.5YR4/2	にぶい黄褐色粒僅・黒色光沢粒多 (4mm以下) 灰白色粒僅 (3mm以下) にぶい橙色粒有 (1mm以下)・透明光沢粒多 (微細)		内外面に黒斑
8	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B1	D2Gr. Ⅸ層	楕円押型文	丁寧なナデ	にぶい赤褐 5YR 5/4	にぶい黄 7.5YR 7/4 灰黄 2.5YR 6/2	灰白色粒多 (4mm以下)・透明光沢粒多 (2mm以下) 浅黄橙色有・黒褐色粒僅 (1mm以下) 黒色光沢粒少 (1mm以下)		復元底径 15.9 cm
9	縄文土器	深鉢	底部	C	Ⅸ層	楕円押型文	ナデ	にぶい橘 7.5YR 5/4	橘 7.5Y 4/4	灰白色粒多 (4mm以下) 赤褐色粒有・雲母多 (2mm以下)		復元底径 10.3 cm
10	縄文土器	深鉢	口縁部	C	C8Gr. Ⅸ層	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰白粒少 (1mm以下)		
11	縄文土器	深鉢	胴部			山形押型文 (横方向)	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 6/3	灰白粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒多 (微細)		
12	縄文土器	深鉢	胴部	A1	B12Gr. Ⅸ層	山形押型文 (横方向)	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白粒少 (4mm以下)		
13	縄文土器	深鉢	口縁～底部	B1	D2Gr. Ⅸ層	ナデ 刻目 (波状) 網目状燃糸文 沈線文	丁寧なナデ	にぶい赤褐 5YR 5/4 にぶい橘 7.5YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい赤褐 5YR 5/4 にぶい赤褐 5YR 4/3	にぶい黄褐色粒少・黒褐色粒少 (3mm以下) 灰白色粒少・黒色粒有・透明光沢粒多 (1mm以下) 黒色光沢粒多 (2mm以下)		復元口径 22.3 cm 外面全体にスス付着
14	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	E3Gr. Ⅸ層	刺突列点文 燃糸文 沈線 列点文	ナデ	にぶい橘 7.5YR 5/4	橘 5YR 6/6	灰白粒多 (7mm以下)		復元口径 37.7 cm 外面広範囲にスス付着 内面に炭化物 両面の一部に黒斑
20	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	SC1	貝殻条痕 のちナデ	ナデ	にぶい橘 7.5YR 6/4	橘 7.5YR 6/6	灰白色粒少 (2mm以下)		復元口径 12 cm 外面にスス付着
21	縄文土器	深鉢	胴部～底部	A1	SC1	貝殻条痕 のちナデ	ナデ	橘 7.5YR 6/6	にぶい黄橙 10YR 6/3	灰白色粒多 (5mm以下) 透明光沢粒少 (2mm以下)		残存率: 1/4 底径約 12cm
22	縄文土器	深鉢	底部	A1	SC1	ナデ	ナデ	にぶい橘 5YR 6/4	橘 7.5YR 6/6	灰白色粒少 (4mm以下)		
23	縄文土器	浅鉢	胴部	A1	SC1	ミガキ	ミガキ	暗灰黄 2.5YR 4/2	灰黄褐 10YR 6/2	灰白色粒多・黒色粒少 (2mm以下) 透明光沢粒少 (微細)		
24	縄文土器	深鉢	口縁～底部	A2	SC11	貝殻条痕 のちナデ 欠損・剥離著しい	ナデ 風化気味	にぶい黄褐 10YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 7/4	褐灰色粒少・赤褐色粒少・灰褐色粒少 (7mm以下) 灰白色粒多・にぶい赤褐色粒多 (2mm以下) 黒色粒多・透明光沢粒多 (2mm以下)		底径約 9.4 cm
25	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	SC11	沈線文 ミガキ	沈線文 ミガキ	明黄褐 10YR 7/6 黒褐 10YR 3/1	浅黄 2.5Y 7/6	褐灰色粒僅・透明光沢粒僅 (1mm以下)		
26	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	SC11	沈線文 ミガキ 風化気味	沈線文 ミガキ	明黄褐 10YR 7/6 黒褐 10YR 3/1	明黄褐 10YR 7/6 黒褐 10YR 3/1	灰白色粒僅・透明光沢粒僅 (1mm以下)		残存率: 1/6
27	縄文土器	浅鉢	胴部	A2	SC11	ミガキ 風化気味	ミガキ 風化が著しい	黒 10YR 2/1 にぶい黄橙 10YR 7/4	黄灰 2.5Y 4/1 にぶい黄橙 10YR 6/4	浅黄褐色粒僅 (3mm以下)・赤褐色粒僅 (2mm以下) 褐灰色粒多 (1mm以下) 透明光沢粒有 (微細)		残存率: 1/7 復元胴部径 35.2 cm
29	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	SC23	貝殻条痕 のちナデ	貝殻条痕 のちナデ	橘 7.5YR 7/6 にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい橘 7.5YR 6/4	灰白色粒有 (4mm以下)・灰褐色粒少・赤褐色粒僅 (3mm以下) 黒色光沢粒少・透明光沢粒多 (2mm以下) 褐灰色粒少 (1mm以下)		口縁部にスス付着 復元胴部径 29.8 cm 復元口径 32.8 cm
30	縄文土器	深鉢	胴部	A2	SC23	粗いナデ	ナデ	浅黄 2.5YR 7/4 黒褐 2.5YR 3/1	にぶい黄 2.5YR 6/3 にぶい黄橙 10YR 6/4	透明光沢粒僅・灰白色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (1mm以下) 灰白色粒多・にぶい黄褐色粒多 (1mm以下)		外面に黒斑
31	縄文土器	深鉢	底部	A2	SC23	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/4	灰白粒多 (4mm以下) 透明光沢粒多 (2mm以下)		底径 9.5 cm
32	縄文土器	浅鉢	頭部～胴部	A2	SC23	ミガキ	ミガキ 風化・剥離著しい	明黄橙 10YR 7/6	明黄橙 10YR 7/6	灰白色粒多・赤褐色粒多 (1mm以下) 褐灰色粒多・透明光沢粒多 (1mm以下)・輝石少 (2mm以下)		残存率: 4/5 接合痕
33	縄文土器	浅鉢	胴部～底部	A2	SC23	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい黄橙 10YR 6/4 橘 7.5YR 6/6 黒 10YR 1.7/1	暗灰黄 2.5YR 5/2 黒 2.5YR 2/1 橘 7.5YR 6/6	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)		内面に黒斑
34	縄文土器	浅鉢	口縁～底部	A2	SC23	貝殻条痕 のち粗いナデ	貝殻条痕文	にぶい黄褐 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4 橘 5YR 6/6	褐灰色粒有・黒褐色粒少 (3mm以下) 灰白色粒僅 (2mm以下) 透明光沢粒多 (1mm以下)		外面にスス付着 復元口径 41.5 cm
37	縄文土器	深鉢	底部	A2	SC24	ナデ	ナデ	浅黄 2.5YR 8/3	灰黄 2.5YR 7/2	灰白色粒多・褐灰色粒多・褐色粒多 (3mm以下)		復元底径 8.6 cm
38	縄文土器	浅鉢	頭部～胴部	A2	SC24	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	黒 10YR 1.7/1	黒褐 10YR 3/1	灰白色粒少・赤褐色粒少 (1mm以下) 灰白色粒多・黒褐色粒多・透明光沢粒多 (微細)		残存率: 1/4
39	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	SC24	ミガキ (風化)	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/3 褐灰 10YR 4/1	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい褐色粒少 (5mm以下) 褐灰色粒多 (3mm以下) 黒褐色粒有 (3mm以下)		復元口径 36.6 cm 復元胴部径 41.2 cm
40	縄文土器	浅鉢	胴部	A2	SC24	丁寧なへらミガキ	丁寧なへらミガキ	灰黄褐 10YR 4/2	褐灰 10YR 4/1	灰白色粒僅 (1mm以下)		

第2表 土器観察表 (2)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					Gr.・層・遺構		外面	内面	外面	内面		
41	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B1	SC34		丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗灰黄 2.5YR 5/2	黒褐 2.5YR 3/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細) 灰白色粒多(微細)	
42	縄文土器	浅鉢	頭部～胴部	B1	SC34		丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗灰黄 2.5YR 5/2	黒 2.5YR 2/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細) 灰白色粒多(微細)	
44	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	SC40 SC41		三角形の突帯ナデ 風化が著しい	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 6/4	灰白色粒多(3mm以下) 透明光沢粒少・黒褐色粒少(微細)	
45	縄文土器	深鉢	底部	B1	SC40 SC41		ナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6	灰黄 2.5YR 6/2	透明光沢粒多(2mm以下) 黒色粒有・灰白色粒有(1mm以下)	推定底径 8 cm
46	縄文土器	浅鉢	口縁部	B1	SC40		ナデ	ミガキ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	透明光沢粒多・灰白色粒多(2mm以下)	
48	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		ナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6 にぶい黄褐 10YR 5/3	灰黄褐 10YR 5/2 にぶい橙 7.5YR 5/3	灰白色粒多・浅黄褐色粒多(1mm以下) 明赤褐色粒多・黒色粒多(1mm以下) 透明光沢粒多・黒色光沢粒多・灰白色粒多・浅黄褐色粒多(微細)	口径 24.2 cm 胴径 25.8 cm
49	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 2.5YR 5/4 褐灰 10YR 4/1	灰黄 2.5YR 7/2 暗灰黄 2.5YR 4/2	黒褐色粒多・灰白色粒多・灰色粒多(3mm以下) 浅黄褐色粒多・にぶい黄色粒多(3mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細)	口径 34 cm 胴径 33.2 cm
50	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		丁寧なナデ 粗いナデ	粗いナデ	にぶい黄褐 10YR 6/3	灰白 10YR 7/1	黒色粒有(8mm以下)・褐灰色粒多(5mm以下) 赤褐色粒少(3mm以下)・灰白色粒少(2mm以下) 透明光沢粒多(1mm以下)	外面全体にスス付着 内面に黒斑
51	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		ナデ	ナデ	橙 2.5YR 6/8	橙 7.5YR 6/6	灰白色粒多・褐灰色粒多(3mm以下) 透明光沢粒多(3mm以下)	補修孔 復元口径 35.8 cm
52	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		ナデ 貼付突帯	ナデ	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 7/4 にぶい黄 2.5YR 6/3	灰褐色粒有(7mm以下) 黒色粒有(6mm以下)・褐灰色粒多(5mm以下) 灰白色粒少・浅黄褐色粒有(3mm以下) 黒色光沢粒有(3mm以下)・透明光沢粒有(2mm以下)	
53	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	SC41		ナデ 貼付突帯	ナデ	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 5/3	灰白色粒多(3mm以下) 透明光沢粒多(2mm以下)	
54	縄文土器	深鉢	底部	B1	SC41		ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR 5/4	浅黄 2.5YR 7/3	黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細) 灰白色粒多(微細)	復元底径 8.7 cm 上げ底
55	縄文土器	深鉢	底部	B1	SC41		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4 にぶい黄褐 10YR 6/3	灰黄 2.5YR 7/2	にぶい黄褐色粒少・灰白色粒少(1mm以下) 褐灰色粒少(1mm以下)・褐灰色粒多・黒褐色粒多(1mm以下) 褐色粒多・白色粒多・透明光沢粒多(1mm以下)	復元底径 9.1 cm 上げ底
56	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B1	SC41		ナデ(風化著しい)	工具ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰白色粒少・赤褐色粒少・黒褐色粒(3mm以下) 灰白色粒多・赤褐色粒多・黒褐色粒多・褐灰色粒多(1mm以下)	復元底径 8.4 cm
57	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B1	SC41		工具ナデ	工具ナデ	橙 5YR 6/6	明赤褐 5YR 5/6	褐灰色粒有・赤褐色粒有(5mm以下) 黒褐色粒有・灰白色粒(5mm以下) 明褐灰色粒多・白色粒多・透明光沢粒多(1mm以下)	底部径 7.8 cm 内面に炭化物付着 上げ底
58	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC41		無刻目突帯文 ナデ 粗いナデ	ナデ	明赤褐 5YR 5/8	にぶい黄橙 10YR 7/4	暗褐色粒少・黒褐色粒少・赤褐色粒少(5mm以下) 暗褐色粒多・黒褐色粒多・赤褐色粒多・灰白色粒多(2mm以下)	
59	縄文土器	浅鉢	胴部～底部	B1	SC41		ミガキ	ミガキ	浅黄 2.5YR 7/3	浅黄 2.5YR 7/3	灰白色粒少(1mm以下) 雲母多(微細)	
60	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B1	SC41		ミガキ	ミガキ 沈線文	黒褐 2.5Y 3/2	灰黄褐 10YR 4/2	灰白色粒少(2mm以下)	復元口径 34.4 cm
61	縄文土器	浅鉢	胴部～底部	B1	SC41		ミガキ	ミガキ	黒 2.5YR 2/1	黒 2.5YR 2/1 暗灰黄 2.5YR 4/2	浅黄色粒有(2mm以下) 灰白色粒少・黒色光沢粒有(1mm以下) 透明光沢粒多(微細)	底部外面に焼成破裂 使用痕
62	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	SC40 SC41		ナデ 貼付突帯	工具ナデ	にぶい橙 7.5YR 7/4	橙 7.5YR 6/6	灰白色粒多(3mm以下) 透明光沢粒少・黒色光沢粒少(2mm以下)	
63	縄文土器	深鉢	頭部～胴部	B1	SC40 SC41		粗いナデ	ナデ(風化が著しい)	橙 5YR 6/6 明赤褐 5YR 5/6 黒褐 10YR 3/2	灰白 10YR 8/2	明赤褐色粒少(7mm以下)・褐灰色粒多(6mm以下) 黄褐色粒有・黒色光沢粒有(4mm以下) 灰白色粒多・透明光沢粒有(3mm以下) 黒褐色粒多(2mm以下)	
64	縄文土器	浅鉢	口縁～底部	B1	SC40 SC41		丁寧なミガキ	丁寧なミガキ 沈線文	橙 7.5Y 6/6 にぶい黄橙 10YR 5/4	黒褐 10YR 3/1 にぶい橙 10YR 6/6	褐灰色粒少・赤褐色粒少(2mm以下) 黒褐色粒少・灰白色粒少(2mm以下) 褐灰色粒有・赤褐色粒有・黒褐色粒有・灰白色粒有(微細)	口径 28.0 cm 内外面にスス付着 残存率: 1/2
65	縄文土器	深鉢	底部	B2	SC43		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4 褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1 にぶい黄橙 10YR 6/4	透明光沢粒多・灰白色粒多(2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細) 灰白色粒多・にぶい黄褐色粒多(微細)	底径 9.1 cm 内外面にスス付着
66	縄文土器	深鉢	胴部	B2	SC55		ナデ	貝殻条痕文	褐灰 10YR 4/1	灰黄褐 10YR 5/2	黒色光沢粒多・透明光沢粒多(2mm以下)	
67	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	SC55		ミガキ 沈線文	ミガキ 沈線文	にぶい橙 7.5YR 5/4	灰褐 7.5YR 4/2	灰白色粒少(2mm以下)	
68	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	SC57		ミガキ 貼付突帯 沈線文	ミガキ	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	灰白色粒多(3mm以下) 透明光沢粒少(2mm以下)	
69	縄文土器	浅鉢	胴部	B2	SC57		ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐 10YR 5/3	黒褐 2.5YR 3/2	灰白色粒多(1mm以下) 透明光沢粒多(微細)	外面に接合痕
70	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	SC59		ミガキ 沈線 風化著しい	ミガキ 沈線	黄灰 2.5Y 5/1 暗灰黄 2.5Y 5/2	黄灰 2.5Y 4/1	黄灰色粒少・透明光沢粒僅(2mm以下)	
71	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	SC59		貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄 2.5Y 6/3 黄灰 2.5Y 4/1	にぶい黄 2.5Y 6/3 黄灰 2.5Y 4/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多(1mm以下) 灰白色粒多(1mm以下)	外面にスス付着
72	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B2	SC60		指頭痕 貝殻条痕文 のちナデ	貝殻条痕文 のちナデ 貝殻条痕文 のちミガキ	黄橙 2.5YR 5/4 暗灰黄 2.5YR 4/2 橙 7.5YR 6/6	橙 YR 6/6 黒褐 Y R 3/2	淡黄色粒少(2mm以下) 透明光沢粒僅(1mm以下) 光沢粒(微細)	外面にスス付着 内外面に黒斑
73	縄文土器	深鉢	底部	B2	SC61		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/3 褐灰 10YR 4/1		黒色光沢粒多・透明光沢粒多(微細)	推定底径 9 cm 内面に炭化物付着
74	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B2	SC61		ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	灰白 2.5YR 7/1	灰白色粒少・褐灰色粒少・透明光沢粒少(3mm以下) 黒色粒多・黒褐色粒多・褐灰色粒多(1mm以下) 灰白色粒多・透明光沢粒多(1mm以下)	推定底径 10.6 cm 残存率: 1/3
75	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	SC61		ミガキ 貼付突帯 沈線文 風化著しい	ミガキ	明赤褐 2.5YR 5/6	黒褐 7.5YR 3/1 黒褐 7.5YR 3/2	黒褐色粒多・褐灰色粒多(2mm以下) 灰白色粒少・赤褐色粒僅(1mm以下) 透明光沢粒有(微細)	外面にスス付着

第3表 土器観察表 (3)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置 Gr.・層・ 遺構	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
						外面	内面	外面	内面		
76	縄文土器	浅鉢	頸部	B2	SC61	ミガキ 貼付突刺文 (線ネクタイ状)	ミガキ	にぶい黄褐 10YR 6/3	黒 10YR 2/1	灰白色粒僅 (2mm以下) にぶい赤褐色粒少・透明光沢粒少 (1mm以下)	内面にスス付着 外面に炭化物付着
77	縄文土器	深鉢	底部	B2	SC65	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10Y 7/3	黒褐 2.5Y 3/2	黒褐色粒有 (3mm以下) 褐灰色粒有・灰褐色粒僅・灰白色粒少・光沢粒多 (2mm以下)	推定底径 6.5 cm 残存率: 1/4
78	縄文土器	浅鉢	頸部～ 胴部	B2	SC65	ミガキ 風化が著しい	ミガキ 風化が著しい	黒 5Y 2/1	黒 5Y 2/1	灰白色粒僅・褐灰色粒僅 (2mm以下) 灰白色粒有・黒色粒有・灰色粒有 (微細) 赤褐色粒有・透明光沢粒有 (微細)	
79	縄文土器	浅鉢	頸部～ 胴部	B2	SC65	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	にぶい黄褐 10YR 6/4	黒 5Y 2/1	赤褐色粒僅・灰白色粒僅・灰色粒 (2mm以下) 黒色粒有・透明光沢粒有 (1mm以下)	外面にスス付着
80	縄文土器	浅鉢	胴部	B2	SC65	ミガキ	ミガキ	浅黄褐 10Y 5/2	黒褐 2.5Y 3/1	灰白色粒少・黒褐色粒少 (微細)	
81	縄文土器	浅鉢	口縁～ 底部	B2	SC65	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐 7.5YR 5/4 黒 7.5YR 2/1	にぶい黄褐 10YR 5/3 褐灰 10YR 4/1	灰白色粒少 (3mm以下) 赤褐色粒僅 (1mm以下) 透明光沢粒有 (微細)	口径 10.8 cm 胴部最大径 17.8 cm 底径 2.2 cm 器高 21.2 cm 焼成破砕痕 被熱痕 胴部全体にスス付着
82	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胴部	B2	SC65	指頭痕 貝殻条痕 のちナデ	貝殻条痕 のちナデ 貝殻条痕 のちミガキ	明橙 7.5YR 5/6 明黄橙 2.5YR 3/3	橙 7.5YR 6/8 灰オリーブ 5Y 4/2	灰白色粒少 (2mm以下) 黒色粒少 (1mm以下) 光沢粒多 (微細)	外面にスス付着
83	縄文土器	深鉢	口縁～ 頸部	B2	SC66	貝殻条痕 のち粗いナデ	貝殻条痕 のち粗いナデ	橙 7.5YR 7/6	にぶい黄橙 10YR 6/4	黒褐色粒少・黒色粒赤褐色粒少 (4mm以下) 灰白色粒多・透明光沢粒多 (2mm以下)	口縁部は貼付口縁
84	縄文土器	深鉢	胴部	B2	SC66	ナデ	ナデ	橙 7.5Y 6/6	橙 7.5Y 6/6 にぶい黄 2.5Y 6/4	灰白色粒少 (5mm以下) 白色光沢粒少・角閃石少 (2mm以下) 褐色粒僅 (1mm以下)・光沢粒僅 (微細)	外面にスス付着
85	縄文土器	深鉢	胴部	B2	SC66	ナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6 褐灰 7.5YR 4/1	にぶい黄 2.5YR 6/3 黄灰 2.5YR 5/1	灰白色粒少・にぶい赤褐色粒少 (3mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	内外面にスス付着
86	縄文土器	深鉢	胴部	B2	SC66	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR 7/4 褐灰 10YR 5/1	灰黄 2.5YR 6/2	灰白色粒多・透明光沢粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒多 (2mm以下) 黄褐色粒多 (微細)	外面にスス付着 外面に黒斑
87	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胴部	B2	SC66	粗いナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/6	灰白色粒有・透明光沢粒有 (2mm以下) 褐灰色粒有・暗赤褐色粒有・黒色粒有 (2mm以下)	口縁部に黒斑
89	縄文土器	深鉢	底部	B2	SC67	粗いナデ 風化が著しい	ナデ 風化が著しい	にぶい黄橙 10YR 6/4	褐灰 10YR 4/1 にぶい黄橙 10YR 6/4	褐灰色粒多・にぶい赤褐色粒多 (2mm以下)	底径 8.4 cm
90	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	SC67	ミガキ	ミガキ 沈線	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄 2.5Y 6/3 黄灰 2.5Y 4/1	灰白色粒僅 (1mm以下)	
91	縄文土器	浅鉢	口縁部	C	SC71	ミガキ	沈線 ミガキ	にぶい黄褐 10YR 7/4 黒褐 10YR 3/1	にぶい黄褐 10YR 7/3 黒褐 10YR 3/1	灰白色粒僅 (2mm以下)	
92	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胴部	C	SC65 SC71	貝殻条痕文	ミガキ	明黄橙 10YR 6/6 黒褐 10YR 3/1 にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒少・白色粒僅 (1mm以下) 透明光沢粒少・黒色光沢粒僅 (微細)	外面にスス付着
93	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	B4Gr. IV層	貝殻腹縁刺突文 凹線文	ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/3	褐 7.5YR 4/6	透明光沢粒少・灰白粒少 (微細)	
94	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	A10Gr. IV層	貝殻腹縁刺突文 凹線文	貝殻条痕のちナデ	褐 7.5YR 4/3	灰褐 7.5YR 4/2 黒褐 7.5YR 3/1	暗褐色粒有 (5mm以下) 暗赤褐色粒少・黒色光沢粒多 (1mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	
95	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	C3Gr. IV層	凹線文 沈線文	工具ナデ	灰黄褐 10YR 4/2	褐灰 10YR 4/2	灰白粒少・透明光沢粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒少 (2mm以下)	外面にスス付着
96	縄文土器	深鉢	胴部	B1	D2Gr. IV層	凹線文 沈線文	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	黒色光沢粒多 (微細)	
97	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	C5Gr. IV層	刺突文 沈線文 縄文	ナデ	灰黄褐 10YR 5/3	灰黄褐 10YR 5/3	灰白色粒少・透明光沢粒少 (2mm以下) 褐灰色粒少 (2mm以下)	
98	縄文土器	深鉢	胴部	B2	C5Gr. IV層	貝殻腹縁刺突文 凹線文	貝殻条痕文	にぶい黄橙 10YR 7/4	褐灰 10YR 4/1	灰白色粒少・透明光沢粒少 (2mm以下) 褐灰色粒少 (2mm以下)	
99	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	E1Gr. IV層	短沈線文 凹線文	ナデ	明黄褐 10YR 7/6	にぶい黄 2.5Y 6/3	灰白色粒少・褐灰色粒少 (4mm以下)	
100	縄文土器	深鉢	胴部	B2	B5Gr. IV層	凹線文	ナデ	明褐 7.5YR 5/6	にぶい褐 7.5YR 5/4	灰白粒多 (3mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	
101	縄文土器	深鉢	胴部	B2	B5Gr. IV層	凹線文	貝殻条痕文	にぶい黄褐 10YR 7/4 橙 2.5YR 6/6	にぶい黄褐 10YR 6/3 橙 5YR 6/6	灰白色粒僅 (3mm以下) 褐色粒僅 (2mm以下) 黒褐色粒有・透明光沢粒多 (1mm以下)	内面に黒斑
102	縄文土器	深鉢	胴部	B2	C5Gr. IV層	凹線文 貝殻条痕文	貝殻条痕文	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	灰白粒多・灰褐色粒多 (2mm以下) 褐灰色粒多・透明光沢粒多 (2mm以下)	
103	縄文土器	深鉢	胴部	C	B6Gr. IV層	凹線文	貝殻条痕文	褐灰 7.5YR 4/2	明赤褐 7.5YR 5/6 にぶい褐 7.5YR 5/4	褐色粒多・黒色光沢粒多 (2mm以下) 透明光沢粒多 (2mm以下)	
104	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	D5Gr. IV層	刻目 (口唇部) 凹線文 貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/4	にぶい黄褐 10YR 5/4	灰白粒多 (3mm以下)	
105	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	B5Gr. IV層	貝殻条痕のちナデ 貝殻腹縁刺突文	貝殻条痕文	橙 5YR 6/6 にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい橙 7.5YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 6/3	灰褐色粒少・透明光沢粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒少 (2mm以下)	内外面にスス付着
106	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	C3Gr. IV層	ミガキ	風化が著しく不明	にぶい黄橙 10YR 6/4 黒褐 10YR 3/1	にぶい褐 7.5YR 5/4	灰白粒有 (3mm以下)・透明光沢粒有 (2mm以下) にぶい褐色粒少・黒褐色粒少 (1mm以下) 赤色粒僅・黒色光沢粒有 (1mm以下)	
107	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	A1	IV層	ナデ	ナデ	暗黄灰 2.5YR 5/2	黄灰 2.5YR 5/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 浅黄色粒多・灰白色粒多 (微細)	内外面にスス付着
108	縄文土器	深鉢	口縁～ 胴部	A1	B11Gr. IV層	口縁部に沈線文 ナデ	粗いミガキ	にぶい褐 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 5/3	浅黄褐色粒少・透明光沢粒多 (2mm以下) 灰白色粒多・黒色光沢粒有 (1mm以下)	外面全体に黒斑
109	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	C1Gr. IV層	口縁部に沈線文 ミガキ	ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白粒少 (7mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (1mm以下)	
110	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	C2Gr. IV層	口縁部に沈線文 ナデのちミガキ	ナデのちミガキ	褐 7.5YR 4/3	にぶい赤褐 5YR 5/4	浅黄褐色粒少・透明光沢粒多 (2mm以下) 黒色粒僅・赤褐色粒僅 (1mm以下)	

第4表 土器観察表 (4)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					Gr.	層・遺構	外面	内面	外面	内面		
111	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層	口縁部に沈線文 ミガキ	ナデ 風化気味	褐灰 10YR 5/1 黒 10YR 2/1	にぶい橙 7.5YR 6/4 橙 7.5YR 7/1	赤色軟質粒少 (5mm以下) 黒色粒有 (3mm以下) 褐灰色粒多・浅黄褐色粒有 (2mm以下) 透明光沢粒多 (2mm以下)・黒色光沢粒有 (1mm以下)	外面に黒斑	
112	縄文土器	深鉢	胴部	B1	C2Gr. IV層	ミガキ 列点文 沈線文	ナデ	赤褐 5YR 4/8	橙 7.5YR 6/6	灰白色粒少・透明光沢粒少 (2mm以下)	外面に赤色顔料付着	
113	縄文土器	深鉢	胴部	B1	C2Gr. IV層	刺突列点文 突帯 ミガキ	ナデ (風化が著しい)	黒褐 5YR 2/1 橙 5YR 6/6	黒 7.5YR 2/1	浅黄褐色粒有 (4mm以下) 赤褐色粒少 (2mm以下) 褐灰色粒少・黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (1mm以下)	外面の広範囲にスス付着	
114	縄文土器	深鉢	頸部～胴部	B2 C	C4Gr. IV層	ミガキ	ミガキ	浅黄 2.5Y 7/4	灰オリーブ 5Y 4/2	軟質褐色粒僅 (2mm以下) 透明白色粒僅・黄褐色粒少 (1mm以下) 灰白色粒少 (1mm以下)・光沢粒有 (微細)	推定胴径 33 cm 複合口縁	
115	縄文土器	深鉢	口縁～頸部	B1	C1Gr. IV層	沈線文 ナデ	沈線文 ナデ	褐灰 10YR 4/1	にぶい黄橙 10YR 5/3 黒褐 10YR 3/1	にぶい赤褐色粒僅・黒褐色粒僅 (2mm以下) 橙色粒多・透明光沢粒多 (1mm以下)		
116	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	IV層	粗いナデ	粗いナデ	橙 7.5YR 6/6	にぶい褐 7.5YR 5/3	透明光沢粒多・明褐色粒多 (2mm以下) 灰白色粒多 (2mm以下)	外面にスス付着	
117	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	C1Gr. IV層	ナデ	ナデ	褐灰 7.5YR 4/1	にぶい黄褐 10YR 5/3 褐灰 10YR 4/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 浅黄色粒多・灰白色粒多 (微細)		
118	縄文土器	浅鉢	口縁部	B1	C3Gr. IV層	ナデ 縦方向の沈線文	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	褐灰色粒多・灰黄褐色粒有 (2mm以下) 黒色光沢粒少 (微細)		
119	縄文土器	深鉢	口縁部	B1	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 7/3	褐灰色粒有 (4mm以下)・灰白色粒多 (3mm以下) 黒色粒少 (2mm以下) 赤褐色粒僅・透明光沢粒少 (1mm以下)	外面の広範囲にスス付着	
120	縄文土器	深鉢	口縁部	C	C7Gr. IV層	ミガキ 風化気味	ミガキ 風化気味	橙 7.5Y 6/6 褐灰 7.5YR 4/1	橙 7.5YR 6/6 にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒有 (7mm以下)・明黄褐色粒多 (4mm以下) 透明光沢粒少・黒色光沢粒有 (1mm以下) 光沢粒多 (微細)		
121	縄文土器	深鉢	口縁～頸部	B1	C4Gr. IV層	波状口縁 ナデ	ナデ	灰黄褐 10YR 5/2	褐 10YR4/4	浅黄褐色粒有 (4mm以下)・褐灰色粒少 (3mm以下) 透明光沢粒多 (2mm以下)	外面全体にスス付着 内面に黒斑	
122	縄文土器	浅鉢	口縁～頸部	B2	IV層	波状口縁 ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/4	明黄褐 10Y 6/6 灰 5Y 4/1	灰白色粒僅 (2mm以下) 浅黄色粒僅・黒色粒少 (1mm以下) 光沢粒少 (微細)	外面にスス付着 内外面に黒斑	
123	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	D4Gr. IV層	波状口縁 ナデ	ナデ	橙 7.5Y 6/6 にぶい黄 2.5Y 6/4	にぶい黄橙 10YR 5/4 にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒有・灰色粒少 (4mm以下) 透明白色粒少 (2mm以下)・黒色粒僅・軟質褐色粒僅 (1mm以下) 光沢粒少 (微細)	内面に黒斑	
124	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	A11Gr. IV層	波状口縁 貝殻条痕文	ナデ	黒褐 10YR 3/1	にぶい黄褐 10YR 6/4	透明光沢粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (微細)		
125	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	IV層	工具ナデ	工具ナデ	明赤褐 5YR 5/6	橙 7.5YR 6/6 褐 7.5YR 4/3	黄灰色粒一つ (2mm) 灰白色粒多・黒色粒多 (1mm以下) 橙色粒多・透明粒多 (1mm以下)	内外面に黒斑 外面にスス付着	
126	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	A9Gr. IV層	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい橙 7.5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰白色粒多・褐灰色粒多 (2mm以下) 黒色粒僅・透明光沢粒有 (1mm以下)	口縁部に黒斑 外面にスス付着	
127	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層	貝殻条痕 のち粗いナデ	貝殻条痕 のち粗いナデ	浅黄橙 10YR 8/3 にぶい黄褐 10YR 7/3	灰黄 2.5YR 7/2 浅黄 2.5YR 7/3	黒色光沢粒有 (3mm以下) 褐灰色粒多・浅黄褐色粒多・黒色光沢粒有 (2mm以下) 透明光沢粒有 (1mm以下)	接合痕	
128	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	A10Gr. IV層	ナデ	貝殻条痕 のちナデ	にぶい黄橙 10YR 5/3 黒褐 10YR 3/1	浅黄 2.5Y 7/4	黒色粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (微細)	推定口径 30 cm 外面にスス付着	
129	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層	貝殻条痕 のちナデ	貝殻条痕 のち粗いナデ	橙 5YR 6/6 橙 7.5YR 7/6	暗灰黄 2.5Y 5/2 黄灰 2.5Y 4/1	暗灰色粒僅・灰白色粒僅 (3mm以下) 淡黄色粒多・赤褐色粒僅・黒色光沢粒少 (2mm以下) 白色光沢粒少・角閃石僅 (2mm以下) 光沢粒少 (微細)	推定口径 36.8 cm 外面に黒斑	
130	縄文土器	深鉢	口縁部	A1	A 11Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR 6/4 褐灰 10YR 5/1	にぶい黄橙 10YR 6/4	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (2mm以下) 灰白色粒多 (2mm以下)	推定口径 42.4 cm	
131	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	C	B6Gr. IV層	口縁部に突帯 ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4 にぶい橙 7.5Y 6/4	明黄褐 10YR 6/6 にぶい橙 7.5Y 6/4	灰白色粒有 (3mm以下)・透明光沢粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒少・淡黄色粒僅 (1mm以下) 光沢粒有 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑	
132	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	D4Gr. IV層	口縁部に貼付突帯 貝殻条痕文	ナデ	黒褐 2.5YR 3/1	にぶい黄橙 2.5YR 6/4	赤褐色粒僅・黒褐色粒僅 (3mm以下) 透明光沢粒多・黒色光沢粒多・灰白色粒多・赤褐色粒多 (1mm以下)	外面にスス付着 内面に黒斑	
133	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	B10Gr. IV層	口縁部に突帯 ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい黄 2.5YR 6/3	灰白色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (微細)		
134	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	C5Gr. IV層	口縁部に貼付突帯 ナデ	ナデ	黄灰 2.5Y 4/1	暗灰黄 2.5Y 4/2	灰白色粒少・透明光沢粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (微細)	内外面に黒斑	
135	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	C4Gr. IV層	口縁部に貼付突帯 工具ナデ	工具ナデ	橙 5YR 6/6	浅黄 2.5Y 7/3	灰白色粒有・褐灰色粒有・黒色粒有 (2mm以下) 褐色粒・灰黄褐 (2mm以下)・透明粒 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑	
136	縄文土器	深鉢	口縁部	C	B6Gr. IV層	口縁部に貼付突帯 ナデ	ナデ	浅黄 2.5Y 7/4	明黄橙 10YR 7/6	褐灰色粒僅 (3mm以下) 黒色光沢粒有・透明光沢粒有 (微細)	外面にスス付着	
137	縄文土器	深鉢	口縁部			口縁部に貼付突帯 ナデ	ナデ	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	灰白色粒僅・褐灰色粒僅 (4mm以下) 褐色粒有・赤褐色粒有・黒色粒有 (2mm以下)		
138	縄文土器	深鉢	頸部～胴部	A2	A9Gr. IV層	貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい黄橙 10YR 7/4	灰黄橙 10YR 6/2 にぶい黄褐 10YR 6/3	黒褐色粒少・黒色光沢粒有 (3mm以下) 灰白色粒有・透明光沢粒有 (2mm以下)	外面に黒斑 推定胴部最大径 30.6 cm	
139	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層	ナデ 貝殻条痕文のちナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6 明黄褐 10YR 7/6	黒 5Y 2/1 灰 5Y 4/1	にぶい黄褐色粒僅 (4mm以下) 灰色粒僅 (3mm以下) 軟質黄褐色粒 (1mm以下)・光沢粒少 (微細)	外面にスス付着 内面全体に黒斑	
140	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	A9Gr. IV層	工具ナデ	丁寧な工具ナデ	褐灰 10YR 4/1	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒少・褐灰色粒少・透明粒少 (2mm以下) 赤褐色粒有 (1mm以下)	外面にスス付着 内面に炭化物	
141	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	C4Gr. IV層	工具ナデ	口唇部・沈線文 丁寧なミガキ	黒 5YR 4/1	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙色粒一つ (2mm) 灰白色粒有・褐灰色粒有・黒色粒有 (1mm以下) にぶい橙色粒有・透明粒有 (1mm以下)	外面にスス付着 内面に炭化物付着	
142	縄文土器	深鉢	口縁部	A2	B9Gr. IV層	沈線文 貝殻条痕文	貝殻条痕文	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい橙 7.5YR 7/4	赤褐色粒僅 (3mm以下) 灰白色粒有・褐灰色粒多・透明光沢粒有 (2mm以下)	外面にスス付着	
143	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B1	C2Gr. IV層	ナデ	風化が著しい	明黄褐 10YR 6/6	明黄褐 10YR 6/4	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (2mm以下)		
144	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	B2	B4Gr. IV層	貝殻条痕文	貝殻条痕 のちナデ	にぶい赤褐 5YR 5/4 にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい赤褐 5YR 5/4 にぶい黄橙 10YR 6/4	灰褐色粒有 (6mm以下)・浅黄褐色粒有 (5mm以下) 明赤褐色粒僅 (3mm以下)・黒色粒有・透明光沢粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒有 (1mm以下)	内外面に黒斑	

第5表 土器観察表 (5)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置 Gr.・層・遺構	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
						外面	内面	外面	内面		
145	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	C5Gr. IV層	工具による粗いナデ口縁部に貼付突帯	工具による粗いナデ	にぶい橙 7.5YR 7/4	にぶい黄橙 10YR 7/3	灰色粒僅・灰白色粒僅・褐灰色粒僅 (4mm以下) 灰黄色粒僅 (3mm以下)・黒色粒有・透明粒有 (2mm以下)	内外面に黒斑
146	縄文土器	深鉢	口縁部	A2	A10Gr. IV層	ナデ 貝殻条痕文	ナデ 貝殻条痕文	にぶい黄褐 10YR 7/4	灰黄褐 10YR 5/2	灰白色粒僅・褐灰色粒少 (2mm以下) 黒色光沢粒少 (2mm以下)・透明光沢粒多 (微細)	外面口唇部に黒斑
147	縄文土器	深鉢	口縁部	B2	B5Gr. IV層	ナデ 口縁部に貼付突帯	ナデ	にぶい黄褐 10YR 5/3	灰黄褐 10YR 5/2	黒褐色粒僅 (3mm以下) 黒色粒多・灰白色粒多・透明光沢粒多・赤褐色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	外面に黒斑
148	縄文土器	深鉢	口縁～ 胸部	B2	IV層	ナデ 口縁部に貼付突帯 風化気味	ナデ 風化気味	にぶい褐 7.5YR 5/4	褐灰 7.5YR 4/1	黒色粒少・灰白色粒少・透明光沢粒少 (3mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多・灰白色粒多 (微細)	内面に黒斑
149	縄文土器	深鉢	底部	B2	B5Gr. IV層	貝殻条痕文 アジロ編み圧痕 (底面)	ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/4	明赤褐 5YR 5/6	褐灰色粒少・灰白色粒少 (2mm以下) 透明光沢粒少・黒色光沢粒少 (2mm以下)	残存率: 1/6 推定底径 8.7cm 底面に白色の物質付着
150	縄文土器	深鉢	底部	B2	B4Gr. IV層	貝殻条痕文 アジロ編み圧痕 (底面)	貝殻条痕文 ナデ	にぶい褐 7.5YR 5/4	暗灰黄 2.5YR4/2	灰白色多 (2mm以下)	推定底径 12cm 底面に白色の物質付着
151	縄文土器	深鉢	底部	B1	C2Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/3	褐灰 10YR 4/1	黒色粒少・黄褐色粒僅 (2mm以下) 灰白色粒少・透明白色粒僅 (1mm以下)・光沢粒僅 (微細)	推定底径 8cm
152	縄文土器	深鉢	底部	A2	B8Gr. IV層	ナデ	ナデ	赤褐 5YR 4/8	暗赤褐 5YR 3/6	灰白色粒有・褐灰色粒有・赤褐色粒有 (2mm以下) 明褐灰色粒多・黒色粒多・透明光沢粒多 (1mm以下)	外面に黒斑 内面に灰化物
153	縄文土器	深鉢	底部	B1	B2Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい赤褐色粒僅 (5mm以下) 角閃石僅 (2mm以下) 灰白色粒多・黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細)	推定口径 9.2cm
154	縄文土器	深鉢	底部	A1	B11Gr. IV層	ナデ	工具ナデ	にぶい橙 5YR 6/4	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒有・褐色粒有 (1mm以下) 黒色粒有・透明粒有 (1mm以下)	外面にスス付着 内面に黒斑
155	縄文土器	深鉢	底部	A1	A11Gr. IV層	ナデ	ナデ	浅黄 2.5Y 7/3	灰 5Y 2/1	褐灰色粒少・赤褐色粒少 (3mm以下) 黒色粒多・灰白色粒多 (1mm以下)	底径約 10cm 外面に黒斑
156	縄文土器	深鉢	底部	B2	C4Gr. IV層	ナデ	ナデ	橙 7.5YR 7/6 褐灰 10YR 5/1	浅黄 2.5YR 7/3	灰色粒有・白色光沢粒少 (4mm以下) 黒色光沢粒少・軟質褐色粒僅 (2mm以下) 透明光沢粒少 (1mm以下) 光沢粒 (微細)	推定底径 12cm
157	縄文土器	深鉢	底部	B1	C1Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	褐灰 10YR 5/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	
158	縄文土器	深鉢	底部	B2	C6Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4 浅黄 2.5YR 7/3	灰黄褐 10YR 6/2	黒色粒少 (3mm以下) 褐灰色粒多・透明白色粒多 (2mm以下) 黒色光沢粒有 (1mm以下)	
159	縄文土器	深鉢	底部	B1	B2Gr. IV層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	灰黄 2.5YR 6/2	透明白色粒少・黒色光沢粒少 (3mm以下) 黒色粒少 (1mm以下)・光沢粒僅 (微細)	底径 8.8cm 上げ底状
160	縄文土器	深鉢	底部	B2	B5Gr. IV層	ナデ	ナデ	明黄褐 10YR 7/6	灰黄 2.5YR 6/2 淡黄 2.5Y 8/3	灰白色粒少 (3mm以下) 黒色粒少・赤褐色粒僅・透明白色粒 (1mm以下)・光沢粒 (微細)	内面に黒斑 上げ底状
161	縄文土器	深鉢	底部	A1	A12Gr. IV層	指頭痕 ナデ	ナデ	橙 7.5YR 6/6	にぶい黄橙 10YR 6/4	灰白色粒一つ (8mm) 褐色粒多・灰白色粒多・褐灰色粒多 (1mm以下) 黒色粒多・透明粒多 (1mm以下)	推定底径 10cm
162	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	C4Gr. IV層	口唇部：ミガキの沈線 ナデ	ナデ	にぶい橙 7.5YR 6/4 にぶい黄橙 10YR 7/3	にぶい黄橙 10YR 7/3 灰黄褐 10YR 6/2	白灰色粒多・褐灰色粒多 (2mm以下) 黒色粒少・透明光沢粒多 (2mm以下)	外面にスス付着
163	縄文土器	浅鉢	口縁部	C	B6Gr. IV層	沈線文 丁寧なミガキ 風化気味	丁寧なミガキ 風化気味	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	赤褐色粒僅・灰白色粒僅・黒色粒僅 (1mm以下) 透明粒有 (微細)	
164	縄文土器	浅鉢	口縁部	B1	D2Gr. IV層	ミガキ 沈線文	ミガキ 沈線文	黒褐 2.5Y 3/1	黒褐 2.5Y 3/1	灰白色粒有・赤褐色粒有・黒色粒有 (1mm以下)	
165	縄文土器	浅鉢	口縁～ 頸部	B2	C5Gr. IV層	ミガキ 沈線文	ミガキ	にぶい黄褐 10YR 6/4	浅黄 2.5Y 7/3	黒色粒有 (1mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	内外面に黒斑
166	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	C	B6Gr. IV層	ミガキ 沈線文 風化気味	ナデ 風化気味	暗灰黄 2.5Y 5/2	黄灰 2.5YR 5/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	推定口径 31cm
167	縄文土器	浅鉢	口縁部	C	B6Gr. IV層	丁寧なミガキ 沈線文	沈線文 丁寧なミガキ	にぶい黄橙 10YR 7/4	褐灰 10YR 4/1	赤褐色粒有 (1mm以下) 灰白色粒有・褐灰色粒有・透明粒有 (微細)	外面に赤色の付着物
168	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	A2	B10Gr. IV層	ミガキ 沈線文 リボン状の突起	沈線文 ミガキ	にぶい黄橙 10YR 7/4 浅黄 2.5Y 7/4	浅黄 2.5Y 7/4	黒色粒僅 (3mm以下) 黒色光沢粒少・透明光沢粒僅 (1mm以下) 明黄褐粒僅 (1mm以下)・光沢粒少 (微細)	内外面に黒斑
169	縄文土器	浅鉢	口縁部	C	B6Gr. IV層	ミガキ リボン状の突起	ミガキ	明黄褐 10YR 7/6 褐灰 10YR 5/1	明黄褐 10YR 7/6 褐灰 10YR 5/1	透明光沢粒僅・灰白色粒僅 (1mm以下) 光沢粒少 (微細)	口縁部に貼付突起
170	縄文土器	浅鉢	頸部～ 胸部	B1	C3Gr. IV層	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐 10Y 5/3 褐灰 10YR 4/1	灰黄褐 10YR 5/2 褐灰 10YR 4/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	内外面に黒斑
171	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	C	D8Gr. IV層	ミガキ 沈線文 風化気味	ミガキ 沈線文 風化気味	黄灰 2.5Y 4/1	黄灰 2.5Y 5/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多・浅黄色粒多 (微細)	
172	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	B2	C5Gr. IV層	ミガキ 沈線文	ミガキ 沈線文	褐灰 10YR 4/1 黒褐 10YR 3/1	黒 10YR 2/1	灰白色粒少 (2mm以下) 褐灰色粒有 (1mm以下) 透明光沢粒有 (微細)	
173	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	B2	B5Gr. IV層	丁寧なミガキ 沈線文	丁寧なミガキ 沈線文	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	灰白色粒僅・赤褐色粒僅・透明粒僅 (2mm以下) 褐灰色粒有・黒色粒有 (1mm以下)	
174	縄文土器	浅鉢	口縁～ 頸部	C	D7Gr. IV層	ミガキ 沈線文 風化気味	ミガキ 沈線文 風化気味	明黄褐 10YR 7/6 浅黄 10YR 8/4	明黄褐 10YR 7/6 にぶい黄橙 10YR 7/2	灰白色粒僅 (3mm以下) 淡黄色粒少・軟質褐色粒僅 (1mm以下) 光沢粒有 (微細)	内外面に黒斑
175	縄文土器	浅鉢	口縁～ 頸部	A2	C8Gr. IV層	ミガキ	沈線文 ミガキ	浅黄 2.5YR 7/4	浅黄 2.5YR 7/4	黒色粒僅 (3mm以下)・褐灰色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒僅 (1mm以下)・透明光沢粒多 (微細)	推定口径 31.4cm 推定胴部最大径 32.3cm
176	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	B2	B5Gr. IV層	丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	暗灰黄 2.5Y 5/2	暗灰黄 2.5Y 5/2	にぶい黄褐色粒僅 (5mm以下)・黄灰色粒僅 (4mm以下) 褐色粒僅 (2mm以下)・透明光沢粒少 (微細)	
177	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	B1	B2Gr. IV層	ミガキ 沈線文	ミガキ 沈線文	黒褐 10YR 3/1 にぶい黄橙 YR 6/4	黒 10YR 2/1 にぶい黄橙 YR 6/4	黒色光沢粒僅 (2mm以下) 褐色粒僅・透明白色粒僅・灰白色粒僅 (1mm以下) 光沢粒僅 (微細)	リボン状貼付突帯
178	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	A2	IV層	ミガキ 沈線文	ミガキ 沈線文	にぶい黄橙 10YR 6/3	にぶい黄橙 10YR 6/4	透明光沢粒少・灰白色粒少 (微細)	
179	縄文土器	浅鉢	口縁～ 胸部	B1	C3Gr. IV層	ミガキ 沈線文 風化が著しい	ミガキ 沈線文 風化が著しい	黒褐 2.5Y 3/1 橙 7.5YR 7/6	黄灰 2.5Y 4/1 橙 7.5YR 7/6	赤褐色粒僅・透明白色粒僅 (2mm以下) 明黄褐粒僅・灰白色粒僅 (1mm以下)	リボン状貼付突帯 推定口径 37.4cm 内外面に黒斑

第6表 土器観察表 (6)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置		手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
					Gr.・層・遺構		外面	内面	外面	内面		
180	縄文土器	浅鉢	胴部～底部	A2	D9Gr. IV層		ミガキ	ミガキ 風化が著しい	黄灰 2.5Y 4/1 にぶい黄橙 10YR 7/4	黄灰 2.5Y 5/1	黄橙色粒少・灰白色粒少 (2mm以下) 透明光沢粒少 (1mm以下) 光沢粒多 (微細)	内外面に黒斑
181	縄文土器	浅鉢	頸部～胴部	B2	C5Gr. IV層		丁寧なミガキ	丁寧なミガキ	褐灰 10YR 4/1	褐灰 10YR 4/1	灰白色粒少・灰色粒少・赤褐色粒少 (1mm以下) 褐灰色粒有・透明粒有 (微細)	
182	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	B 9Gr. IV層		ミガキ 風化気味	ミガキ 沈線文 風化気味	にぶい黄橙 10YR 6/4 褐灰 10YR 5/1	にぶい橙 7.5YR 5/4 褐灰 7.5YR 5/1	黒色光沢粒多・灰白色粒多 (微細)	
183	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層		ミガキ	ミガキ	橙 5YR 6/6	橙 7.5YR 6/6 褐灰 10YR 4/1	赤褐色粒僅 (2mm以下) 黒色粒僅・灰白色粒僅 (1mm以下) 光沢粒少 (微細)	
184	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B2	D4Gr. IV層		ミガキ リボン状の突起	ミガキ	褐灰 10YR 4/1	灰黄褐 10YR 4/2	灰白色粒有・黒色粒有・透明粒有 (1mm以下) 赤褐色粒有・褐灰色粒有 (1mm以下)	
185	縄文土器	浅鉢	口縁部	B1	C2Gr. IV層		ミガキ 口縁端部に ひれ状突起	ミガキ	黒 10YR 2/1	黒 10YR 2/1 暗灰黄 2.5Y 4/2	灰白色粒少・褐灰色粒少 (2mm以下) 透明光沢粒 (1mm以下)	
186	縄文土器	浅鉢	口縁部	B2	B5Gr. IV層		ミガキ	ミガキ	にぶい黄 2.5YR 6/3	暗灰黄 2.5YR 5/2	黒色光沢粒多・透明光沢粒多灰白色粒多 (微細)	口唇部に黒斑 玉縁状の2次口縁
187	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	A9Gr. IV層		ミガキ	ミガキ 風化が著しい	褐灰 10YR 4/1 にぶい黄橙 10YR 6/4	褐灰 10YR 5/1	にぶい黄橙色粒僅 (3mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	内外面に黒斑
188	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	B9Gr. IV層		ミガキ 貼付突起	ミガキ	にぶい黄 2.5YR 6/3	黄灰 2.5YR 4/1	灰白色粒僅・透明粒僅 (2mm以下) 黄灰色粒有・赤褐色粒有・黒褐色有 (1mm以下)	外面に黒斑 外面にスス付着
189	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A1	A 11Gr. IV層		波状口縁 刺突文 沈線文 ミガキ	貝殻腹縁による ナデ	にぶい黄褐 10YR 7/4 にぶい黄橙 10YR 6/3	暗灰黄 2.5Y 5/2	黒色粒少・黒色光沢粒少 (1mm以下) 光沢粒多 (微細)	外面に黒斑 接合痕
190	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	IV層		ミガキ	ナデのちミガキ (風化)	灰黄褐 10YR 5/2 褐灰 10YR 4/1	にぶい黄褐 10YR 5/3	灰白色粒僅 (2mm以下) 黒褐色粒僅 (1mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	外面にスス付着
191	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	IV層		ミガキ	ミガキ	橙 7.5YR 6/6	にぶい橙 7.5YR 6/4	赤褐色粒僅・灰白色粒僅 (2mm以下) 透明光沢粒僅・黒色粒僅 (2mm以下) 灰白色粒多・透明光沢粒多・黒色粒多 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑
192	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	IV層		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙 10YR 6/4	にぶい黄褐 10YR 5/3	透明光沢粒少・黒色光沢粒少 (1mm以下) 灰白色粒少 (1mm以下)	
193	縄文土器	深鉢	胴部～底部	B1	C2Gr. IV層		ミガキ	ミガキ	にぶい橙 7.5YR 6/4 褐灰 5YR 4/1	にぶい褐 7.5YR 5/3	浅黄褐色粒少 (5mm以下) 灰白色粒有 (2mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	
194	縄文土器	浅鉢	口縁部	B1	C3Gr. IV層		ミガキ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	にぶい黄褐 10YR 6/4	灰褐色粒一つ (2mm) 褐灰色粒多・灰白色粒多・黒色粒多 (1mm以下) 赤褐色粒多・透明粒多 (1mm以下)	
195	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B2	B4Gr. IV層		ナデ	ミガキ	褐灰 10YR 4/1	にぶい黄橙 10YR 6/4	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (1mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	外面に黒斑
196	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	B9Gr. IV層		工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐 10YR 6/4 褐灰 10YR 4/1	にぶい黄褐 10YR 6/4 黒褐 10YR 3/1	黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多・にぶい黄褐色粒多 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑
197	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A2	C8Gr. IV層		ナデ	ミガキ	にぶい黄 2.5Y 6/3 黒褐 2.5Y 3/1	にぶい黄橙 10YR 6/3 褐灰 10YR 4/1	灰白色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑
198	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	A9Gr. IV層		ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 5/3	にぶい黄橙 10YR 5/3	灰白色粒僅・透明光沢粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多 (微細)	外面にスス付着 補修孔
199	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B1	C2Gr. IV層		ナデ 風化が著しい	ナデ 風化が著しい	にぶい黄橙 10YR 7/4	橙 7.5Y 6/6	暗赤褐色粒僅・褐灰色粒僅・黒色粒有 (1mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	内外面に黒斑
200	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	B9Gr. IV層		貝殻痕文のちナデ	ナデ	浅黄 2.5Y 7/3	にぶい黄橙 10YR 6/3	灰白色粒有・赤褐色粒有 (1mm以下) 明褐灰色粒有・黒色粒有 (1mm以下)	推定口径 15.5 cm
201	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B2	C6Gr. IV層		工具による粗いナデ	ナデのちミガキ 風化気味	褐灰 10YR 4/1	にぶい黄 2.5Y 6/3	褐灰色粒僅・明褐色粒僅・灰白色粒僅 (3mm以下) 黒色粒多・透明粒多 (1mm以下)	外面にスス付着
202	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A2	B10Gr. IV層		工具ナデ	丁寧な工具ナデ	にぶい黄橙 10YR 6/4	浅黄橙 10YR 8/3	灰白色粒多・黒色粒多・明褐色粒多 (2mm以下) 明褐色粒多・透明粒多 (2mm以下)	口縁部に黒斑
203	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B2	D4Gr. IV層		工具ナデ	丁寧なミガキ	黒褐 10Y 3/1	黒褐 10YR 3/1	黒色光沢粒多・透明白色粒多 (1mm以下) 灰白色粒多・にぶい黄褐色粒多 (1mm以下)	内外面に黒斑 推定口径 36.4 cm
204	縄文土器	浅鉢	胴部	A1	B11Gr. IV層		貝殻腹縁によるナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	浅黄 2.5YR 7/4	灰白色粒少・黒色粒少 (2mm以下) 褐灰色粒少・透明粒少 (2mm以下)	外面にスス付着 内面に黒斑 内面に炭化物
205	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	B1	C2Gr. IV層		粗いナデ 組織痕	ミガキ	黒 10YR 1.7/1	黒 10YR 2/1	灰白色粒多・にぶい橙色粒 (2mm以下) 明褐灰色粒多 (2mm以下) 黒褐色粒有・透明粒有 (1mm以下)	外面にスス付着
206	縄文土器	浅鉢	口縁部 頸部～胴部	B1	C1Gr. IV層		ナデ 組織圧痕	ナデ ミガキ	黄灰 2.5Y 4/1 暗灰黄 2.5Y 5/2	暗灰黄 2.5Y 5/2 黄灰 2.5Y 4/1	灰白色粒僅 (3mm以下) 透明白色粒僅・黒色粒僅 光沢粒少 (微細) 透明白色粒僅	
207	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A1	B11Gr. IV層		丁寧なナデ	ナデ	浅黄 2.5YR 7/3	黄灰 2.5YR 5/1	角閃石僅 (2mm以下) 黒色光沢粒・灰白色粒多 (1mm以下)	内外面にスス付着
208	縄文土器	浅鉢	口縁～胴部	A1	A11Gr. IV層		貝殻痕文 粗いナデ 組織痕	ナデ	浅黄 2.5Y 7/3 黄灰 2.5Y 5/1	にぶい黄 2.5Y 6/3 黄灰 2.5Y 4/1	灰白色粒有・白色光沢粒有 (2mm以下) 透明白色粒有・黒色粒少 (1mm以下) 光沢粒有 (微細)	外面にスス付着 内面に黒斑
209	縄文土器	浅鉢	底部	A2	B10Gr. IV層		組織圧痕	ナデ	明黄褐 10YR 7/6	黒 2.5Y 2/1	白色粒多 (4mm以下) 灰白色粒少・黒色光沢粒少 (1mm以下)・光沢粒少 (微細)	内面に黒斑
210	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	C1Gr. IV層		組織圧痕	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	暗灰黄 2.5Y 5/2	透明粒多・黒色光沢粒多・透明光沢粒多 (微細) 灰白色粒多・浅黄褐色粒多 (微細)	
211	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	C1Gr. IV層		組織圧痕	ナデ	にぶい黄橙 10YR 7/4	褐灰 10YR 5/1 褐灰 10YR 4/1	黒色粒少 (2mm以下) 灰白色粒僅 (1mm以下) 光沢粒少 (微細)	内面に黒斑
212	縄文土器	浅鉢	胴部	B1	D1Gr. IV層		ナデのち刺突文 貝殻痕文	ミガキ	にぶい黄 2.5Y 6/3	黄灰 2.5Y 4/1	黒褐色粒有 (3mm以下) 灰白色粒多・透明光沢粒少 (2mm以下)	外面にスス付着
213	縄文土器	浅鉢	胴部	B2	C4Gr. IV層		ナデ 突起	風化が著しい	褐 7.5YR 4/6 暗灰黄 2.5Y 5/2	明黄橙 10YR 7/6 橙 7.5Y 6/6	黒色粒僅・灰色粒僅 (4mm以下) 透明白色粒有・灰白色粒少 (3mm以下) 雲母多・軟黄褐色粒僅 (2mm以下) 黒色光沢粒僅 (1mm以下)・光沢粒有 (微細)	

第7表 土器観察表 (7)

掲載番号	種別	器種	部位	区	出土位置 Gr.・層・ 遺構	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
						外面	内面	外面	内面		
255	土師器	壺	口縁～ 頸部	B2	IV層	横ナデ	ナデ 丁寧なへら削り	にぶい褐 7.5Y 5/4 橙 5YR 6/6	にぶい黄褐 10YR 5/3 にぶい黄褐 10YR 6/3	暗褐色粒少 (3mm以下) 黒褐色粒僅 (2mm以下) 透明光沢粒多 (微細)	推定口径 22.1 cm 外面にスス付着 内面に黒斑
256	須恵器	壺	胴部	B2	IV層	格子目タタキ 回転横ナデ	平行当て具痕	暗灰黄 2.5Y 5/2	灰オリーブ 5Y 5/2	黒色粒有・灰白色粒有・灰黄色粒 (微細)	
257	須恵器	壺	胴部	B1	C4Gr. IV層	平行タタキ	平行当て具痕	橙 5YR 6/6	橙 5YR 6/6	灰白色粒少 (1mm以下)	焼成不良
258	須恵器	壺	底部 付近	C	C3Gr. IV層	平行タタキ	平行当て具痕	暗灰黄 2.5Y 5/2	黄褐 2.5YR 5/3	黒色粒有・灰白色粒・浅黄色粒有 (微細)	
259	製塩土器	鉢	胴部	B2	B4Gr. IV層	ナデ	布目痕	明赤褐 5YR 5/6	にぶい赤褐 5YR 5/4	白黒混粒一つ (4mm) 雲母有 (3mm以下) 浅黄褐色粒多・灰白色粒多 (2mm以下)・橙色粒有 (1mm以下)	内面にひも状の圧痕 大隅半島産か

第8表 石器計測表

掲載番号	器種	出土区	出土 Gr.	石材	遺構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
15	楔形石器	A1	B12	チャート	IX	21	21	7	3
16	楔形石器	A1	A12	黒曜石 (腰岳産)	IX	22	25	8	4.2
17	磨敲石	B1	D2	砂岩	IX	122	102.5	57	1027.6
18	磨敲石	A1	A11	砂岩	IX	108	94	43	722.8
19	石匙	A1	B11	石英	IX	39	57	10	13.5
28	砥石	A2	D9	砂岩	SC11	188	332	181	14550
35	磨石	A2	C8	砂岩	SC23	42	41	28	62.5
36	磨石	A2	C8	砂岩	SC23	120	90	63	850.1
43	スクレイパー	B1	B3	黒曜石 (腰岳産)	SC36	25	18	6	2.9
47	石鏃	B1	B3	ホルンフェルス	SC40	26	18	4	1.8
88	磨敲石	B1	C3	砂岩	SC66	115	96	31	540.2
214	石鏃	B2	B4	チャート	IV	17	14	3	0.7
215	石鏃	A2	B9	ガラス質安山岩	IV	16	14.5	2.5	0.6
216	石鏃	B2	B5	チャート	IV	23	14	3	1
217	石鏃	B2	不明	ガラス質安山岩	IV	22	15	3	1.1
218	石鏃	A2	B9	チャート	IV	25	15	4	0.9
219	石鏃	B1	D1	緑色頁岩	IV	31	16	3	1.4
220	石鏃	A2	不明	チャート	IV	34	20	6.5	4.3
221	石鏃	B2	B5	黒曜石 (腰岳産)	IV	26	16	3	0.7
222	スクレイパー	B1	D2	チャート	IV	16	33	9	5.3
223	スクレイパー	B2	C9	頁岩	IV	53.5	58	9	25.5
224	スクレイパー	B2	C4	チャート	IV	45	32	12	13.6
225	楔形石器	A2	B7	チャート	IV	28.5	34	14	12.9
226	打製石斧	A2	不明	ホルンフェルス	IV	221	85	17	487.2
227	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	84	40	9	45
228	打製石斧	B2	不明	ホルンフェルス	IV	87	51	9	54
229	打製石斧	C	D8	砂岩	IV	142	46	16	101.1
230	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	85	50	9	54.8
231	打製石斧	A2	B10	ホルンフェルス	IV	70	67	11	86.2
232	打製石斧	B1	D2	頁岩	IV	96	61	10	76.4
233	打製石斧	A2	B9	ホルンフェルス	IV	77	45	12	58.4
234	打製石斧	A2	D9	ホルンフェルス	IV	144	82	18	253.4
235	打製石斧	B1	C3	頁岩	IV	105	57	10	63.8
236	磨製石斧	A2	不明	閃緑岩	IV	84	56	27	223.3
237	磨製石斧	C	B6	ホルンフェルス	IV	57	69	29	182.5
238	磨製石斧	A2	C8	ホルンフェルス	IV	101	32	17	76.7
239	磨製石斧	A2	不明	ホルンフェルス	IV	83	32	14	58.8
240	敲石	B1	E1	砂岩	IV	50	48	32	95.4
241	敲石	A2	B9	砂岩	IV	45	40	27	67.3
242	敲石	A2	B10	砂岩	IV	45	41	20	55.9
243	磨敲石	B2	B5	砂岩	IV	79	77	27	226.2
244	磨敲石	B1	C2	砂岩	IV	98	76	38	436.8
245	磨敲石	A2	不明	溶結凝灰岩	IV	120	90	49	796
246	磨敲石	B1	B2	砂岩	IV	66	89	36	260.2
247	磨敲石	B1	C1	砂岩	IV	60	85	42	334.2
248	磨敲石	A2	不明	溶結凝灰岩	IV	78	114	61	814.3
249	磨敲石	A2	B8	砂岩	IV	99	70	37	409.4
250	磨敲石	C	B6	砂岩	IV	76	106	63	703.7
251	磨敲石	B1	D3	砂岩	IV	86	110	62	773.4
252	磨敲石	B1	D3	砂岩	IV	94	76	32	233.7
253	石皿	B2	B4	砂岩	IV	263	194	123	7800
254	砥石	B1	B5	砂岩	IV	226	261	211	16250

第IV章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

上高遺跡の各遺構（SI10、SA2、SC68、SC41）から採取された炭化物4点について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定及び樹種同定である。

第2節 放射性炭素年代測定

1 試料と方法

測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を第9表に示す。

2 測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）で得られた¹⁴C濃度の同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（¹⁴C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第10表・図59に結果を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化して同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素（¹⁴C）年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。統計誤差（±）は 1σ （68.2%確率）である。

(3) 暦年代（Calendar Years）

暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 13、較正プログラムはOxCal 4.3である。

暦年代（較正年代）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ （68.2%確率）と 2σ （95.4%確率）で示した。（）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3 所見

加速器質量分析法（AMS）による年代測定の結果、No.1は8535 ± 30年BP（ 2σ の暦年代でBC 7596 ~ 7540年）、No.2は4440 ± 25年BP（BC 3328 ~ 3219, 3176 ~ 3159, 3122 ~ 3009, 2981 ~ 2938年）、No.3は3505 ± 25年BP（BC 1892 ~ 1752年）、No.4は2925 ± 25年BP（BC 1214 ~ 1030年）の年代値が得られた。

なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

第3節 樹種同定

1 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- (1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- (2) 試料を割折して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柃目、接線断面：板目）を作成
- (3) 落射顕微鏡（40 ~ 1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

2 結果

表5に同定結果、写真1に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となる木材構造の特徴を記す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な箇所と緩やかな箇所があり、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では、放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の特徴からマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。

(2) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が1～数列幅で、年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものとして大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、照葉樹林を構成する主要高木で、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30 m、径1.5 m以上に達する。

(3) カナメモチ属 *Photinia* バラ科

小型でやや角張った道管がほぼ単独で散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が晩材部で接線方向に連なる傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織は異性である。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。以上の特徴からカナメモチに同定される。カナメモチは、本州（東海以西）、四国、九州に分布する。常緑の小高木で、通常高さ5～10 m、径15～30 cmである。

(4) タール状物質 tar-like substance

木材の形質を呈しておらず、植物が高熱を受けたことによりタール状になったものと考えられる。タールは有機物の熱分解によって得られる粘り気のある油状の液体で、木タールは木炭を作るために木材を加熱することによって得られる抽出物のうち、水蒸気が冷えて液体状になった上澄み部分を除いた油状の部分をさす。いわゆる植物樹脂のヤニであり、マツやカバノキから得られるものが有名である。一方で、長野県大石遺跡（松谷 1976）鳥取県鳥浜貝塚（笠原 1981）やでは、タール状の炭化物を同定した結果、シソやエゴマの種実由来することが確認されている。本試料は、肉眼および顕微鏡観察から種実由来であり、その形状からクルミなど油分の多い堅果類の樹脂由来と由来する可能性が高いと考えられる。

3 所見

SI10の炭化物はタール状物質（堅果類の樹脂由来?）、SA2の炭化材はコナラ属アカガシ亜属、SC68の炭化材はカナメモチ属、SC41の炭化材はマツ属複維管束亜属（アカマツ、クロマツ）と同定された。コナラ属アカガシ亜属は、堅硬な材であり建築材などに広く用いられる。カナメモチ属は、報告例は少ないが、極めて硬い材であることから、農具の柄、扇の要、櫛、牛の鼻環などの強い力が加わるものに用いられる。マツ属複維管束亜属は、木理がやや通直で、重硬で水湿によく耐え腐りにくく、建築部材の中でも水湿の影響がある柱、礎板などに用いられる。また、縄文時代には建築部材に利用された例もある。いずれも、温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

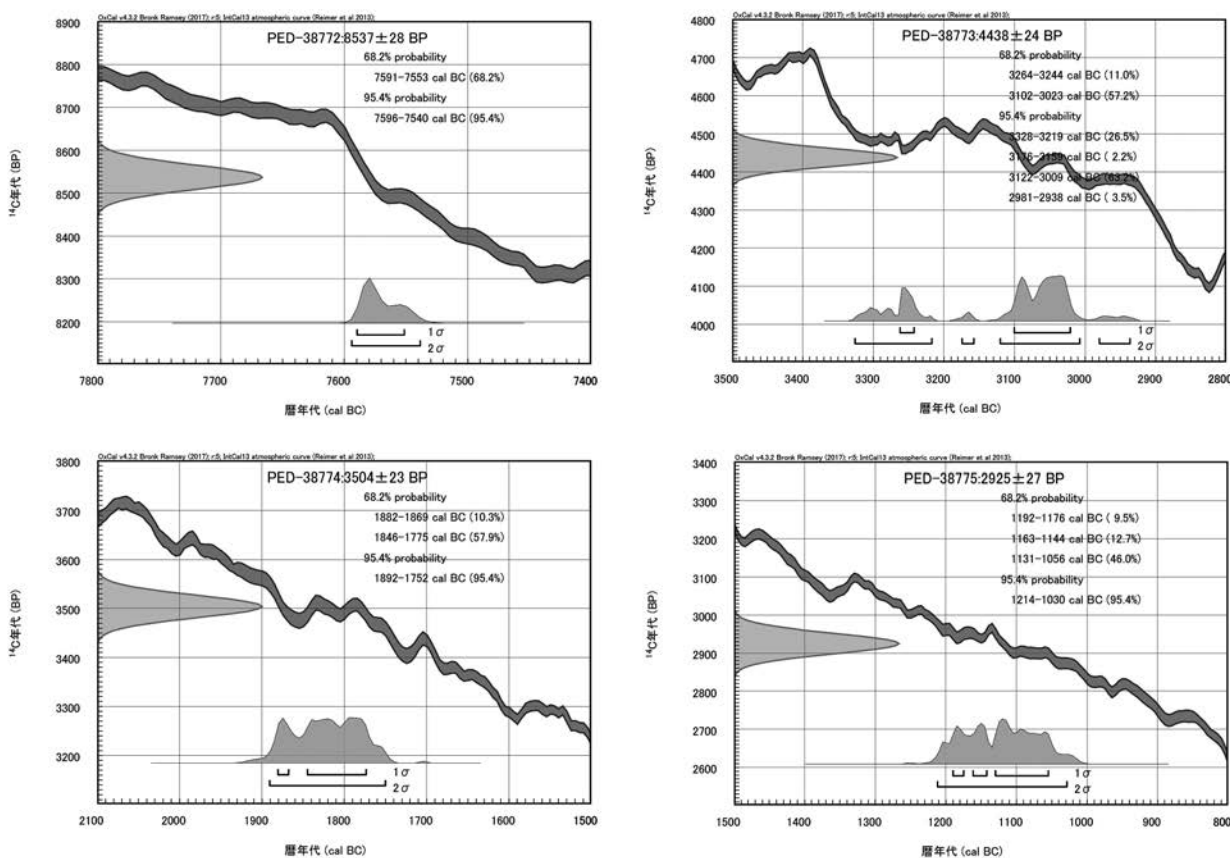
第9表 測定試料の詳細と方法

試料No.	遺構	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	SI10	炭化物 (タール状物質)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 2	SA2	炭化材 (コナラ属アカガシ亜属)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 3	SC68	炭化材 (カナメモチ属)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 4	SC41	炭化材 (マツ属複雑管束亜属)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

第10表 放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代: 年 BP (暦年較正用)	暦年代 (較正年代): cal-	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 1	38772	-26.61 \pm 0.20	8535 \pm 30 (8537 \pm 28)	BC 7591-7553 (68.2%)	BC 7596-7540 (95.4%)
No. 2	38773	-28.59 \pm 0.21	4440 \pm 25 (4438 \pm 24)	BC 3264-3244 (11.0%) BC 3102-3023 (57.2%)	BC 3328-3219 (26.5%) BC 3176-3159 (2.2%) BC 3122-3009 (63.2%) BC 2981-2938 (3.5%)
No. 3	38774	-28.45 \pm 0.25	3505 \pm 25 (3504 \pm 23)	BC 1882-1869 (10.3%) BC 1846-1775 (57.9%)	BC 1892-1752 (95.4%)
No. 4	38775	-28.61 \pm 0.23	2925 \pm 25 (2925 \pm 27)	BC 1192-1176 (9.5%) BC 1163-1144 (12.7%) BC 1131-1056 (46.0%)	BC 1214-1030 (95.4%)

BP : Before Physics (Present) AD1950 基点, cal : calibrated, BC : 紀元前



第59図 暦年較正結果

第 11 表 樹種同定結果

試料番号	遺構	結果 (学名/和名)	備考
1	SI10	タール状物質 (堅果類の樹脂由来?)	
2	SA2	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属	
3	SC68	<i>Photinia</i> カナメモチ属	
4	SC41	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複維管束亜属	

引用文献

笠原安夫 (1981) 鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状塊について, 鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査 2, 福井県教育委員会, p. 65 ~ 88.

松谷暁子 (1976) 長野県諏訪郡原村大石遺跡出土タール状炭化種子の同定について, 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その 1, 富士見町その 2—, 長野県教育委員会, p. 141-143, 図版 p. 135-140.

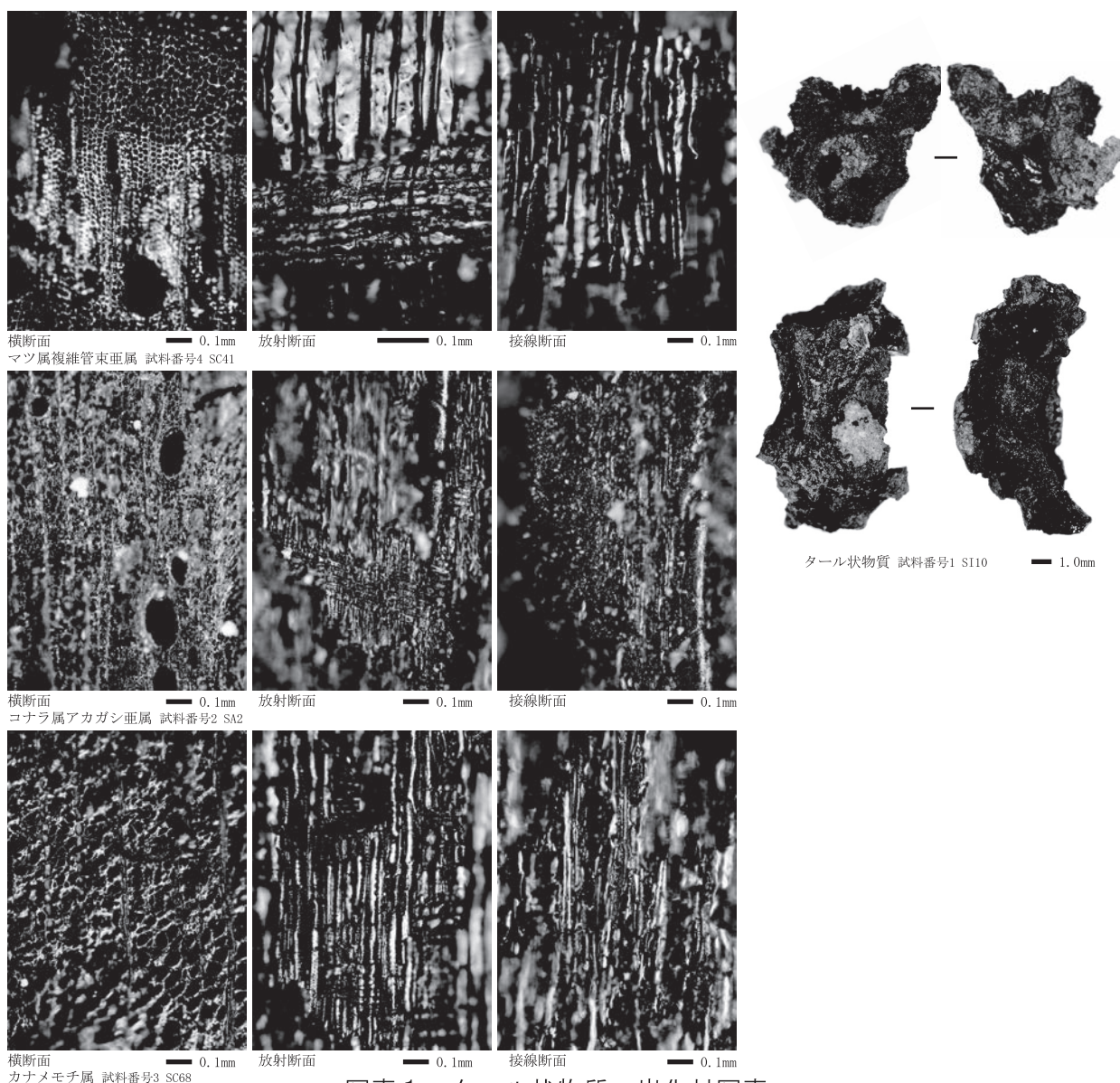


写真 1 タール状物質・炭化材写真

第V章 総括

今回の発掘調査では、縄文時代早期から古代～中世にかけての遺構や遺物が数多く確認された。そこで、本章では、確認された各時代の遺構・遺物をもとに、それぞれの時代の様相について、若干の考察を加え、まとめとしたい。

第1節 縄文時代早期

上高遺跡の所在地である都城市梅北町を含む都城盆地南部の遺跡においては、桜島末吉テフラを含む黒褐色土中あるいはその下位層で縄文時代早期の遺構・遺物が検出される例が多い。本遺跡においても、集石遺構24基、土坑2基が検出された。

本遺跡の集石遺構は、調査区中央の谷を挟んで北側と南側に大きくわかれ、遺構の群集には粗密がみられたが、その検出レベルに高低差はない状況である。さらに、集石遺構(SI10)の炭化物について、放射性炭素年代測定を行ったところ、今から約9600年前頃という結果が得られたことから、各集石遺構間にはさほど大きな時期差はないと考えられる。

遺構に伴う遺物については、土坑(SC25)出土の塞ノ神式土器(第16図1)のみであるが、包含層中より加栗山式(2)、石坂式(3・4)、下剥峯式土器(6・7)を始め、押型文土器のうち楕円形押型文(8・9)や手向山式土器(10～12)、さらには塞ノ神式土器(13・14)が出土している。全体的に小片かつ少量の出土であるなかで、塞ノ神式土器については、器形全体が判明する資料が比較的多い。

塞ノ神式土器のうち、1は横澤滋氏のいう塞ノ神Ⅲ式の中段階、14は塞ノ神Ⅱ式の中段階に対応するものと考えられる(横澤滋2018)。なお、13は口縁部が短く屈曲し、やや張りのある胴部をもつ器形に、外面に沈線文と網目状捺糸文が施文される資料である。網目状捺糸文の施文のあり方に着目すると、Ⅰ式とも考えられるが、器形を重視するならば、塞ノ神Ⅱ式の中段階にあたるものとしておきたい。

このように本遺跡では、縄文時代早期でも、前葉から後葉までの複数の土器型式が存在するが、集石遺構については、検出状況ならびに放射性炭素年代測定の結果から、前葉を中心とする時期が考えられる。加えて土坑は、後葉の時期となることから、早期前葉～後葉にかけて断続的な人間活動を認めることができる。

第2節 縄文時代前期～中期

縄文時代前期～中期の遺構として、竪穴建物跡2軒、土坑13基が検出された。

両遺構は、調査区を南西方向に延びる尾根筋上に主に分布しており、遺物は竪穴建物跡(SA1)から石匙が出土したのみであるため、遺物から遺構の所属時期を推定するのは困難である。ただし、竪穴建物跡については、竪穴埋土にアカホヤ火山灰を含んでいること、竪穴建物跡(SA2)の床面近くより出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果(今から約5100年前頃)などから縄文時代前期～中期の時期とする。他方、陥し穴状遺構を含む土坑に関しても検出状況(霧島御池軽石層で検出されなかった)、遺構埋土のサンプリング結果、土坑(SC75)と風倒木痕との切り合い関係(図版8:土坑が霧島御池軽石を含む風倒木痕に切られていること)などから竪穴建物跡と同じく縄文時代前期～中期と踏まえておきたい。

ただし、陥し穴状遺構の埋土(SC68)から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果は後期の年代(約3800年前後)であることや、陥し穴状遺構の平面形は前期～中期が長方形、後期～晩期が円形のタイプが多いことが指摘されている(松尾2004)ため、本遺跡の陥し穴状遺構は、後期に属する可能性も否定できない。

本遺跡周辺においては、田谷・尻枝遺跡（都城市教委 1997）で平面形が長方形の陥し穴状遺構（SC25）が霧島御池軽石直下より検出される一方、梅北佐土原遺跡（都城市教委 2007）では、円形プランの陥し穴状遺構（JSC1）が縄文時代前期～中期の所産と報告されている。この梅北佐土原遺跡は、本遺跡から北へ約 1 km の場所に位置し、陥し穴状遺構の形態や埋土の状況は本遺跡例と極めて近似している。よって、本遺跡の陥し穴状遺構は、霧島御池軽石降下以前の縄文時代前期～中期の時期であると解釈され、SC68 出土の炭化物は後世の混入と理解しておきたい。すなわち霧島御池軽石降下以前の陥し穴状遺構の平面形には長方形と円形のプランが併存する可能性が高く、平面形の差は狩猟対象動物の違いと対応するものと考えておきたい。

このように、前期～中期の時期幅において、竪穴建物と陥し穴状遺構・土坑が存在したことが読みとれるが、竪穴建物と陥し穴状遺構などの関係性については、陥し穴状遺構の性格を鑑みると集落（竪穴建物など）から狩猟の場（陥し穴状遺構）、もしくは狩猟の場から集落へという遺跡の変遷が想定される。

第 3 節 縄文時代後期の遺物

縄文時代後期の遺物は、確認されなかったが、遺物包含層（IV層）からは、後期に属する縄文土器が少量かつ小片で出土した。そのうち型式的特徴から岩崎式（93～94）、指宿式（97～103）、松山式（104）、丸尾式（105）、中岳Ⅱ式（106～111）などがある。調査区外に当該型式期の集落等が存在する可能性が考えられ、実際に本遺跡から谷を挟んで北に約 300～600 m 離れた嫁坂遺跡 A・B 区（県埋文セ 2019）では、縄文時代後期の集落跡が検出されている。

第 4 節 縄文時代晩期の遺構と遺物

遺構とその内容

縄文時代晩期の遺構としては、土坑が 31 基検出され、調査区中央の谷を挟んで南北に分布している。検出された土坑のうち、27 基から遺物が出土し、特に調査区北西部の土坑群に集中している。

土坑から出土した遺物は、黒川式土器（堂込 1997、宮地 2008、吉本 2012）を中心とするものがほとんどであるが、入佐式の新段階（堂込 1997、宮地 2008）に対応するもの（29・76）もある。土坑出土の黒川式土器は、口縁部外面に突帯をもつ深鉢（44・52・58・62）、頸部が短く、胴部が張り出す浅鉢（26・32・39・60）、玉縁状に肥厚した口縁部をもつ浅鉢（39・46・70）といった特徴をもつ。これらの特徴に着目すると、黒川式の中段階から新段階に相当する土器が多いが、24・34・64・82・92 など古段階～中段階の特徴をもつものもある。細分型式の判別が可能な土器が出土した土坑については表 12 のように一覧表化した。

土坑内出土土器のうち、細分型式の新しいタイプを土坑の所属時期とするならば、入佐式の新段階（SC61）、黒川式の中段階（SC11・23・59・65・71）、新段階（SC1・24・40・41・60・66）にわけられる。各段階とも調査区全体に広がっているが、SC59・61・65 や SC40・41・60・66 のように各段階の群集が認められる。

包含層出土の黒川式土器は中段階から新段階のものが多く、黒川式の古段階のものは、数少ない。土坑出土土器からは黒川式の古段階に属するものは現段階では見いだせず、存在したとしても全体の基数からすると少数と考えられる。

また、土坑の性格・機能については、不明な点が多いが 41・43 号土坑などは土坑堆積および遺物出土状況から考えると、廃棄などが想定される。なお、土坑とセットになるであろう竪穴建物跡は検出されなかったが、調査区内の IV 層削平範囲（第 4 図）もしくは、調査区周辺に存在した可能性が推測される。

第12表 各土坑における入佐式・黒川式土器の細分型式

遺構	土器型式	型式の特徴	備考
SC1	黒川式 中～新段階 (20)	口縁部が直立する	
SC11	黒川式 古～中段階 (24)	波状口縁	
	黒川式 中段階 (25)	口径と胴部最大径が近似する	
	黒川式 中段階 (26)	胴部最大径が口径を上回る	
SC23	入佐式 新段階 (29)		
	黒川式 古～中段階 (34)	口縁部が直線的にひらく	
SC24	黒川式 中～新段階 (39)	口縁端部が玉縁状 胴部最大径が口径を上回る	
SC40	黒川式 新段階 (44)	口縁部外面に断面三角形の突帯	SC41 と接合関係
SC41	黒川式 中～新段階 (48～50)	口縁部付け根の屈曲度合い	¹⁴ C年代測定値(炭化材): 2925 ± 25年 ¹⁴ C BP SC40 と接合関係 (62・64)
	黒川式 新段階 (52・53・58・62)	口縁部外面に断面三角形の突帯	
	黒川式 古～中段階 (64)	頸部が長く、大きく外方にひらく口縁部	
SC59	黒川式 中段階 (70)	口縁端部が玉縁状	
SC60	黒川式 新段階 (72)	口縁部が立ち上がり気味	
SC61	入佐式 新段階 (76)	頸部の蝶ネクタイ状貼付文	
SC65	入佐式新～黒川古段階? (81)	長胴を呈する	
	黒川式 古～中段階 (82)	口縁部が僅かに内湾	
SC66	黒川式 新段階 (87)	口縁部が内湾気味	
SC71	黒川式 古～中段階 (92)	口縁部が直線的にひらく	SC65 と接合関係

隣接遺跡（嫁坂遺跡）との関連性

嫁坂遺跡の発掘調査では、A～C区において縄文時代後期～晩期までの集落跡が確認されており、特に今回の調査区と谷を挟んだC区（第3区）では、主に晩期初頭の竪穴建物跡が検出され、入佐式土器を中心とした縄文土器が遺構内より出土している（県埋文セ2019）。一方、今回の調査区では、入佐式に後続する黒川式期の土坑群が検出されている。嫁坂遺跡の調査報告者は、嫁坂遺跡B区を中心として居住区域がC区周辺へと広がっていったものと推測されるとしており（甲斐2019）、今回の調査成果は縄文時代後期～晩期の嫁坂遺跡一上高遺跡における居住区域の移り変わりの一端を示していると考えられる。

第5節 古代の遺物

今回の調査では、古代に属する遺構は検出されず、遺物に関しても土師器及び須恵器などが少量出土したのみである。これは、過去の造成等による旧地形の改変によるものが大きいと考えられる。土師器甕(255)は口縁部の屈曲具合と内面のヘラケズリ調整のあり方から、都城市肱穴遺跡（都城市教委1999）のA-SA03出土遺物と類似することから9世紀後半代に位置づけられる。須恵器甕(256～258)の内面は平行当て具痕から8～9世紀に位置づけられる（今塩屋・秋成2006）。

第6節 中世の遺構

中世の遺構としては、道路状遺構が10条（SG1～SG10）検出された。ほとんどの道路状遺構は調査区南側の谷地形から丘陵尾根側に向かって同一方向（北北東）に延伸する。これらの掘削時期は不明であるが、桜島文明軽石（SZ-3、AD1471）の降下により埋没するため、15世紀後半以前には存在したものとみられる。

加藤徹氏によれば都城市内等における桜島文明軽石が堆積した道路状遺構は、13～15世紀頃と想定される

ものが多いが、掘削時期は不明なものが多いとしている。そのなかでも大年遺跡の事例は、8世紀から15世紀ごろまで、複数回の掘り直しを行いながら使用されたとしている（加藤徹 2016）。本遺跡の場合は、互いに複数の道路状遺構が隣接し、互いに重複するものであり、明確な掘り直し等は認められないことから、同一遺構の長期的な利用というより、付け替えや新設の繰り返しを示していると考えられる。今回の場合も掘削時期は不明であるが、桜島文明軽石降下までのある期間においては、谷下と丘陵頂部（集落域など）をつなぐ生活道的役割を有していたものと考えられる。同様な事例は、嫁坂遺跡C区でも確認されている。

第7節 結語

今回の発掘調査は、都城盆地南縁に広がる丘陵上シラス台地上位面の丘陵頂部を対象とするものであった。縄文時代早期の集石遺構群から中世の道路状遺構まで、南九州の火山活動を背景に遺跡の性格を変化させながら断続的に活動していく生活の痕跡を見いだすことができた。また、検討を深めることはできなかったが、縄文時代晩期における近隣遺跡との関連性を垣間見ることができた。このように、上高遺跡をはじめとした都城志布志道路関連の発掘調査により、都城盆地南部地域の歴史的な地域相の一端を捉えることができたことは大きな成果であった。今回の発掘調査の成果が、今後の調査・研究の一助になることを期待したい。

引用・参考文献

- 秋成雅博・今塩屋毅行 2006 「松ヶ迫窯跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
- 甲斐尚和 2019 「第VI章 第3節 3集落の変遷」『嫁坂遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター 第249集
- 加藤徹 2016 「第IV章 第4節 古代～中世の遺構について」『大年遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター 第237集
- 柴畑光博 1989 「中岳Ⅱ式土器の再検討—東南部九州におけるある縄文土器の型式組列—」『鹿児島考古』第23号 鹿児島県考古学会
- 堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』第31号
- 日高広人・柳田裕三 2003 「宮崎県の集石遺構と炉穴」『九州縄文時代の集石遺構と炉穴』第13回九州縄文研究会 宮崎大会
- 松尾有年 2004 「宮崎県のおとし穴状遺構」『九州における縄文時代のおとし穴状遺構』第14回九州縄文研究会 鹿児島国分大会
- 宮地総一郎 2008 「黒色磨研土器、総覧 縄文土器」『同書刊行会』
- 横澤滋 2018 「平椀式・塞ノ神式土器—系統編年の現状」『九州の縄文時代早期後葉の文化』28回九州縄文研究会 佐賀大会
- 吉本正典 2012 「黒川式土器の歴史的な位置」『九州考古学』第87号 九州考古学会
- 都城市史編さん委員会 2006 『都城市史』資料編 考古 都城市
- 都城市教育委員会 1997 『田谷・尻枝遺跡』「都城市文化財調査報告書」第38集
- 宮崎県都城市教育委員会 1999 『肱穴遺跡』「都城市文化財調査報告書」第47集
- 宮崎県都城市教育委員会 2007 『梅北佐土原遺跡』「都城市文化財調査報告書」第76集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011 『梅北針谷遺跡』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第204集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016 『中床丸遺跡（第一次・二次）』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第239集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2016 『笹ヶ崎遺跡第一次～第三次調査』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第240集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2018 『高樋遺跡』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第243集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2019 『嫁坂遺跡II』「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第249集

写真図版



上高遺跡から霧島山を望む



上高遺跡周辺地形（上空より）

図版 2



調査区から都城中心市街地を望む



調査区から鹿児島県志布志市方面を望む



上高遺跡全景（縄文時代早期遺構）

図版 4



25号土坑遺物出土状況（北より）



10号集石遺構検出状況（東より）



12号集石遺構検出状況（北西より）



16号集石遺構検出状況（東より）



21号集石遺構検出状況（東より）



23号集石遺構検出状況（東より）



24号集石遺構検出状況（西より）



集石遺構検出作業の様子（2017. 冬）



縄文時代前期～中期の遺構群（調査区から南西に延びる谷を望む）

図版 6



1号竪穴建物跡検出状況（南西より）



1号竪穴建物跡完掘状況（北東より）



2号竪穴建物跡検出状況（北より）



2号竪穴建物跡土層断面（南東より）



2号竪穴建物跡全景（北東より）



2号竖穴建物跡 柱穴 (P2 西より)



2号竖穴建物跡 貼床除去 (東より)



27号土坑土層断面 (南より)



27号土坑完掘状況 (南より)



68号土坑検出状況 (東より)



68号土坑完掘状況 (西より)



調査区基本層序 (東から)



樹根除去作業の様子 (2017. 夏)

図版 8



72号土坑土層断面（南より）



72号土坑完掘状況（南より）



72号土坑精査の様子



75号土坑と風倒木痕の検出状況（東より）



75号土坑土層断面（北より）



74・75・77号土坑完掘状況（北より）



発掘作業の様子（2018. 初夏）



上高遺跡全景（縄文時代晩期遺構）

図版 10



縄文時代晩期の土坑群（調査区中央付近）



1号土坑検出状況（北より）



1号土坑完掘状況（東より）



11号土坑遺物出土状況（南西より）



11号土坑土層断面（南西より）



23号土坑遺物出土状況（南より）



23号土坑完掘状況（南より）



40号土坑遺物出土状況（北東より）



40号土坑完掘状況（東より）



41号土坑遺物出土状況（東より）



41号土坑完掘状況（東より）



65号土坑遺物出土状況（北西より）



66号土坑遺物出土状況（北より）

図版 12



中世の道路状遺構全景（南より）



道路状遺構から調査区南方向を望む



道路状遺構検出状況（北より）



道路状遺構土層断面 1 (SG7・9・6)



道路状遺構土層断面 2 (SG7)



波板状凹凸面検出状況 (SG6)

図版 13 縄文時代早期・前期～中期の遺物



SC25 出土土器（縄文時代早期）



縄文時代早期 包含層出土土器（1）



縄文時代早期 包含層出土土器（2）



縄文時代早期 包含層出土土器（3）



縄文時代早期・前期～中期の石器

図版 14 縄文時代晩期の遺構出土遺物



SC1 出土土器



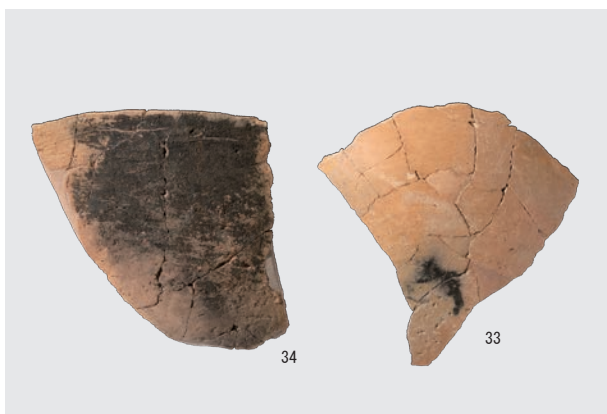
SC11 出土土器 (1)



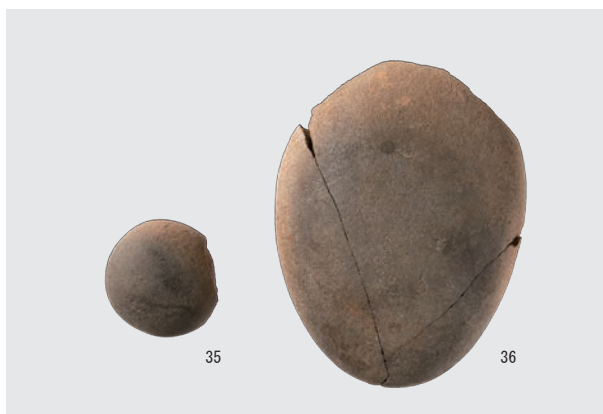
SC11 出土土器 (2)



SC23 出土土器 (1)



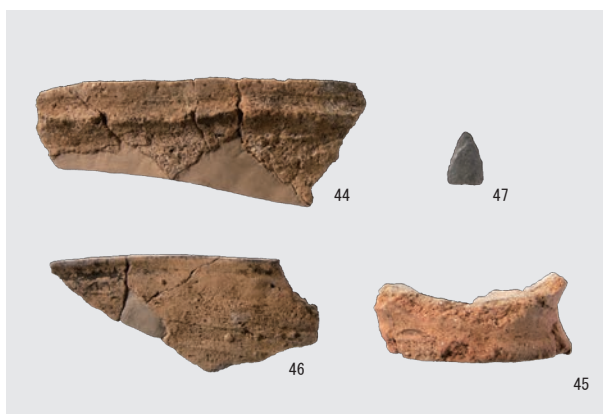
SC23 出土土器 (2)



SC23 出土石器



SC24・34・36 出土土器・石器



SC40 出土土器・石器

図版 15 縄文時代晩期の遺構出土土器



SC41 出土土器 (1)



SC41 出土土器 (2)



SC41 出土土器 (3)



SC41 出土土器 (4)



SC41 出土土器 (5) (焼成時破裂痕)

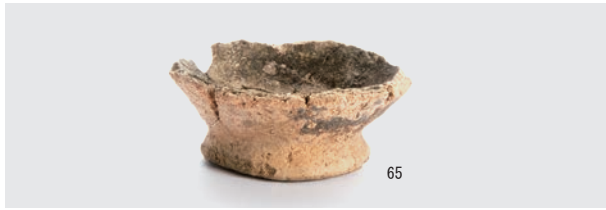


SC41 出土土器 (6)



SC41 出土土器 (7)

図版 16 縄文時代晩期の遺構出土土器



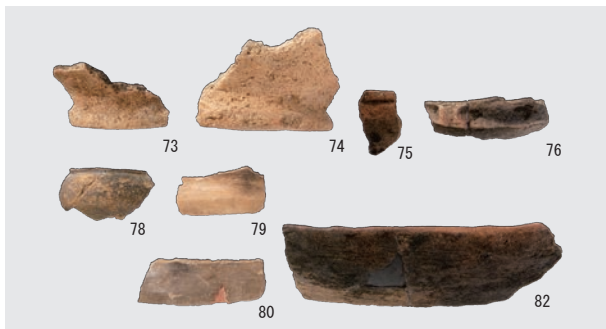
SC43 出土土器



SC55・57 出土土器



SC59 出土土器



SC61・65 出土土器 2



SC60 出土土器



SC66 出土土器・石器

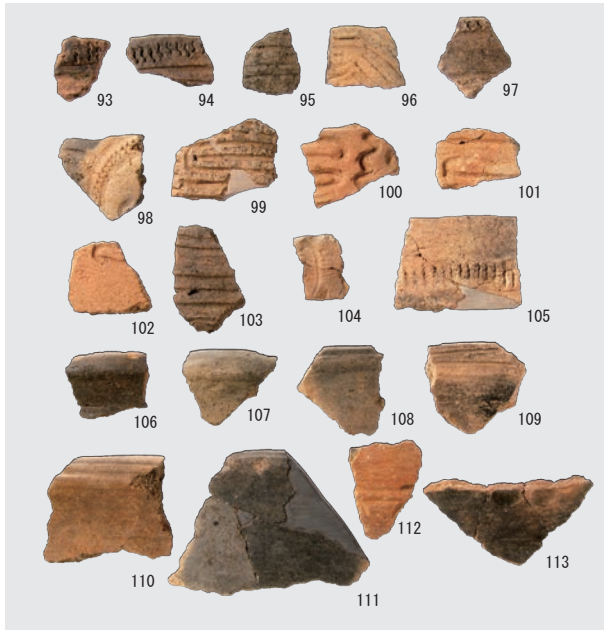


SC65 出土土器



SC67・71 出土土器

図版 17 縄文時代後期～晩期の土器



縄文時代後期 包含層出土土器



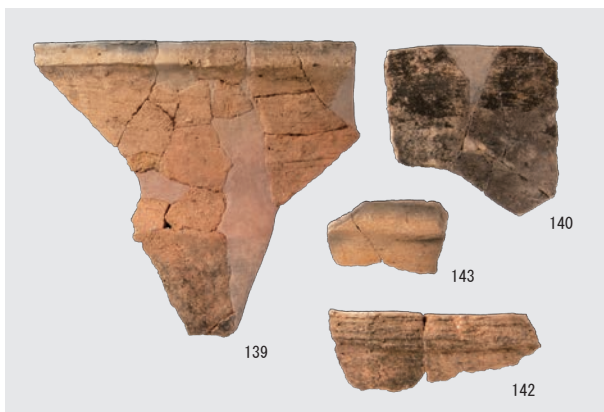
縄文時代晩期 包含層出土土器 (1)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (2)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (3)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (4)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (5)

図版 18 縄文時代晩期の土器



縄文時代晩期 包含層出土土器 (6)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (8)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (10)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (7)

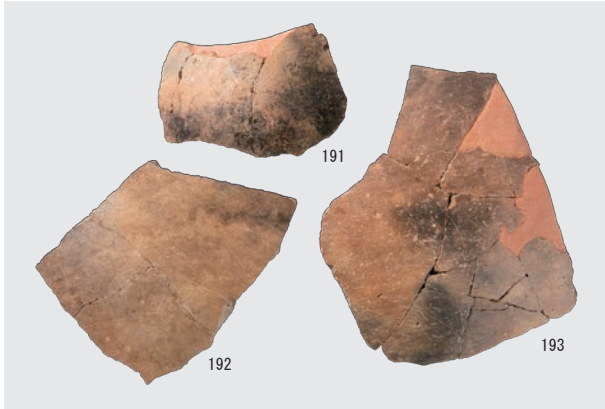


縄文時代晩期 包含層出土土器 (9)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (11)

図版 19 縄文時代晩期の土器



縄文時代晩期 包含層出土土器 (12)



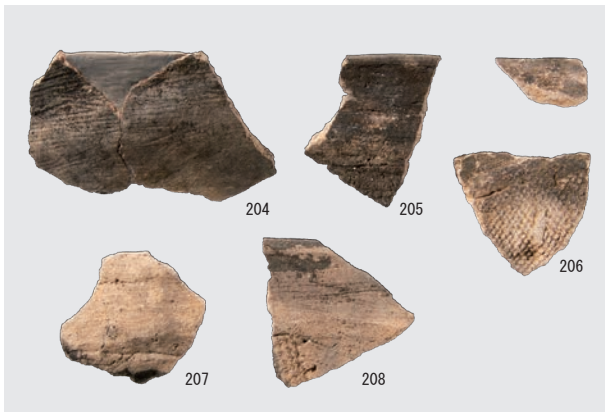
縄文時代晩期 包含層出土土器 (13)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (14)



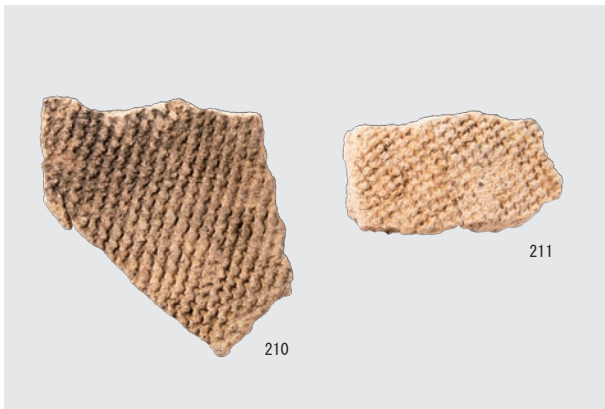
縄文時代晩期 包含層出土土器 (15)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (16)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (17)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (18)



縄文時代晩期 包含層出土土器 (19)

図版 20 縄文時代後期～晩期の石器・古代の遺物



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器 (1)



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器 (2)



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器 (3)



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器 (4)



縄文時代後期～晩期 包含層出土石器 (5)



古代の遺物

報告書抄録

ふりがな	かみたかいせき							
書名	上高遺跡							
副書名	県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 254 集							
編著者名	平井 祥蔵							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 880-0812 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2020 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみたかいせき 上高遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやこのじょうし 都城市 うめきたちよう 梅北町 10520 - 6 ほか	45202	7019	31 度 39 分 06 秒 付近	131 度 0 3 分 18 秒 付近	2017. 5. 8 ～ 2018. 2. 28 2018. 4. 16 ～ 2018. 7. 4	約 5, 400 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上高遺跡	散布地	縄文時代早期 前～中期 後～晩期 古代～中世	集石遺構 土坑 堅穴建物跡 土坑 陥し穴 土坑	24 基 2 基 2 軒 8 基 5 基 31 基	縄文土器・石器 石器 縄文土器・石器 須恵器・土師器 製塩土器	縄文時代早期の遺構は、緩斜面地に集石遺構群集が検出された。 縄文時代前期～中期の遺構として堅穴建物跡及び陥し穴状遺構を含む土坑が検出された。 調査区南側の谷より、調査区中央の丘陵尾根側に向かう斜面地において、道路状遺構が検出された。		
要約	上高遺跡は、都城盆地南縁に広がる丘陵上シラス台地上位面の丘陵頂部に立地する遺跡である。調査の結果、縄文時代早期の集石遺構群、前期～中期の堅穴建物跡や陥し穴状遺構、後期～晩期の土坑群、中世の道路状遺構が確認され、遺跡の性格を変化させながらも断続的な土地利用のあり方が読みとれる。特に、縄文時代晩期においては、黒川式土器を中心とした遺物が、土坑や包含層より数多く出土しており、晩期後半期における近隣遺跡間の動向を考えるうえで重要な成果が得られた。							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 254 集

上高遺跡

県道飯野松山都城線（都城志布志道路）金御岳工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3

2020年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880 - 0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 宮崎紙工印刷株式会社

〒 880-0912 宮崎市大字赤江字飛江田 931 番地

TEL 0985(78)2324 FAX 0985(78)5162

Miyakonojo City

Kamitaka Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center

vol.254

2020

Miyazaki Prefectural Archaeological Center